

if物語 市丸ギンの息子

フ瑠ラン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、市丸ギンが生きていたら。

もしも、乱菊との恋が結ばれていたら。

もしも、市丸ギンの息子がいたら。

もしも、原作とは違うパラレルワールドがあれば。

もしも——市丸ギンの息子が原作の世界に行つて、
真実を知つたら？

そんな沢山のもしもある世界。

目次

本編

ifの始まり	1
市丸碧	19
消えたボクの息子	33
市丸碧の焦燥	50
市丸碧の性格	63
市丸碧の風邪	80
平子真子現世へ行く	90
市丸碧と市丸ギンの怒り	100
平子真子の悩み	115
市丸碧の斬魄刀	130
バカ二人、追いかけて	137

上司が消えるトキ①	151
上司が消えるトキ②	172
妖怪——アヤカシ	185
親子	196
旅禍	212
殺意と怒り	224
沢山の違和感	238
「創造主サマ」と藍染	246
朽木ルキア	253
悲痛な叫び、そして願い	263
生きていた	273
何もない	290
戦い	301

ifの終わり

番外編

結婚

子供の名前

市丸ギンの誕生日

松本乱菊の誕生日

消えた碧を探して

市丸碧の誕生日

次回のif物語

320

332

346

356

363

370

382

398

本編

ifの始まり

「ギン!!どこ行つてたのギン!!それ、死神の服じゃない…!どこでそんなもの…」
「決めたんや。ボク、死神になる。死神になって変えたる。乱菊が泣かんでも済むようにしたる」

ボクの決意。ぼくが死神になった理由の1つ。ボクは、ボクの世界の中心にはいつも乱菊がおった。乱菊の為に全て行動にうつしとった。けど…

「ギン!!」

あかんかった。結局、乱菊のとられたもん取り返されへんかった。ああ、やっぱり

——謝つといて

——良^えかった

顔に水が流れる。ボクのやない、乱菊のや。泣かんで、乱菊。ボクは乱菊泣かすため死神になったんやない。泣かせないためや。

ああ、体が動かん。どうしたら、ええんや。乱菊の涙さえ拭うこともできん。

ああ、だめやなあ、ボク。何も乱菊のために出来とらんやないの。ここ何百年全て棒に振つてしようたわ。

ああ、黒崎一護。強い眼になつた。良^えかった。今のキミになら任せて殞^いける——。

こうして、ボクは一生と言う幕を閉じた、と思つていた。

「ギン、ギン、ギン!!」

「ら……んぎく……っ」

「ギン!!」

何故かボクは目が開けられて、乱菊の顔も見える。乱菊と喋れる。…何故や?ボクは死んだはずや……。

「目を覚まされましたか？市丸元隊長」

「卯ノ花隊長…」

卯ノ花隊長はボクを見てニコリと微笑むと「松本副隊長が血だらけになって貴方を連れてきた時は流石の私でも少しびっくりしてしまいました」と言った。

「アンタがボクを助けてくれはったんですか…」

「いいえ、違いますよ。市丸元隊長。松本副隊長が私の元に貴方を連れてこなければ助けれなかつた命でした。貴方を助けたのは松本副隊長ですよ。お礼なら是非、松本副隊長に言つて上げて下さい」

乱菊の方を向くと乱菊は涙を溜めてボクを見ていた。そんな乱菊に驚くけどそんな顔は出さんで笑顔を作り言った。

「ありがとう、乱菊」

「ギン!!」

乱菊はボクに抱きついてそして泣きながら言った。

「当たり前じゃない！ギンはいつも行き先を告げずにどこか行っちゃうんだもの！もう、待つてるだけなんて嫌！それに…私の元に帰って来ないなんてもつと嫌だし許さないんだから！」

「…怖いなあ乱菊は」

トン、トン、と規則正しく乱菊の背中を叩くと更に強い力で乱菊は抱きついてきて泣いた。声を上げて泣いた。乱菊が強くボクを抱き締める様はまるでもうボクを離さんと言っているかのようで少し嬉しくて恥ずかしかった。

「もう、もう、絶対に離さないんだから！勝手に私の前から居なくなること許さないんだから！」

「ああ。ボクもや。もう乱菊の元から離れんし離さへん。また、昔みたいに一緒に暮らそう」

「当たり前よ!!」

ボクと乱菊の誓い。もう絶対に離さんし離れん。ボクは乱菊にそう誓った。乱菊はまだまだ仕事が残ってるらしくカンカンに怒り狂った日番谷隊長はんに連れていかれた。「ギンく!!」なんて叫んでたけどボクは知らんぷり。

「では、落ち着いたところですので、市丸元隊長。貴方に総隊長からの伝言をお伝えします」

「…伝言？」

「ええ。ついこの前まで尸魂界は大変でしたから。総隊長もお忙しいのです。だから市丸隊長が目覚ましたら処罰についての伝言を頼みたい、と」

卯ノ花隊長は一息つくくとニコリと笑って言った。

「安心してください。市丸隊長が死ぬことはありませんよ。松本副隊長がかなり抗議した結果です。では、処罰を言います。市丸元隊長、貴方は尸魂界追放とします」

「…軽くありまへんか？ボクの処罰」

「先程も言ったでしょう。松本副隊長の抗議があつた、と。それに平子隊長も抗議した

んです」

「平子…隊長……？」

「ええ。藍染を投獄した後、一部の人はまた、尸魂界に戻って来ました。平子隊長もその一人です。平子隊長は総隊長に「自分の好きな女護るために仕方なくやったんや。凄いやろ、俺の元部下は。格好ええやろ」って永遠と貴方の事について語っておられましたよ」

「何で、そんな事…。あの人はボクを恨んでる筈やろ？ 仮にもボクは藍染に加担しとった。何で助けるんや…」

「私も、格好いいと思いますよ。大切なものを護るため、取り返すために貴方は戦いました。何かを護るためには何かを犠牲にしなければならぬ時があります。それを知っているからこそ、平子隊長は総隊長に抗議をしたのでしょう。それに…せつかく助かった命。それを粗末にするなんて私が赦しません」

「なんや、卯ノ花隊長も抗議してくれはったんですか」と笑うと卯ノ花隊長は「当たり前です」と言った。当たり前、か。ボクには出来ひんかった。死ぬ覚悟もした。なのに「当たり前」でボクを助けて更には抗議までしてくれた卯ノ花の人が凄いとボクは思う。卯ノ花隊長だけやない。平子隊長だってそうや。あの人だって今回ボクを助けてくれ

はった。…後で礼言わなあかなあ。

「次に貴方の体についてです」

「ボクの体…？」

ボクが聞くと卯ノ花隊長は「ええ」と頷いた。

「貴方の体は藍染にボロボロにされました。私の力で一命をとりとめ、助かりましたが全てを治すことは流石の私でも…」

「別にええよ。また、乱菊と喋れたんや。治してくれはっただけでも感謝ですわ」

「激しい運動は控える…と言うか、止めてくださいね。そんな事したら死にますよ」

いきなりの死の宣告。まあ、激しい運動をしなければええんやろ？そんなの楽勝や。

「はい、斬魄刀をお返しします」

「ええんですか？ボクに斬魄刀を返して」

「あら暴れる気ですか？どうぞ暴れてもらって構いません。その代わり…ここで斬られ

ることになりますけど」

「うわあそれは嫌やな。それこそ乱菊に怒られてしまうわ」

「そう思うならしないで下さいね」

卯ノ花隊長はそう言うと「私にも仕事がありますので、これで」と言つて部屋を出てしまう。部屋にポツンと一人取り残されたボク。ボクは斬魄刀、神鎗の刃を見て眩く。

「また、会えたで神鎗。これからも宜しゅう頼むわ」

神鎗から「分かつてるよ」と聞こえた気がした。

世界が逆さまになった。ボクが天井にいて、天井が床におる。

「どうや？逆さまの世界は」

「あかんですわ。酔つてしまつて今にでも吐いてしまいそうや」

「それはあかんあ」

窓から現れた平子隊長は始解を止める。カツカツと歩いてボクに近づいて来たかと

思えば思いつきりボクを一発殴った。

「これで今までやって来たこと全部チャラにしてやるわ。ああ、俺なんて優しいんやろ。お前もそう思うよなあ？ギン」

「そうやなあ。意外と優しいじゃあないですか。ホントはもつとボク殴りたくて仕方ないちやいますか？」

「せつかく助かった命や。俺もそこまで鬼とちやう。まあひよ里にあつたら用心しとぎ。死ぬまで殴られるで」

「それが普通や。隊長はんが可笑しいだけやで」

ボクがそう言うのと隊長はんはボクを殴る。

「おとなしく礼も言えへんのか。餓鬼」

「それじゃあ遠慮なく。抗議してくれはった見たいでありがとうございます。おかげで死刑は免れましたわ」

「お前のために抗議してやったとちやうで。乱菊ちゃんのためや。お前のために流す涙あるんなら幸せに暮らさせてやりたいやろ。あの子も充分頑張つとるからなあ」

「それに礼を言うのに遠慮も何も無いわアホ」と言う平子隊長。ボクは平子隊長に「そう言うところ」一々言うから女にモテへんとちやいますか？」と言った。

「アホ。モテとるわバカ。少なくともお前さんよりはバリバリモテとるで俺は」

「そないな嘘つかんでええですよ。まあ、元部下抛りもモテてないって知ったときの現実が怖くてそないなこと言ってやはるんだと思いますけど」

「ほお。そこまで喧嘩売ってくるか。ええで、買ったわ。俺の経験人数教えた。俺はな」

「死ねえ!!!!!!」

「ゲホオ!!!!」

平子隊長の後ろから凄い蹴りが出てくる。その蹴りは見事に平子隊長にクリーンヒットしはって、平子隊長はそのままクルクルと回転して飛んでいった。

「女子の前でなんちゆうこと言い出すんや！死ね!!ボケ!!死ね!!!」

「ひ、ひよ里ちゃん…そんなに蹴ったら可哀想だよ…」

「ええんや、織姫!!ウチはなあ、コイツのこと大っ嫌いや!!それが更に嫌いになったわ!!」

地べたに倒れている平子隊長を更にゲシゲシと蹴り続ける猿柿はん。猿柿はんを止めようとしとる茶髪女子は確か……。

「黒崎一護と一緒に行動しとった奴やな」

「は、はい!!井上織姫です!い、市丸さんのことは結構乱菊さんに聞いてて、ひよ里ちゃんに言つて尸魂界に連れてきて貰ったんです!」

「そうか、乱菊の友達やったんやな。あ、ボクのこととはギンでええで」

「はい!ギンさん!」

「…それはあかんかな。同じジャンプでもボク主人公ちゃうから」

「…ジャンプ?」

「んー、やっぱ市丸でええか?」

「?分かりました!」

「宜しゆうな織姫ちゃん」

とりあえず織姫ちゃんとの話に一区切りついたので猿柿はんの方を見ると猿柿はんは平子隊長の前髪を鷲掴みにして「お前が隊長でホンマにええんか？更に酷くなるわけないよなあ？ふざけてるなら一回死ぬか？ウチが介錯してやるであ？あ！？」と言っていた。

「ひ、ひよ里ちゃん……？」

「死ぬか？なんとか言えや！」

「猿柿はん、そこまでにしとき。死ぬで隊長」

「ここで死んだらそこまでやったちゆうことやハゲ」

ゴン！と大きな音をたてて平子隊長の頭を地面に打ち付けると「帰るで織姫」と言つて部屋を出してしまう。織姫ちゃんは「ま、待つて、ひよ里ちゃん！」というどボクに一礼してから部屋を出ていった。

……とりあえず平子隊長どないしよ。



尸魂界を追放されて早一年。ボクは現世に家を置いてそこに住んでいた。激しい運動Ⅱ走ったり戦ったりすることだと思つたボクは歩くぐらいならいいだろう、と歩いて近くを散歩していた。

「お前…市丸ギン!？」

「ん? 黒崎一護やないの」

散歩して偶々出会つた黒崎一護。黒崎一護はボクが生きとることを聞いとらんかつたのかボクを指差してプルプルと震えていた。

「織姫ちゃん、久しぶりやな」

「こんにちわ! 市丸さん!」

黒崎一護の後ろにいた織姫ちゃんに話しかけると織姫ちゃんは元気よく挨拶してく

れた。ええ子や、この子。

黒崎一護は織姫が返事したことでボクと面識があることを知り織姫に恐る恐る質問した。

「い、井上……知ってたのか？」

「？何が？」

「……市丸ギンが生きてるって……」

「うん、知ってたよ！あ、そう言えば結婚おめでとうございます！私も呼んでくれれば良かったのに！」

「キミら噂じゃテストの日って聞いたんや。現世じゃそのテスト受けなあかんのやろ？誘いたくても誘えんかったのや」

「ああ！確かに!!」

織姫ちゃんはウンウンと頷くと「市丸さん頭いい！」と言った。もう、黒崎一護は話の流れにはついていけず置いてきぼりである。

「……市丸ギンって結婚したのか……？」

恐る恐る黒崎一護は言う。織姫ちゃんは大きく頷くと「そうだよ!!」と言った。

「乱菊さんとね、半年前に結婚したんだよ!」

「そやそや。つちゆう言つても乱菊とは離ればなれやけどね」

「かわいそう…」

「ええんや、ええんや。結婚できただけでもボクは嬉しいで?」

「キヤー」と顔を隠して叫ぶ織姫ちゃんが面白くてついつい笑ってしまう。

「ま、安心してええよ、黒崎一護。ボクは尸魂界に追放された身やしここで暴れまわるつちゆう無謀なこともせえへん。敵視するな、とまでは言わへんけど肩の力ぐらいなら抜いてええで」

「そ、そうか…」

ボクは「じゃあな、織姫ちゃん」と織姫ちゃんに言うどわざと黒崎一護の横を通り囁いた。

「はよ織姫ちゃん口説かな取られるで？」

ボクの囁きがかつつり聞こえた黒崎一護は「はあああ!？」と顔を真っ赤にして叫んだ。
ああ、餓鬼はおもろいなあ。



『ねえ、ギン』

「なんや？乱菊」

ボクは今、尸魂界にいる乱菊と電話をしようとした。基本は乱菊からかけてくる。だってボクがかけたとき丁度戦闘中とか洒落にならないやろ？だから乱菊が暇なときにかける、と言う約束になつとる。

『私…出来ちゃったみたいなの』

「……は？」

乱菊と結婚して早半年。会ったのは大体1ヶ月前。最後にやったのも大体それぐらい。

『…卯ノ花隊長にね、「おめでとうございます」って言われたから「なにがですか？」って聞いたら「あら？気付いていなかったのですか？多分、出来てますよ」って…』

「……」

『その後詳しく卯ノ花隊長に調べて貰ったら男の子って。隊長にね、言ったの。そしてら『とりあえず、市丸のいる現世に行つて、産んで帰つてこい』だつて。だから明日から産むまで暫く一緒にいられるわよギン!!』

「…ごめん、今ボクの頭がキャパオーバーしてて整理つかへんわ。とりあえず…暫くの

間現世に住むんやな…?」

「そう言うこと!!」

速報。乱菊の中に餓鬼おったわ。

市丸碧

ボクの父ちゃんは数々の死闘を繰り広げた凄い死神だ。母ちゃんがボクを産む前から父ちゃんの体は段々弱っていったらしい。少しやんちゃんし過ぎたんだった。そんなお茶目な部分のある父ちゃんだけど、それでもボクは父ちゃんを誇りに思うし、尊敬だっと思っている。

父ちゃんは昔沢山のやんちゃをしたらしい。そのせいで死神の住む世界、尸魂界を放されちゃって今は現世にボクと父ちゃんは住んでる。時々死神の仕事を休んで母ちゃんも来てくれるし俺にとっては楽しいからなんとも思っていない。

尸魂界に行きたいか、と聞かれるとボクは首を振って行きたくない、と答えるだろう。滅多に会えない母ちゃんに会いたい気持ちもあるけど、尸魂界を追放された、ボクよりも母ちゃんに会いたいと思ってる父ちゃんを置いてまで尸魂界に行きたいとは思わない。ボクは重度の父ちゃんっ子なんだ。

「ごらあ!!食材持ってきてやったで!出てこんかい!チビすけえ!!」

「こんちわ、ひよ里さん」

食材をいつも買って持ってきてくれるのは猿柿ひよ里さん。ひよ里さんの知り合いが昔父ちゃんの上司をやつてたらしく、ひよ里さんがちよくちよく見に行けと言われたらしく月に1回ボク達の家に来てくれる。

ひよ里さんは1ヶ月に1回、1ヶ月分の食材を持ってきてくれる。ひよ里さんが来る前はボクが買い出しとかしてただけど、ひよ里さんはそれを知ると「子供が買い出し？　なんや、ええ子ぶつとんのか！　子供は外で元氣よく遊ぶつてのが仕事やろ！　買い出しなんかしとる暇あつたら父ちゃんの為にも友達の人や2人作つてこんかい!!」と言つて食材を持ってきてくれるようになった。言葉は厳しいがひよ里さんは優しいのだ。

「どうや、お前のヘタレ父ちゃんは」

「父ちゃんはヘタレじゃないよ！　今は寝てるけど」

「餓鬼1人の面倒も録に見れとらんのや。ヘタレや、ヘタレ。…まあ、お前の父ちゃんは凄いなと思うで。母ちゃんの為にあそこまでやつたんやから」

「父ちゃんは凄いな!!」

「…お前、分かつとらんやろ」

ひよ里さんはボクを呆れたような目で見ると「まあへたレな父ちゃんに早起きでもしろ、つて言つとき。ウチはもう帰るわ」と言つて帰つてしまった。父ちゃんの顔いつも見ないで帰るけどいいのかな…？

1人になったボクは父ちゃんの部屋へと行く。部屋に入る前にノックすれば「入つてええよ」と声が聞こえた。部屋に入ると布団から起き上がった父ちゃんがニコニコと笑つて「おはようさん」と声をかけてきた。ボクも笑顔で「おはよう！父ちゃん!!」と返した。

「ひよ里はん来てくれはったんやろ？ボク起こしてくれてもええ言つたやんか」

「だめ！昨日も夜遅くまで干し柿作つてたんだから寝てていいのー！」

「別に起こしてもええんやで？ボクが夜遅くまでやってたんのがいかんとやから…。まあ、それが碧アオイの優しさやな」

碧アオイとはボクの名前だ。父ちゃんが色の名前だからボクの名前も色にしよう、と言う話になり一時期は「キン」とかそんな名前になりそうだったのを母ちゃんの上司とかが色々止めてくれたらしい。で色々喧嘩とかがおきたらしいけど父ちゃんの昔の上司さんが「碧とかどうや？」と言つてくれたらしく碧で落ち着いた。

名前を決める話とかよく母ちゃんがよく話してくれるけど、聞けば聞くほど変な名前が多かったから碧でよかったと思う。昔の上司さんに感謝、感謝。

「ボク、父ちゃん大好きだから沢山寝てて欲しいんだよ」

「ハハハッ嬉しいこと言ってくれるなあ碧は。ボクも碧のこと大好きやで」

ボクは父ちゃんの影響を沢山受けている。一人称だつてそうだ。父ちゃんが自分のことを「ボク」つて言つてたからボクも真似して「ボク」つて言い始めたし、笑顔とかもよく似てるつて母ちゃんに言われる。産まれた時からボクは父ちゃん似だったらしいけど歳をとるごとに更に似てるつて言われる。父ちゃんに似てくることはボクにとつて凄く嬉しいことだ。

「いつもよりたくさん寝てみたいだけどう？」

「うん、いつもよりなんか体軽い感じるわ。折角やから朝ごはんボクが作ろうかなあ」

「えっ!?!ホント!?!」

「ええよ、朝ごはんぐらい作つたる」

朝ごはんとかはボクの方が早起きだからいつもボクが作る。父ちゃんが作ってくれることは珍しいし、父ちゃんの作る料理は美味しいから好きだ。

「ふっふっふ。善きにはからえ」

ボクのセリフを聞いて苦笑いする父ちゃんにボクは「それでいいのだよ、市丸君」なんてふざけたことを言う。

「どう言うキャラやねん、それ」

父ちゃんも笑ってくれたしよしとする。

「よし、朝ごはん作ろうか」

「ボクも手伝う！」



貴方はこの世界が全てだと思いますか？

——アタシはそうは思わないねエ。

貴方は眼に見えている全てが真実だと思いますか？

——眼に見えてるものが全て？そんなのふざけるなよオ。

もしも貴方の身の回りで生きていたヒトが本当は生きていなかったとしたら？

——それはそれで面白いんじゃないのかなア？

…さあ！これから楽しい show^{ショー}が始まるよオ!!楽しんでもらえるかなア？市丸碧
クン。



「碧、お前友達居るんか？」

ギクリと自分の肩が跳び跳ねるのが分かった。朝ごはんを食べているとき、父ちゃんにそう訪ねられボクは返答に困る。はつきり言つてボクは周りの人間と深く関わりを持たなかった。理由は特にない。家事業が忙しかった、と言われればそうかもしれないし、人間と関わりたくなかった、と言われればそうかもしれない。

ボクが家を出るときは限られた時であつて、それ以外はずっと家にいる。だから生まれてから友達、なんてものを作ったこともなかった。

「少し家の周り散歩でもしてきたらどうや？なにか新しい出会いちゆうもんがあるか

もしれへんで」

「うん、分かった」

父ちゃんはボクに口煩く言うことは少ない。少なくともボクがしつかりしてるからだと思う。けれど父ちゃんもやっぱりボクの間関係のことは気になるようでもちよく聞いてきたりするのだ。家の周りを散歩して何か変わるかどうかは分からないけれど、父ちゃんを心配させないためにも散歩ぐらいはしようと思う。

朝ごはんを食べきるとボクは靴を履いて散歩に出掛けた。

「行つてきます」

「うん、行つてらっしゃい。周りちゃんと見るんやで」

「うん」

和を想像させるそこそこ大きい家を出てボクは散歩する。ボクの住んでる街は死神代行やら元死神やらが住む面白い街だ。…と言っても、ボクはひよ里さん以外会ったことないんだけだね。

歩いていると通りすがりの人とぶつかってしまった。

「あつ、すいません!!」

「だいじよオぶ。アタシ怪我してないよオ」

朱い髪を高く2つに纏め、右側には鬼のようなお面をつけた高身長的女性がボクを見下ろしていた。

「んー。ぶつかってしまったお詫びだア。キミはsh^{ショー}owは好きかい?」

「ショー?...見たことはないですけど...」

突然そんなことを聞かれるためボクはしどろもどろになりながら答える。ボクの返答を聞いた女性は嬉しそうに手を叩くと「じゃアアタシが楽しいsh^{ショー}owを見せてあげるよオ!!」と言った。

「え?」

「何を」とまでは言えなかった。急にボクが眩しい光に包まれたからだ。慌てるボクに

女性は手を振りながら言った。

「バイバイ！市丸碧クン!!」

初対面の女性。何故ボクの名前を知っているのか。この光はなんなのか。聞きたいことは沢山あった。だけど聞く前にボクは意識を手放した。

「原作真実を知った彼がどんな行動に出るのか。楽しみだなア」

女性はそう呟くと白いコートを翻し、消えた。もう、碧の姿も見えなく碧に女性の呟きが聞こえることもなかった。



「なんや？こんなところに倒れとつて。どないしたんやろ？」

父ちゃんに似た、そんな声が聞こえた気がした。

「ん……むう……」

目を開けると眩しい光が見えた。視界が段々クリアになってくるとよく周りが見えるようになり、状況確認が出来るようになってきた。

和式の部屋にポツンとボクの入った布団が一つ。部屋には家具とかは少なく、端に机と小さいタンスが一つあるくらいだ。

サツと襖が開けられる。襖を開けたのは銀髪で、糸目で、身長もボクと変わらないぐらいの父ちゃんに似た、人物だった。その人は片手で小さなかごを持っていてよく見ると中に沢山干し柿が入っていてそこからまた父ちゃんを連想させる。

「おつ、目え覚ましたんやな」

「どうや？体の調子は」と京都弁で聞いてくる銀髪さん。

「え、えつと…」

「アンタ、ウチの目の前で倒れてたんやで？とりあえず家にいれたんや。まあ気絶しとっただけみたいやから大丈夫だとは思うけどなあ」

「大丈夫です。わざわざありがとうございます」

「しつかりしとんなあ。ボクと同じぐらいやろ？歳」

「た、多分…」と頷くと銀髪さんは笑って「そない警戒せんでもええよ」と笑った。

「名前、なんや？」

「市丸…碧」

ボクが名前を言うのと銀髪さんはピクリと片眉を動かした。何か悪いことでもボク言っただろうか？

「偶然も有るもんやなあ」

「え？」

「ボクの苗字も『市丸』なんや。市丸、市丸ギンってちゆう名前。ボクの名前も色の名前やし色々共通点あるな」

色々と驚いた。え？今「市丸ギン」って言った？もうしかして父ちゃんとかじゃないよね…？で、でも父ちゃんはボクと同じぐらい歳なわけないし…。他人のそら似？嫌々、似すぎでしょ。似すぎだって。可笑しい、めっちゃ可笑しいって。

「ここ、どこか分かるか？自分家どこにあるか分かるか？」

「えっと……」

「その顔は分からんみたいやな。ま、ええで。好きにここいたらええよ。ボク一人で飽きしとったんや」

話の流れでここに住むことになってしまった…。まあここがどこか分からないボクにはありがたいのだけけど。

「とりあえず…よろしくお願いします？」

「何で疑問系なのは分からんけど、まあこれから宜しゅう頼むわ。アオイ」

「うん…ギン」

こうしてボクはギンと一緒にこの家に住むことになった。まだ何が何だか分かっていない状況だけど、とりあえずここでギンと一緒にこの場所のことについて色々知って理解していこうと思う。

まあ、早めに父ちゃんのところに戻らないと心配してると思うから帰る手段も探しながら。

何故だろう。ここに来てからと言うものの、自分のナニカがずっと警鐘をならしている。まるで見るな、関わるな、と言っているかのように。

ボクはそれに気づかないフリをした。

消えたボクの息子

走って、走って、走った。碧が姿を消して約3日。市丸ギンは居場所の分からない碧をずっと探していた。

「どい、や、碧!!」

碧が何か事件に巻き込まれているとしたら。そんな事を考えると気が気じゃなくて寝れない市丸ギンは寝るまも惜しんで碧をずっと探していた。

大通り。右を見ても、左を見ても、碧はいない。逆に碧どころか、人1人見えない。現在は朝。誰かいても可笑しくない時間帯だ。人気のない静かな大通りは何とも不気味で仕方がなかった。

「さアさア! 愉しんでもらえてるかなア!? アタシのMマAアGジIッCクSシHョOウ!!」
「誰や…アంతア」

突然現れた朱毛に市丸ギンは警戒する。朱毛の気配すら感じなかった。それに…。

「その右の面、アンタ破アランカル面やな」

少し前まで見慣れていた白い鬼のような面。それを見て市丸ギンは思わず顔を歪める。それとはまた逆に市丸ギンの顔を見て嬉しそうな顔を朱毛はすると大きな声で喋り市丸ギンの「破面」と言う言葉に大きく肯定した。

「そオだよオ!!アタシの名前は、MAGICKIANS・RED!!破面さア!!特技はアタシのMAGICSHOWで愉しんでもらうことオ!!好きなモノは死神の絶望の力オとオ、赤い血だよオ!!」

「アンタ…狂つとるな」

「狂ってるウ?ありがとオ!!アタシにとってはア褒め言葉でしかないのさア!!」

更に顔を歪めた市丸ギンを見てマジシャンズレッドは笑みを深める。

「キミが探しているのは市丸碧クンかなア?」

「!!アンタ、碧どこに居るんか知つとんのか!!」

市丸ギンの質問にマジシャンズレッドは「クククツ」と笑うと「知ってるよオ！」と言った。

「だって彼をこの世界から移動させたのはアタシだもん！知ってて当たり前だよねエ」
「どこにやったんや。はよ、碧返せ!!」

「ん、無理だなア。キミの要望にはアタシ答えられない」

キラんと星が語尾に付きそうな勢いでマジシャンズレッドは言う。

「アタシはアタシの意志で行動してる訳じゃアないのさア！アタシにはアタシの創造主がいるウ!!だからアアタシにはココロもなアにもないただの『操り人形』!!」

悲しみも何も含んでいない、逆に嬉しそうな声色でマジシャンズレッドは言う。

「アタシの創造主は望んでる!!退屈を忘れたいとオ！つまりイ、今回創造主選ばれた退屈のぎはアキミの息子、碧クンだったってことさア★☆☆★」

「退屈しのぎ……やて……？」

「そうだよオ!! 碧クンには真実を見てきてもらおうのさア！」

「真実？」

“真実”とはどういう意味なのか。市丸ギンには分かかっていない。分かかっていないからこそ、マジシャンズレッドは面白くて笑う。「何も知らない死神^{ヒトダチ}達は滑稽で仕方がない」と。

「ヒトには沢山の“もしも”がある！『あそこで飛び降りていなければ』『道路に飛び出さないでいれば』『くを作らなければ』後悔や喜びを沢山に含んだ“もしも”!! さアて、ここでキミにクイズを1つ!! “もし”『この世界がある創造主によつて造られた世界』だつたらア？」

「創造主によつて造られた世界？ そんな」

「あり得なくないよオ! だつてホントだもん! この世界はある創造主によつて造られた世界!! それもオ沢山の“もしも”が“分岐”して造られた世界さア!!」

マジシャンズレッドは市丸ギンとの少しの間合いを一瞬で懐に入ると言った。

「もしも〃キミがあの時キミが松本乱菊に助けられていなかったらア？ 〃もしも〃あの時黒崎一護に全てを託しキミが絶命していたとしたらア？」

「っつ!!」

「〃もしも〃キミの息子が生まれていなかったとしたらア？」

もしも碧が生まれていなかったとしたら、少しだけ市丸ギンは想像してしまう。きつと市丸ギンは一人で現世に住むことになるだろう。もし、そうだとしたら。それはとてもつまらない。

「彼にはねエ、その〃生まれてこない〃世界に少しだけ翔んでもらってるんだア。だアかアアア、暫く帰れないのオ」

「そんなん言われても「はい、そうですか」って言ってなあ、引き下がるほどボク、ええ子やないんよ。意地でも返してもらおうで」

「何故キミはそこまで碧クンに執着するのオ？」

マジシャンズレッドが聞くと市丸ギンは当たり前前だと言うように笑った。

「それは…」

——碧がボクの大切な息子やからや

ピクリとマジシャンズレッドの肩が動く。

「……」

マジシャンズレッドは何も言わない。数秒、時が過ぎるとマジシャンズレッドは笑った。

「そうかア。分からないなア」

「別に分からんでもええで。キミはここでボクが殺すんやから」

懐から取り出した脇差し^{斬魄刀}。それを構えると市丸ギンは解号を呟く。

「射殺せ『神鎗』」

市丸ギンの斬魄刀『神鎗』は物凄い早さでマジシャンズレッドの顔めがけて伸びる。ギリギリ『神鎗』の早さについていけないマジシャンズレッドは避ける。

「あはッ★危ないなア★☆☆★」

「全然そうは見えへんで。正直楽勝とちやいますか？」

「全然だよオ☆☆こう見えてもアタシ避けたの凄くギリギリなんだからア!!」

悠長に話している間に市丸ギンの第二撃目に襲われるマジシャンズレッド。第二撃目もギリギリのところまで避けるとマジシャンズレッドは声に出して大きく啜った。

「アツハツハツハ!!どオしよオー！これじゃアアタシ勝てないよオー！流石元三番隊長なだけあるなア！★☆☆★」

第三撃、四撃、と攻撃をギリギリ避けるマジシャンズレッドは言う。市丸ギンから見るとマジシャンズレッドはまだまだ余裕そうに見えてそれがまた、市丸ギンの怒りを誘うのだ。

——プルルルル

マジシャンズレッドの携帯が鳴る。マジシャンズレッドは市丸ギンの攻撃を避けながら通話を始めた。

「ハロハロ?こちらMAGジシャインズ・レドオ!」
『遊ぶの…止めて。時間…ありません』

マジシャンズレッドの電話の相手はどうやら少女らしく、小さな少女の声が聞こえた。

「えエ!?今から楽しい時間なのにイ!キミはアタシの楽しい時間を奪うつもりなのかイ!」

『…困ります…』

本当に困ったように言う少女。どうやらマジシャンズレッドはこのギリギリの直面が愉しく、それを指摘されたことが気に入らないらしい。

『MAGジシャインズ・レド』

「oh〜創造主サマア★☆☆★」

どうやら通話する相手が変わったらしい。次は男性の声が変わった。

『残念だが、時間切れだよ』

「えエ〜!!これだからが愉しい時間なのにイ！」

『また、今度遊びなさい』

「はアい」

マジシャンズレッドは大人しく男性の言い付けを聞くと通話を切った。マジシャンズレッドは市丸ギンを見てこういい放つ。

「残念だけどオ帰らなくちゃいけなくなっちゃったア★ごめんねエ☆」

謝罪とは思わせない口振りである。もちろん市丸ギンだって逃がすつもりはなく「逃がさへんよ」と『神鎗』を構える。それを見たマジシャンズレッドは困ったように嗤った。

「ん〜、アタシも遊びたいんだけどオ、創造主サマがア、帰ってこいつてエ。創造主サマの言い付けはアタシ達の中では絶対なんだア☆」

「こつちとしても碧、返してもらおうまでは返せんなあ」

「はいはくい、そこ、危ないですよ」

間延びした中性的な声が聞こえたかと思えば市丸ギンに何本もの電柱が襲いかかった。

「げエ。何でここに『掃除屋』がいるのさア！」

「どうも。創造主サマに頼まれて飛んできた掃除屋です。以後、良しなにと」

金髪のメツシユが入った黒いフード付きパーカーに程好い長さのズボンを履いた青年——それも、鼻の下から顎までは白い仮面がついていて破面だと言うことが伺える。

「ココに来たのは、ボクだけじゃないんですよ」

「ここ、困ります。早く帰りましょう、マジシャンズレッド」

「PINKY^{ピンキー}まで来たわけエ？サイアクウ」

先程までマジシャンズレッドと通話をしていた声——薄いピンクのボーイッシュな

髪型に、白いワンピースを身に纏った少女、ピンクは顔の左半分全てが仮面で覆われている。彼女も破面だろう。

「創造主サマがお待ちだよ」 「創造主様がお待ちです」

声を被せてまで「早く帰ろう」と言う掃除屋とピンクの声にマジシャンズレッドはキレながら「帰ればいいんでしょオ!! 帰ればア!」と言った。

「文句なら創造主様に言ってください」

「そうだよ。ボク達に当たらないでよ」

「帰るって言ったじゃん! 何でアタシ掃除屋に抱えられてるわけエ!!」

「帰る」と宣言したはずのマジシャンズレッドはいつの間にか掃除屋に肩で担がれており、マジシャンズレッドはバタバタと動く。

「止めて。落としちゃうから」

「なら止めろよオ!」

「逃げるの、ダメです」

「逃げてねエシイ！」

「ン〜でもなあ」と困ったように空いている手で頭をかく青年。それを見たピンキーは「早く帰りましょう」と言っているか市丸ギンを見据えた。

「では」

「これにて〜」

「おーろーせーよオ!!」

ピンキーが煙玉を地面に叩きつける。煙が大通り全てを覆う。周りが見えない。マジシャンズレッド達の気配もしなくなった。市丸ギンは舌打ちをする。

「…逃げられて、しもうた…」

早く、早く碧を見つけて抱き締めて、碧が生きていることを実感したい、と思う市丸ギンであった。



「お帰り。MAGI^{マジ}CIAN^{シヤン}S^ズ・RED^{レッド}、掃除屋、PIN^{ピン}KY^{キー}」

薄い水色が混じったような白い髪色をした青年。青年は頭に黒いサングラスをつけていて正直言って似合わない。青年の仮面は右目だけを覆うようにしてできていた。

「ただいま帰りました〜創造主サマ〜」

「ただいまです」

「……ただいまア」

まるで遊ぶオモチャを取られたように不貞腐れているマジシャンズレッドを見て「創造主サマ」と呼ばれた青年は困ったような顔をする。

「ごめんよ、M G I C I A N S ・ R E D」

「もつと遊びたかったのにイ」

「そもそもキミは遊ぶ為に行かせたわけじゃないだろ？」

優しく、諭すようにマジシャンズレッドに言う。マジシャンズレッドは「そうだけどオ」とぼつが悪いように言う。

「また、今度遊んでいいから」

「むウ、約束だよオ」

「嗚呼、約束だ」

「ならいいやア」と満足したらしいマジシャンズレッドは部屋を出ていく。マジシャンズレッドが出ていったのを見て「創造主サマ」と呼ばれている青年は「仕方がないなあ」

と声を漏らした。

「どうだった？市丸ギンは」

「市丸碧、凄く探してた」

「大切にされてるんですね。市丸碧」

「市丸ギン、親の顔だった」

「だね」

二人の話を聞いて「創造主サマ」と呼ばれている青年は「そうか」と言った。

「退屈のぎになりそう？創造主サマ」

「うん。今回はアタリだね」

「なら、よかったです」

これから先のモノガタリを見て精神を安定させられるのか、市丸碧のことを考えるとニヤケが止まらない。誰でも良かった。「創造主」の生け贄になるのは、偶々だった。「創造主」がマジシャンズレッドを作ったのは、本当の世界を見つけたのは、本当の世界には

いないイレギュラーな市丸ギンと市丸碧。退屈が消えたような気がした。退屈がなくなる予感がした。だから使った。ただそれだけだった。

「嗚呼。こんなにもドキドキワクワクしたのは久しぶりだよ」

「創造主サマ」は呟いた。

市丸碧の焦燥

「えっと、ちよっと、タンマ。ワンモアプリーズ」

「ん？これで五回目やで？ま、ええけど」

六回目となる説明を嫌な顔をせずギンはボクに教えてくれる。

「ココは現世ちやう。尸魂界や。現世は確か…織田信長やったか？そんな奴が威張つとつたなあ」

織田信長がいた時代だと…約百年前。あれ？二百年前だったっけ？まあ、どっちでもいいか。…とりあえずだけど、ボクは現世の歴史とかそんなに知らない。でも、時々父ちゃんが教えてくれたから少しだけだったら分かる。

え？百年前？いやいや、可笑しいって。変なヒトと遭遇したと思ったら急に体が光はじめて、意識飛ばしたかと思えばまるで父ちゃんを小さくしたような市丸ギンという同性同名のヒトがいて…。

え？もうしかして、もうしかしてだけどボクの目の前にいる市丸ギンって父ちゃんじゃないよね？ココ、父ちゃんが小さい頃の世界とかそんな感じじゃないよね？いやいや、あり得ないって。だってボクそんな力持っていないし……。

ん？それはボクの話であってあの変質者みたいなヒトがボクを飛ばした可能性は？……うおおい、なんかそんな気がしてきたよ。アタリのような気がするよ。

え？どうすれば帰れるわけ？と言うか、帰れるの？帰れないなんてことないよね？まさか、そんなわけ……。

「ないよねえええ!!ないと行ってええええ!!」

「なっ、なんや！急に大きな声出して!」

「ふざけんなよおおお!あの変質者がああああ!!」

帰れなかったらどうしてくれるワケ!?絶対父ちゃん血眼になって探してくれてるよ!!何、ボク変なのに巻き込まれたの!ざけんな!!

「ハアハアハア」

「……なんや、大変そうやな……」

もし、もしだよ!?目の前にいる「市丸ギン」が父ちゃんだとすると…。えっ!?ボク父ちゃんさつきまで呼び捨てにしてたわけ!?

「ご、ごめんなさいいいいい!!」

「さつきからなんや!急に大声出しよったと思つたら土下座なんかして!!謝るな、アンタ何もしたらんやろ!!」

「したの!してたの!ボクは親不孝者だああああ!!」

「はあ!?親不孝!?ワケ分からんわ!ちよつ、ええかげんにして!!」

急に土下座をし始めたボクに驚きの声とほんの少しの怒りの声を含んだギン（父ちゃん）は言う。

「何で悩んどるのか分からんけどまあ、ここに居るんやろ?」

「と、当分は……」

「当分、なあ。すぐにアンタの家に帰れたらええな」

「うん」

ギンは優しくボクの頭を撫でてくれた。



「ボク、干し柿取ってくるわ」

「行つてらっしゃい」

「うん、すぐ帰るから安心してな」

そう言つて家から出ていくギンを見送るボク。ギンに拾つてもらつてかれこれ数十年経つが大体理解した。ボクの予想ではココは過去の世界。ギンはボクの父ちゃん。ギンはボクの父ちゃんだけどもまだボクは生まれていないから父ちゃんではないと言う何とも分かりずらいことこの上ない世界だと思う。

ギンのことを父ちゃんと呼びたいのは山々だが、ギンに普通に却下された為、ギンと呼んでゐる。とりあえず元の時代に戻つたら父ちゃんに土下座して謝ろうと思う。そうしないとボクの気が済まないからね。

過去の世界でもやはりギン（父ちゃん）の趣味は変わらなかつた。ギンは家の近くに柿の木を作つて、その柿で干し柿を作つてゐる。ついさつきその柿を収穫しに行つたところだ。

ギンが帰ってくる前にご飯を作ろうと思う。干した茸や木の実などでシチューのよ

うなスープを作ろうと現在考え中だ。野菜のお浸しなんかもいいかな。明日はゆっくりと休みたい気分なので多めに作ろう。考えの纏まったボクは具材をとって切り始める。

約数十分経つとスープは出来上がり、後はギンの帰宅を待つだけとなった。：遅いなあ、ギン。いつもなら数分で帰ってくるギンが帰ってこない。何かに巻き込まれてなければいいんだけど…。

「すまん、遅なつてしもうた」

がらがらとドアが開く音がしてボクは慌てて玄関に行く。するとギンの後ろに茶髪の女の子が隠れていた。その光景を見てボクは一言。

「…ギン、犯罪だよ」

「違うわ!!」

「えっ、拐ってきたんじゃないの？誘拐違うの？」と聞けば「アホ!!ボクはそんな事せえへん!!」と怒られてしまった。：良かった、とりあえず誘拐じゃないらしい。ボクの父

親がこんなにも小さいときから犯罪者とかたまったもんじやないから。安心、安心。

「ホラ、乱菊。ちゃんと自分で挨拶せな」

ギンの後ろに隠れている彼女をギンは突っつきながら言った。……え？さつきナチュラルにギン、爆弾発言したよね？乱菊って言ったよね？え？乱菊なの？まさかボクのお母さんですかああああ!!

身長の小さい、しかも普段想像つかないぐらいのボロボロの服を着ている乱菊を見て内心ボクの心はフィーバーしていた。

わ、若ええええ!!すつごい若いし化粧もしてない!!ボクの母ちゃん確かに、化粧とかはそんなにしらない方だけどでもやるからなあ。すつぴんボクにも見せてくれないからかなり激レアだと思う。

しかも服とかも今の母ちゃんなら絶対着ないぞ、あれ。母ちゃん着ないくせに新しい服とか買ったりするもんなあ。服を置く場所がないとかなんとかで昔上司と喧嘩してたような気がするし。

それにしても母ちゃん小させええええ。色々と小さいわ。うん。……なんだろ、小さい父ちゃんよりも小さい母ちゃん見たときの方がなんか凄い、って感じするわ。うん。

ギンの後ろに隠れていた乱菊は恐る恐る出てくると言った。

「…松本、乱菊…」

「はい、了解」

小さい頃、母ちゃんと父ちゃんと一緒に住んでいたらしい。時々酒に酔った母ちゃんが懐かしそうに話していたのを思い出す。まさか、父ちゃんが母ちゃんを拾ってきたとは思わなかった。

「あれ？あんま驚いてないなあ」

「いやいや、充分驚いたから。とりあえずはギンが誘拐してないことにホッと息をついた感じかな」

「なあ、ボクってキミにどないな印象なん？」

「いやあ、ニコニコしながら適当に人一人拐ってるイメージはあるよね」

「アオイ、奥でボクとちよつと楽しいお話でもしよか。安心してくれてええで。一発顔面に殴り入れるだけや」

「あ、遠慮しておきます。ボクMじゃないんで。そんな趣味ないんで」

余談だが、この頃ギンの口癖は「キミ、性格変わったとちやうの？」だ。ギン曰く昔のボクはもつといい子で純粹だったらしい。：今でもボク純粹だから。まあ性格についてはノーコメントと言うことで。

ギヤアギヤアギヤアギヤアとギンと口論していると乱菊がクスツと笑みをこぼした。

「なんや？急に笑いだして」

「ギンの顔が面白かったんでしょ」

「は？ちやうで。アオイの顔がおもろかったんや」

「…二人とも似てるな、って」

「どっこが!」

正直、嬉しい。ホラ、ボクなんだかんだ言つて父ちゃん大好きし。ギンも好きだ。ちなみに変な扉とかは開けてないからそこそこは安心してほしい。人として好きなかだから。性的な意味じゃないからね！

「顔も、髪の色も、行動も、全部」

「そんなボクら似とる?」

「血い繋がりはないんやけどなあ」と呟くギンに思わず苦笑い。だってボク、キミの息子だし。アンタの目の前にいる乱菊さん将来嫁さんになるからねー。

「双子みたい」

「それ、褒められてる気せんわ」

「うん、褒め言葉ありがとう。ギン、喜べ。キミはボクに似てるんだってさ!!」

「うわあ、いややわあ。何でボクがアオイに似なあかんの?アオイがボクに似てきたとちやう?」

…ごもつともです。よく母ちゃんからは父ちゃんの生き写しと言われていきます、ハイ。ぐうの音も出ません。

「とりあえず、ご飯食べよ。もうできとるんやろ?」

「うん。今日は少し多めに作ったから乱菊の分もあると思うよ」

「なんや、アオイ予知でもできるんか」

違います。本当は明日の朝ごはんにして楽しようとしてました。楽するために多めに作りました。だからそんな尊敬の眼差しで見るのをやめてもらいたい。

「あ、ボク碧。市丸碧って言うんだ」

「市丸……？ギンと一緒」

「偶々や。ボクも最初びつくりしたわ」

「うん、ボクも」

ボクがスープを机の上に運んでいる間にギンは茶碗にご飯をよそいでいた。三人分のご飯の用意が完了すると手をあわせて「いただきます」と言う。

「そう言えば、乱菊もこの家で暮らすわけ？」

「うん。ええやろ？どうせ部屋もあと一個余つとるし」

「うん、いいんじゃない？ボクは賛成」

ちなみにギンの「部屋一個余っている」と言うのには少しばかりの誤弊がある。この

家には小さな部屋が3つしかなく、1つの部屋はリビングとして、もう1つの部屋はボクとギンの寝室として使っていて余った部屋は食料等を保管する部屋として使っていたのだ。なので余っている、と言えは余っているし、使っている、と言えは使っていると言う微妙な感じなのだ。

とりあえず、乱菊が使えるようにご飯を食べたら部屋を片付けようと思う。さすがに女子が男子と同じ部屋は駄目だからね。ギンがそんな過ちを犯さないと信じてはいるが男は皆狼。獣である。

え？ボクはどうなのかって？よしてくれ。ボクも生物学上男だけけどそこまでの心は持っていないさ。よく考えてくれたまえ？この三人は親子である。ギンは未来の父ちゃん。乱菊は未来の母ちゃんだ。それを知っていてなお、母ちゃんに手を出すなんてできない。そんな事やったら土下座ぐらいじゃ足りない。切腹だよ、切腹。

父ちゃんの母ちゃんに対しての溺愛っぷりを間近で見てるからこそだよ。それに今のところ女に興味ないし。たとえ興味を持ったとしてもボクはこの世界の本当の住民じゃないから結局は意味をなさない。これこそが悲しい現実なのさ。

「…美味しい」

乱菊がスープを飲んで呟く。ボクは乱菊に褒められたことが嬉しくて「ありがとう」とお礼を言う。

「ほんま、アオイ主夫向いとるで。料理こんなにも上手なんやもん」

「残念ながら主夫になるつもりはこれから先の予定にはないよ」

「んー、今のところはボクたちの主夫でいてくれたらええよ」

「……」

いや、ギン達の主夫になるつもりもこれっぽっちもないんですけど。勝手に話し進めないでもらえますか？

こうしてボクの母親こと松本乱菊が新たなメンバーに加わり、三人で暮らすことになった。

市丸碧の性格

「テメエどこ見てんだア？ ああ?!」

「あ?」

「ひっ…」

流魂街を歩いていた。たまには乱菊やギンに美味しいものを豪華なものを食べさせてあげたいと思つたからだ。だから尸魂界に来てからコツコツと貯めたお金を奮発して買い物に出掛けていたのだが――。

あつちからボクの肩にぶつかつてきた。多分ボクの金を狙つて来た奴等なんだろう。現代にもそんな腐つた奴いるけど、狙うやつ間違つたね。ボクなんか狙つたら……。

ボクは霊圧を扱える。小さい頃から父ちゃんが霊圧の扱い方を教えてくれたからだ。「碧はボクよりも乱菊よりも霊力が高い。虚にも追われることが多い。せやから、力の使い方、ボクが教えたる」つて。正直言つて父ちゃんはスパルタだった。

だから死神の使う鬼道とかそこら辺は使える。今のところ六十番台までなら詠唱破棄でできたりするのだ。覚える事とかは比較的好きだ。

父ちゃんに靈圧の使い方を教わっていて良かったと思った。だってこう言う奴には自分の靈圧にあてるのが一番楽だからだ。

案の定ボクの靈圧にあてられた男は口から泡を吹いて気絶した。ボクはそんな男を冷たい眼差しで見る。ボクは父ちゃんと母ちゃん以外、いやギンと乱菊以外にはかなり冷酷な性格に変わる。自覚アリである。だけど変えるつもりはない。

だってボクにはこの世界にあの二人さえ生きていてくれればいいのだから。人類がたとえ滅びようとも、二人が生きていてくれるのであればボクはなにもしない。ただ笑い「良かった」と言葉を紡ぐだけだ。ただそれだけ。ボクにはあの二人が五体満足で生きていてくれるのであれば「平和」と変わらないのだから――。

「なんや、急に靈圧大きくなった思うたらこんな奴が出しおったんか」

ギンと同じで訛ってる言葉…。勿論声の主はギンではない。後ろから声がしたのでボクは振り向く。後ろには白い羽織を羽織った金髪ロン毛が立っていた。

「…誰、アンタ」

「俺にそんな口聞いてええんか？ こん見えても俺、死神の隊長なんやぞ」

金髪の羽織っていた白い羽織が風に揺れ、黒いインクで書かれた漢数字が見える。『五番隊』それは昔、父ちゃんが所属していた隊だと聞いた。だとすると、この人はボクの名前をつけた人ではないのか…。

父ちゃんの元上司。その人がまともな名前をつけてくれたと言う。まあこの人がギンが入隊するその時まで、生きていたら、の話だけだ。

「ふーん。その隊長さんが何でこんな流魂街なんかには？」

「お偉いさんなんですよ？」と問えば「口の聞き方がなつとらん餓鬼やな」と帰って来た。

「ただ暇もて余しとっただけや。だから流魂街に来た。あかんか？」

「知るか」

「ほう。いい根性しとんな、お前…」

歩いて近づいてくる金髪。ボクは逃げない。こいつの顔面に赤火砲しゃつかほうを顔面に放つたらキレルかな？怒るかな？ちなみにボクは餓鬼と言われて少し腹立ってます。

金髪はボクの目の前で足を止めるとグググッとボクの頭を鷲掴みにした。上に上げるので段々足が地面につかなくなっていく、最後には空中で足がブランブラン出来るほど。ちなみに頭は凄く痛い。

「お前、死神に興味ないか？あるなら俺がしこたましごいてやるで」

「遠慮する。ボクにはやることがあるんだ」

「……その霊圧が周りを危険にするって言うてもか？」

「ボクの周りにはそんな弱い奴、いないよ」

「後悔しても俺知らんで」そう言う和金髪はボクの頭を離れた。足が地面につく。浮遊感もない。頭はまだ少し痛いけどさつきほどではない。

金髪の伝令神機でんれいしんきがなる。どうやら虚の知らせではなく連絡が来たらしい。金髪は連絡を受けると「ああ。分かったわ」と言いボクの顔を一瞬見たかと思えば瞬歩で何処かへと消えてしまった。

この出会いはなんだったのか、そう思いながら当初の目的、食材集めをする。何度でも言うが今日は奮発するつもりで流魂街へと来たのだ。食材を買わねば。それはもう美味しそうなやつを。



とある古い店。そこに一人の老人が店を構えていた。この老人はこの流魂街で唯一値切るのが難しいと噂されている老人である。勿論碧はそんなことも知らないで老人に話しかける。

「おじちゃん、これ美味しい?」

「ああ。美味しいよ」

「でも高すぎない?」

ボクがそう言うとおじちゃんは「おやおや、値切るつもりかい?」と言った。ボクは勿論頷く。さすがにこんな値段で買ったらボクのお財布の中身は一瞬で消えてしまうから。

「うん。単刀直入で言うね。もっと安くしろ」

おじちゃんは「ほっほっほ」と笑うと薄く開いていた目をおもいつきり開いてボクの顔を見据えた。

「やれるものならやってみんしゃい」

あの後、おじちゃんからかなり値引きしてもらい結論からいうとボクの小遣いのうち三割をも使わずそこその材料を買えてしまった。またあの店に行こうと思う。

余談だがかなり値引きをさせたせいでおじちゃんは泣き「頼むから帰ってくれ」と言われた。街の住民からは暫く「小さい悪魔の子」と呼ばれるがそれは知らない。



「うわっ！いつもの食材より美味しい！！もうしかして買ってきたの!？」

「今日は狩りに出掛けんでええって言っとったのはこのことやったんか……」

ボク達は流魂街六十二地区かがらし花枯のはずれに小さな小屋を建てて住んでいる。街に行くにはそこそこ遠いし金もそんなになるので狩りで暮らしている。ちなみにこの狩り暮らしに不自由は感じていない。

「そうなんだ。どう？美味しい？」

「ああ、美味しいで。それにしても金つちゆうもんアオイ持とつたんやな」

「うん。時々散歩で街に行ったりするんだけどその時カツアゲとかされそうになるんだ。だから……逆にカツアゲしてやってる」

ボクがそう言うのとボクの作った炊き込みご飯を美味しそうに食べながら乱菊は言った。

「へえ、そうなの？なら、私もそうして稼ごうかしら」

「乱菊、止めとき。マトモな性格失うで」

「酷いなあギン」

ボクは少し頬を膨らませて言う。ギンは「男がそんなモンやっても全然可愛くないで」と言った。父ちゃんに言われた感じがしてちよつと悲しくなったのはここだけの話。



「ぎゃあ！ちよつ、やめて!!ごめん！マジ！マジしませんっしたあ!!」

「お前、次狙ったら……殺すよ？」

最近、ギンと乱菊の周りをコソコソと嗅ぎ回っている奴がいたことにボクは気づいていた。多分だけギンも気づいてたと思う。ギンは人一倍警戒心強いし。

コソコソと嗅ぎ回っていた奴……所謂、ストーカーを調べあげるのには時間はかからなかった。犯人はつい先日ボクから金を奪い取ろうとして逆に霊圧にあてられ泡吹いて気絶した男だった。詳しく聞けば、あの二人を人質にすれば金が沢山手にはいると思っただけ。

ストーカーはほんの、ほんの少しだが霊圧があるようで腹が減るとか。食材を買い取るにも凄く高く想像手が出せない値段ばかりで金に困っていたらしい。自分の未来のためにも金が必要だと泣きながら熱弁していたのをギンと乱菊を含めた三人で聞いた。

「で？」

「え……？」

ボクがそう言うとストーカーは訳の分からなさそうな顔をして首を捻った。

「だから、なに？そんな理由で狙ったわけ？こんな子供を？莫迦じゃないの？莫迦でしょ？死ねば？餓死すればいいじゃない」

「鬼……」

隣の乱菊の呟きが聞こえなかった訳ではない。あえて聞こえなかったフリをする。

「そもそも働けば？楽しんで力の扱い方も知らなくせに金を手に入れようとするから逆

に取られるんだよ。自業自得じゃん。だから、死ね」

「えっ、ええっ、ええええええ!!」

首を絞めてやろうかとするストーカーは物凄い早さで後ろへと下がっていく。ボクはストーカーに恐怖を植え付けるため、笑みを張り付けジリジリとストーカーに近づいてやった。

「止めとき」

後一步でストーカーを殺せるのに。ギンがボクに静止の声をかけた。ボクはストーカーに近づくのをやめ「はあ」とため息をつく。

「…ギンがそこまで言うなら止めるけど」

ボクがそう言うストーカーは嬉しそうな顔でギンを見て「か、神が降臨した…!!」と言った。ボクはストーカーを睨み付ける。するとストーカーは「ひい!!」と小さな悲鳴を漏らした。

「そんな奴、殺す価値ないわ」

「でもね、またこんなことがあったら困るんだよ。ボクはね、ギンと乱菊が生きていればとりあえずこの世界がどうなるうとどうでもいいんだ。正確に言えばね、ギンと乱菊にもしものことがあったら…その首謀者の腹切つて一個ずつ内臓を取り出して………それでね「これは何の内臓でしょーか？正解はねえ」なんて言いながら目の前で…潰していつて、それでね、最後には……」

「もうええわ！なんやそれ！！恐いわ！！なんちゅうモン聞かせてくれとんのやお前は！！」
「ギン、確かこれは『ヤンデレ』つてやつよ」

ギンにおもいつきり頭をひっぱたかれた。ギンは凄惨な剣幕でストーカー男に「お前、はよ逃げろ！殺される事より苦しいことされるで！！」と言った。乱菊もウンウンと頷いている。

ストーカーはギンに言われ、顔を真っ青にして出ていった。その後ろ姿を見送ったギンは「お願いやから道踏み外さんでな？マジで恐いから」と言った。

ボク、道踏み外してるつもりも踏み外したこともないけどなあ？



走って、走って、走って逃げた。殺されるかと何度も思った。アイツ絶対狂ってる、そう感じた。俺は無我夢中で走ると街に出た。街に出ても植え付けられた恐怖は拭えずつただひたすら街を突っ切って走った。すると人にぶつかった。

ぶつかった人は茶髪の黒淵眼鏡をかけた優男だった。どっかの貴族にでも支えていそうな風貌で金を持ってそうな匂いもした。いつものようにカツアゲをしてやろうかと思ったが……先程のようなことがあると中々そんなことも出来なくて、俺はまた逃げようとした。今はただあの恐怖を忘れたかったのだ。だが、走って逃げることはできなかった。

茶髪の男に肩を捕まっていたからだ。

「キミ、私に謝罪も告げず逃げようとしているのかい？」

茶髪の男はよく見ると黒装束を着ていて死神だと分かった。少しずつではあるが霊

圧が段々と上がって来ているのが俺でも分かる。

自分の見に危険を感じた。だから俺はすぐに謝った。

「す、すまねえ……」

「謝るのが……遅い」

茶髪の男は俺にそう言うと言うと前髪を後ろへとかき上げ、黒淵眼鏡を取った。風貌、印象が変わる。先程の優男？そんな奴どこにいる。俺の目の前にいるのは……危険な匂いがプンプンとする奴だけだ。

下手すれば、いや。確実にさっきの子供よりも強い。それに手練れだろう。茶髪の男は「キミみたいなグズミみたいな命でもいい使い道があるさ」そう言った。

——殺される

助けを、逃げなくちゃ、そんな事を考えている間に俺は……。

男は服だけを残して何処かへと消えた。茶髪の男の電気神機になる。男は応答した。

「はい、藍染です」

『どこにおるんや、藍染。お前、書類持ってどこさん消えたんや。はよ渡さな俺卯ノ花隊長に怒られてまう』

「ああ、すいません。今すぐ帰りますね」

茶髪の男は上司からの電話で先程の殺伐とした空気をしまい、眼鏡をかけ前髪を最初のように戻し瞬歩で上司の元へと戻った。

運命の歯車が回る音がした――。

市丸碧の風邪

朝5時。ボクは朝ごはんを作るため、目を覚ました。現在の季節は冬。その為、布団から出たくないのだがその気持ちを押し殺ししぶしぶ冷水で顔を洗う。

「ゴホッ」

喉が痛いような気がする。頭が痛いような気がする。あくまでも気がするだけである。ボクが風邪引くなんてそうそうないし（多分）。

ご飯を炊いて味噌汁作って鮭を3つ焼く。乱菊は朝はそんなに食べないから量は少なめで鮭の大きさも小さいのを。ギンは気分によつて食べる量が違うからいつも適当。多く出しても残しはしないので適当でいいのだ。今回、ボクは食欲がないので少なめにしておく。

6時15分頃に頭にピヨンと可愛らしい寝癖をつけたギンが起きた。

「ふあああ。寒いわ〜」

「おはよ、ギン」

起きて初めて今日しゃべったのだが、声がなんともガラガラだ。ギンも勿論それに気づいていて「風邪か？」と聞いてきた。ボクは頭を横に振る。

「朝だから、声が、出てない、ただだよ」

ギンは納得していない様子だったが「とりあえず顔洗ってくるわ」と言っただけで寝癖を直しに行った。

ギンが戻って来る頃には朝ごはんの準備は完了して後には乱菊を起こすだけとなった。

「ボク、乱菊起こしてくるわ」

「う、ん」

いつもなら自分の料理を見て空腹心を擦られ早く食べたいと思うのだが今日はそれが無い。逆に吐き気があり正直に言うとも今でも吐いてしまいそうだ。

「おはよく…顔色悪くない？」

乱菊が起き、ボクの顔を見て一言。ギンは「さつきよりも顔色悪くなつとるで」と言った。

「熱あるんじゃない？」

「……吐きそう」

ボクの眩きに驚く乱菊とギン。乱菊とギンがあたふたしてる間に結局ボクは吐いてしまつてダウン。布団の中へと連行されてしまった。

「ちよつとこれ熱高いじゃない!!なんで早く言わなかったのよ!!」

なんでつて…乱菊寝てたでしょ。そんな事を口に出す前にボクは目を瞑った。



体が弱いのは誰に似たのかはわからない。いつも季節の変わり目に熱を出して父ちゃんに看病されてた記憶がある。

「きついならきつい、つてちゃんと言わな。ボクわからんで？」

「…ごめんさい…」

「怒つとるわけやないんやけどなあ…。まあ早く治し」

父ちゃんはボクにそう言うと言つて頭を撫でてくれた。父ちゃんの手は暖かくてそれでいて優しく。安心できた。

——そんな昔の夢を見た。



女が1人立っていた。銀髪のボクに似たような…まるで成長したかのような男も

立っていた。男と女は白い、なにもない世界で何かを話していた。内容は聞こえない。女は姿を変えた。男の姿へと。男は二人になった。表情も体つきも全て同じ男に。男は苦笑いだった。もう一人の男はまるで悪戯が成功した時の子供のような笑みで笑った。

場面が変わった。

銀髪の、ボクと言うよりかどちらかと言うとギンに……父ちゃんに似た男が口から血を出して倒れていた。それに寄り添うように乱菊に似た……母ちゃんに似た女が泣いていた。

それを遠くで目を真っ赤にしたボクを成長させたような男が見ていた。男の顔からは憎しみ、怒り、哀しみ現れていてすぐに分かった。

男は叫んだ。なんて言っているかはノイズのようなものがかかっているからわからない。確かのは母ちゃんに似た女が男に何かを言っている事だけ。ギンに似た男は前に立っているオレンジ色の髪をした男の瞳を黙って見ていた。

「あいぜエエエエンンンンンンン!!」

急にノイズが取れたかと思えば聞こえたのはボクを成長させたような男が叫んだ『藍

染』と言う単語だけ。一体ボクは何を見ているのだろうか。何故こんなにも……『藍染』と言う男を殺したい衝動に駆られてしまうのだろうか。

分からない、わからない、ワカラナイ。

目の前が赤く、黒く染まっていく。何がなんだか分からない。何故だか恐くて鳥肌が凄くて涙が止まらなかった。

ボクの瞳とギン似の男の瞳があつた。ギン似の男はこの場では似合わない笑顔で、口パクで「ありがとう」と言った。

どんな意味のありがとうなのか分からない。何故ボクが見えているのか分からない。どうしてボクに言うのか分からない。全てが分からなかった。けれど、今ボクもこれを言っておかなければいけないような気がして――。

目に涙を溜めてボクも言った。

「（ちんこ）そ、ありがとう」

ギン似の男は嬉しそうに笑って、そして臉を閉じた。乱菊似の女の叫び声が空に、空座町に響いた。



「ギン!!ギン!!」

どんなに叫んでも、揺すつてもギンは私を見ようとはしない。一護の瞳を見たかと思えば全然違う方をただボーとしたような感じで見ていた。

「ありがとう」

ギンが誰かに呟いたかのように言った。ギン、それは一体誰に言った言葉なの?なんでそんなに:嬉しそうな顔をしているの?私には分からない。

ギンは暫くすると更に嬉しそうな顔をして目を瞑ってしまった。何故そんなに安らかな顔なのか聞きたくてもギンはもう目を瞑ってしまったって聞けなかった。それに今の状態じゃ:声も出せないわ。



目を開けると一番最初に見えたのは木と藁でできた屋根だった。次に見えたのは心配そうなギンの顔と乱菊の顔。

さっきのは…夢か。何を見ていたのか忘れてしまったけれど、悲しい夢だったような気がする。まるで大切な人が死んだような――。

「大丈夫か？もう夜やけど飯、食えるか？」

ギンに喋りかけられ現実に戻る。結構長く寝ていたらしい。空腹感はそんなにならないけれど何かを胃に流し込まなければならぬと思ひ「少しだけなら」と言った。乱菊はボクの返答を聞いて「あたし持つてくるわ！」と炊事場へと走って行ってしまった。

「乱菊が珍しく作ったんやで。命の保証は出来ん」

「…なにそれ、恐っ…」

ガラガラな声で言うときんは「何度聞いてもおもしろいわ、その声」と笑いながら言っ

た。仕方がないじゃん。風邪引いてるんだから。

「持つてきた!!」

乱菊はどうやら鍋からおわんに少しだけうつして持つてきてくれたようだ。乱菊曰くたまごがゆを作ったらしいのだが尋常デパートないほどグツグツと言っている。少し：煮込み過ぎたではないだろうか？

ギンもそう思ったらしく「これ煮込みすぎやない？」と乱菊に言っていた。

断言できる。今あんな熱さのたまごがゆなんか食ったら違う意味で喉が死ぬ。それだけは避けたい。だが乱菊作たまごがゆは一向に冷える気はない。

あんな人を一人殺せそうなお粥をとりあえず冷めるまで放置しとく事にする。熱のせいか頭が痛いようなボーとして体も鉛のように重い。

数十分経つとさすがに殺人たまごがゆも冷めてきて食べれる温度になった。たまごがゆはとても辛かった。そこら辺の漫画の主人公のように口から火が出せるかと思っただぐらい辛かった。

余談だが次の日ギンと乱菊も風邪を引いた。

「…あ…く…:…:…:…:…:…:久しぶりに風邪なんて、引いたわ…:ゴホツ」

「あ、あたしもよ…:…:…:ゴホツ」

「お粥作ったよ!!」

「…:…:…:なんでアオイ、そんなに嬉しそうなん？」

平子真子現世へ行く

「あれ？ギンと連絡がつかない…」

ようやく五番隊も落ち着きちゃんとした隊として活動ができるようになった頃。偶々近くを歩いていたら乱菊ちゃんが道のど真ん中で歩く足を止め、伝令神機を見つめながら呟いた。

「そんな所につつ立つとつたら危ないで乱菊ちゃん」

「平子隊長…」

「どないしたん？」と聞けば乱菊ちゃんは「ここ最近ギンと連絡がなくなっちゃって…」と心配な表情で言った。

俺の元部下、市丸ギンは死刑にはならなかったものの尸魂界を追放され現在息子と一緒に空座町に住んでいるらしい。噂によると子供ができたせいなのかかなり丸くなっ

たという。

「そりゃ心配やわ」

「…現世に行こうかしら…」

心配そうに呟く乱菊ちゃんに俺は「ついこの前も行つたらんかった？」と聞く。乱菊ちゃんは「でも…」と。かなりギン達のが心配らしい。ギンお前、信用されたらんな。少しだけザマアみるなんて思うが勿論声には出さない。今そんなこと言ったら目の前にいる彼女に殺されるだろう。それだけはごめんだ。

「なら俺が見に行つてやろか？」

「え？」

「忙しいんじゃ…」と言う乱菊ちゃんに俺は「今まで忙しかったからなあ。取れなかった分の有給取るんや。ちょうどギンの息子に会ってみたいと思つとつたしええやろ」と言つた。乱菊ちゃんは「ありがとうございます！」と俺に頭を下げた。

……美人に頭下げられるのも悪くはないわ。

ついこの前まで五番隊は忙しかった為、ギンの結婚式にも何もでれなかった。強いて言うなら乱菊ちゃんが息子の名前で「キン」か「シロガネ」と言う何とも言えない名前で悩んでいるところに「碧」と言う新たな選択肢を与えたぐらいだろうか。

乱菊ちゃんのネーミングセンスに違和感を感じていたギンには礼を述べられた。勿論悪い気はしない。逆にそんな名前で良かったのかと思う程だ。

勿論碧に会ったことはない。現世になんて本当に久しぶりに来るぐらいだ。道に迷わず行けるか、そこが鍵だと思う。

穿界門せんかいもんを開き現世へと下り立つ。人間界は相変わらず尸魂界とは違って洋風である。久しぶりに来ると慣れないものだ。

乱菊ちゃんから家までの地図を貰っていた為それを見て行くとする。地図によると街の近くではなく遠く離れた人が住まないようなところに家を建て住んでいるのと。：アイツ、なんかかんや言つてヒトと関わるの嫌いやもんなあ……。

基本は一人でいることを好むギン。そんな奴が父親になつとるんや。やつぱ長生きしてみるもんやと思う。

クスクスと笑いながら歩くこと30分。かなり大きい家が見えてきた。思わず俺は苦笑いを漏らす。

「…一人しか住んどらんのにこんな大きな家いるか？」

張り切って大きく作りすぎてしまったのか、そんなことはギンにしか分からない。もうしかすると乱菊ちゃんからの頼みかもしれないしな。

ドアをノックするが誰も出てこない。ドアには鍵がかかっているようだが開く。どうせギンの家なんやし勝手に開けてもええやろ。俺はドアを開けてズカズカへと入っていく。

電気も何もついていなくて、廊下は暗い。ギンの姿も見えなければギンの息子、碧の姿も見えない。ヒトの気配がしない。まさか…ギン、お前変なもんじ巻き込まれとるとちやうやろな？

一抹の不安を掲げながら俺はリビングと思われる扉を開く。中には電気も何もつけず座り込んでいるギンがいた。

「…おるなら出ろやボケ」

「平子隊長…」

ギンは座り込んでいる為、俺を見上げる形となっている。ギンの瞳には光がないよう

に思える。思わず「なんかあったんか？」と聞いてしまった。

「…碧がいなくなつてしまつた。探しても探してもおらん。何処に行つたんや碧」
「…どう言うことや。詳しく話せ」

ギンから詳しく話を聞いた後、帰つてこない可能性を感じた。少なくとも今は帰つてこれないだろう。ギンも同じことを思つていたのかいつでも碧が帰つてこれた時のために家にいるとか。

「お前、今みたいな暮らし碧が帰つてくるまで続けてみ？死ぬで？」

「……………」

「ほら、飯食え。買うて来たから」

ギンの家に来る前、腹が少し減つたので弁当を買ってきたのだが……ここはギンに譲るとする。ああ、俺なんて優しいんやろ。部下思いやわあ。

弁当をギンに渡すと渋々と言つたような感じで食べ始めた。ギンが弁当を食べているのを見て俺は少し懐かしく思う。

昔のギンはこれ程食べなかつた。貧しい生活を乱菊ちゃんと二人でやっていた為か自分が食べるのは半分も満たないぐらい。他の全ては誰かにあげてしまうのだ。時々昼飯など一緒に行くと「平子隊長お腹空いとります？ボクもうお腹いっぱいだからあげる」なんて言つて半分入つた飯を無理やり食わされた記憶がある。

草食で気を抜いたら朝飯と夜飯を抜こうとするものだから無理やり食べさせていた。けれどやっぱり全部食べることは出来なくてそのせいかなギンは細くて小柄だった。

今のギンだつてそうだ。昔よりかは食べるものの相変わらず身長と比べ体重は少なくて時々心配するほど。家事は碧がやっていて碧の作ったものなら残さず食べると乱菊ちゃんから聞いていた。息子ができたのはギンにはええ影響を与えてるみたいや。良かったなギン。

「…そんなジーと見られると食いにくいんやけど」

俺の視線に気付いた記憶は嫌そうな顔をしながら言う。俺はニヤニヤとした顔で「気にせんで食え」と言つた。

「せやから無理やて」

「なんや、器の小さい男やな」

「ボクは隊長さん程凶太い神経持つとらんやけや」と減らず口が帰ってきたので「そんなこと言つとると捨てられるで」と言った。

「乱菊はボクのこと捨てんよ」

「おつ、惚れ気か？嫌やわあ、自慢なんて聞きとうないわ」

「嫌や嫌」と言うどギンは段々と調子を取り戻してきたのか、空元気なのか「ひよ里さんといつ籍入れるや？」なんてアホなことを聞いてきよった。思わず自分でいれた茶を溢してしまふ。

「人ん家で茶溢さないでもらえますか？ちゃんと片付けてな」

「なんでひよ里や!!もつとましなもん居ったやろ!!」

「てつきり隊長はひよ里さんのこと好いと思つとつたんやけど…違うんか？」

コテンとした顔で首を傾げるギンに俺は叫ぶ。

「違うわ！アホ!!誰があんなチビ猿……」

「誰がチビ猿や!!」

「ぐふっ!!」

急に背中が痛くなつてなんやと思えばひよ里が飛び蹴りしよつた。…いつの間に入つてきたんや。

「なにすんや!!殺されたいんか!？」

「はっ、誰がお前ごときに殺されるかアホ!逆にこつちが殺してやるわ!!」

「おーおー!やれるもんならやつてみ!!返り討ちにしたる!!」

「…人ん家の家で堂々と喧嘩するの止めてもらえますか?後、勝手に入つてこられちゃ困るんやけど」

ギンがひよ里を見つめて言うどひよ里は「アホ!!何回もドア叩いたわ!!出てこんお前が悪いんやろ!!」と言つた。

「それにしても何しに来たん？」

「あ？食材持ってきただけや」

「食材？」

「碧、主夫業忙し過ぎて友達できとらんかったからウチが手伝えること手伝つとるだけや。今は月一で野菜なんかを持ってきたてやつとるやで」などと得意気な顔で表情でひよ里は言った。

「なんや、アイツ友達おらんのか？そんなところもギンに似よつたな」

「ちよつとそんな誤解を生むようなこと言わんでもらえます？ボクにも友達の人や二人おられますから」

「誰や？ぜひ聞きたいなあ」

「……………」

俺の質問に答えられないギンを見て「おらんやないか」と言えば「シンジも似たようなもんやろ」とひよ里は言った。

「はあ？俺はギンと違っておるで。友達。…拳西とかおるしなあ」

「あれは友達ちやう。腐れ縁言うんや」

「はあ!？」

「ふっ、五番隊の男共は友達もおらんのか。ダサいなあ」

この後ギンと俺とひよ里でどこからが友達なのか、というくだらない話を二時間程やった。話終わった後の何とも言えない虚無感などは見てないフリをした。

市丸碧と市丸ギンの怒り

「今日はあたしが料理するわ!!」

「はあ?」

乱菊の突然の宣言にボクとギンは顔を歪める。正直行って乱菊は料理は上手ではない。彼女もそれを重々承知のようで料理はボクやギンに任せてきた。

「あたしも女よ!料理の1つや2つできないと!!」

「そんなこと言つてボク達が死んだらもとも子もないやろ」

「ちよつと!!それはどう言う意味よ!!」

乱菊とギンの言い合いをボクは微笑ましく思いながら見ていた。乱菊はギンに拾われここに来た。ボクは乱菊よりも先にここにいたからギンとの付き合いはボクの方が長いのだがどうにもボクよりも乱菊の方が仲良く見えて仕方がない。

それがとても羨ましく、そして喜ばしく思えた。ボクはこの世界の本当の住民じゃないから。そんなに深く関わりは持てない。だから良かったと思える反面少し寂しく思う気持ちもあるのだ。勿論口に出すつもりはない。だって二人ともそんなこと思っていないから。

これからもずっと3人で、なんてそんな夢物語は永遠に続かない。少なくともボクは本当の世界に帰らないといけないし、二人だって二人の未来がある。

「ほら！早く薪とか拾ってきて!!」

ギンと一緒に家を追い出されボクとギンは顔を見合わせる。二人同時にため息をつくと「仕方がないなあ」と言った。

「…今日、まともなもん食えろとええんやけど」

「…乱菊を信じよう…」

ついこの前作ってもらったお粥がトラウマになりつつあるので正直言って乱菊の手料理は食べたくない。けれど本人はやる気満々なので文句を言うこともできず、腹を括

る。ギン、ボクが死んだら骨を拾ってもらいたい。

ギンとふたてに別れて重い足取りで薪を拾っていく。時々黒い死覇装を着た男たちを見かけるが無視した。興味ないし関係もない。

ある程度薪を拾い終わるとギンと合流。どんな夕飯が出てくるのか、なんて議論しながら家までの道のりを歩いた。

遠くから見ても分かった。家がボロボロで、誰かが立っている。黒い死覇装を着てて側に寝ているのは――。

「乱、ぎ、く…?」

隣でギンの呟く声が聞こえた。このままだとボクらまで見つかってしまう。それは…得策ではない。そう判断したボクはギンの片腕をつかんで大きな木の後ろに隠れた。

「離せ!!乱菊助けな!!乱菊助けな!!」

「落ちていて…!ここでボクらまで見つかったら更に乱菊助けられなくなる!!」

きつとあの男は隊長クラスだ。斬魄刀を所持しないボクでは勝てないだろう。それ

はギンだって同じ。ギンはボクの言葉を聞いて黙った。そして乱菊を傷つけた男を覚えるように、恨むように見つめていた。

男は乱菊から何かを取ると満足したような顔で消えた。ボクたちは走って乱菊に駆け寄った。

「乱菊!!乱菊!!」

「…気絶してるだけ……」

土まみれになっている乱菊の土を払いおとすとギンが乱菊を背負った。

「一先ず乱菊が安心して寝れるところ探さな」

ボクはギンの言葉に頷いた。

何百メートルも歩いて歩いて歩く誰も使っていない小屋を見つけた。ついこの前作ってまで人が暮らしていたのだろう。家具とかも充実していて乱菊を寝かせることに成功した。

布団に乱菊を寝かせるとギンは立ち上がった。

「何処に行くつもり？」

「…ボク、アイツがゆるせへん」

「それはボクも一緒だよ」

「…ボク、死神になろうと思う」

「は？」とそっけない声がボクから出たのが分かった。ギンもこんな返答を予想していたのか驚いた様子は無い。

「死神になってアイツ欺くんや。そして…乱菊から奪ったものを取り返す」

「……」

「だからボク、行ってくる」

ギンは行き先を告げずに消える悪い癖がある。けれど、ギンはわざわざボクに行き先を告げてくれた。教えてくれた。それがちよつと嬉しくてこんな雰囲気でも笑ってしまう。

「なんで笑つとるん?」

「…ボクも手伝うよ」

「は?」

ボクは笑いながら言った。

「きつとアイツは強い。ボク達よりもはるかに強い。強い相手に1人で勝とうなんて無謀なことしないで二人で力を合わせて確実に勝つんだ。それで、乱菊が奪われたもの、取り返そう?」

「ははっ……なんやそれ……」

「ギンだけに業は背負わせないよ。ボクも一緒に背負う」

ギンの手のひらを握りしめるとギンは「ありがとう」と小さく呟いた。

「これから、ヨロシクね相棒」

ボクとギンは寝てる乱菊に行き先は告げず死神になるためその場から姿を消した。



死神になるには真央しんおう霊術院れいじゅつゐんに通わなくてはならないらしい。さてどうしたものか。
ギンとボクは話し合う。

「いつそのこと死神襲おう」

「…それ、大丈夫なの？」

いきなりの爆弾発言にボクは目を丸くしながらギンに聞くと「知らん」と帰って来た。

「けど、襲った死神アイツに見せたら死神なれると思うんや」

「根拠は？」

「勘」

策も何もないのでとりあえずギンの案で行くことになった。とりあえずつて言うか：ギンの案は一発勝負でそれもありリスクが高い。下手すれば死神になる前に牢に入れられる可能性だつてあるし、逆に返り討ちにされて死ぬかもしれない。けど、そんなことを言つてゐる時間はボク達にはなくてギンの案で行くしかないのだ。

死神を襲う前に乱菊を襲つた男のことについて調べた。案外簡単に出てきたのだが——真実とその男の偽りの姿は大変な差があつた。

乱菊を襲つた男は尸魂界でもモテる男として、有能な副隊長として有名だつた。優男だとかなんだとか色々情報には手にはいつた。けれどこれは全て：偽り。

乱菊の大事なもん奪つといつて優男？紳士？冗談はよしてもらいたい。あんな冷酷な目をした男が優男で紳士な訳がない。アイツは周囲を嘘の情報で騙してゐるらしい。

男の名前は『藍染惣右介』。どこかで聞いたことのあるような名前であるが思い出せない為あきらめる。こいつは五番隊の副隊長をやつてゐるとか。

五番隊：これまたどこかで聞いたことのある単語だ。勿論思いだせはしなかつた。無念。

「なあ、あれ」

ギンが指差したのは流魂街へと赴く藍染の姿。藍染が瀟靈廷から出たこのチャンス
を逃す訳にはいかない。ボク立場近くにいた死神の身ぐるみを全てはきとる。多少怪
我はしたが大丈夫だろう。

「…君達は…」

僕達の靈圧に気づいた相手にが近寄ってきて話しかけた。ボクとギンは張り付けた
ような胡散臭い笑みを浮かべて言った。

「あんた、藍染惣右介言うんやろ？」

「ボク達、どうしても死神になりたいんだ」

「何でも手伝う。せやから——」

「——ボク達を死神にして」

藍染惣右介は一瞬キョトンとしたような顔をしたがすぐに笑った。

「…何でも手伝う、それに二言はないね？」

ボクとギンは頷く。すると藍染はボク達に手のひらを差し出してきた。

「いいだろう。私は藍染惣右介。これから君達の上司となる人間だ」

ボク達は忌々しい藍染の手をとった。



藍染の力によって真央霊術院に通うことが決定したボクとギン。真央霊術院とはとてもつまらないものであった。今では始解も習得し約一年で卒業。みんなからは『神双』と呼ばれるようになった。

「ギンの斬魄刀と同じ名前だね。ボくら」

「ああ、『神双』のことかいな？　そう言えばボくら双子だと思われてる見たいやで」

「あ、それ知ってる。ボクも時々ギンと間違えられる」

「ボクもや」

髪の色も表情も体型もほとんど似ているボク達は双子だと思われていた。周りからは見分けがつかないらしく「とりあえず関西弁の方がギンな」という噂が流れている程だ。

ギンは「血は繋がっていない」と否定しているらしいが名字も風貌も同じなボくらが信じて貰えないようだ。ギンは父ちゃんだから血は繋がっているのだけれどこれはさすがに教えられない。

「うわあ、いっぱいスカウト来とるで」

「…全隊舎から来てるじゃん」

「ボくらえらい人気者になってしもうた」

「まさかここまでとは…。噂の力恐るべし」

卒業と同時に護廷十三隊に入らなければならない。その為何処に入ろうかふたりで話し合っているところだ。

「何処に入隊する？」

「五番隊に決まつとるやろ」

「だよ。アイツを監視しなきゃだし」

こうしてボクらは五番隊に入ることとなった。



『神双』つちゆう奴は餓鬼なんやろ？そんな奴が入ってきてホント大丈夫なんか」

「確かに彼らは小さい。けれど、力があることは確か。真央霊術院を一年で卒業するなんて前代未聞ですよ」

「それは隊長も分かっていることじゃないんですか？」と藍染に言われ俺は眉を潜めた。

藍染、お前は一体なにを考えとる。

『神双』が五番隊に入ると決まる約半年前。五番隊の参席と四席が虚に殺されたと連絡が来た。そのせいで今そこは空席となっており、『神双』の二人は参席と四席につくこととなったのだ。それも：藍染の推薦で。話が良いすぎると思った。

まさかお前、『神双』も巻き込むつもりちやうやろな？ここまで藍染の全て策略通りだとしたら——。俺は少し頭が痛くなった。

「隊長、部下の前なんですからしやんとして下さいね。いつもみたいなくらいたら披露したら今度こそ殴ります」

「おーおー、上司を殴る副官なんてこの世に存在しちやあかんやろ。そないなことしたら後でどんでん返し来るで」

藍染は「はあ」とため息をつくと木製のドアを開いた。

部屋の中には銀髪の二人が椅子に座っていた。開いたドアに気づいたのか少しだけだが戦闘態勢に入る。ほう、反射神経はええみたいやな。

「そんなに身構えないで。この人は一応隊長だから」

「一応ってどう言うことや惣右介。ってこいつら俺に身構えとつたん!？」

「藍染副隊長こんにちわ!」

「なんや!!この餓鬼イラつくなあ!!」

俺はまるでこの場にいないみたいないな扱い方。上司普通はこんな扱い方されへんで。つちゆうか……。

「なんや『神双』の片割れはあん時の餓鬼かいな」

「…ロン毛なオッサン。キモ」

「…お前、やっぱり指導が必要みたいやな」

まさかあん時俺が死神にスカウトした奴が『神双』なんてたいした異名つけてくるとは思わなかったわ。相変わらず口は悪いし上司に「キモい」なんて普通使わんやろ。それにしても。

「お前らほんまに似とるな。それでも血は繋がつとらんとやろ?」

「そうやで。幼なじみではあるけど全くもってあかの他人や」

「この世には同じ顔が3人いるって言うぐらいだしまあ変じゃないでしょ」
「いや、可笑しいやろ!!」

二人とも張り付けたような胡散臭い笑みを張り付けているため全くもって見分けがつかん。ありがたいことに二人の喋り方は違うのでそこから見分けをつける、ということ。こいつらが俺の部下になる。：俺の部下にはまともなもんおらんのか？

「まあ、これから頑張れや。餓鬼共」

「禿げろロン毛」

「宜しゅうお願ひしますわ」

「おいこら右!!ちよつと表出ろや!!」

俺は確か碧つちゆう名前の奴を指差した。

平子真子の悩み

「あー、もうイラつくわあ!!」

「どうしたんですか? そんなに怒っちゃって」

「喜助、俺とんだじゃじゃ馬部下持ったみたいやわ」

藍染が側にいないことをいいことに俺はサボっていた。十二番隊の隊長浦原喜助とはそこそこ仲がよくこうして時々サボっては顔を出したりしていた。

「ああ、噂の『神双』って言う二人組ツスね? ボクも噂でしか聞いたことないツスけど、そんなにじゃじゃ馬なんスか?」

「あんなのただの餓鬼やで。静かに休憩しとるなあ思うたら俺の隊首羽織を布団がわりにしとったり、すぐ甘いもん要求してくる。あれは餓鬼や餓鬼」

「…やつぱりこう言うものは噂じゃ分からないものツスね」

——情のない残忍な二匹の蛇

——本当は実力なんてなくて金でもつぎ込んだのではないか
——どこかの死神の手柄を横取りしたのではないか

裏で言われたい放題をしているギンと碧。そんな奴見つけたら俺はちゃんとした真実を教えてやつとる。が、こんな悪い噂程中々消えないのだ。

「金でもつぎ込んだ、なんてアホらし。そもそもアイツら流魂街出身やのにどうやってつぎ込むねん。金なんか持つとらんわ。それにつぎ込まれてもこっちは腐るほど持つとる。そんなに要らんわ」

「ええーボクとしては研究費とか諸々かかっちゃうんで欲しいツスけどね」

「つて言うかその腐るほど持つてるお金ボクにもわけてくれませんか？」なんて言う喜助の頭を俺はおもいつきり叩いた。

「えーと確か市丸サンと碧サンでしたっけ？」

「ん？それがなんや？」

突然あの餓鬼達の名前を出してきた喜助は「あの二人って容姿とても似ているんでしょう？見分けつくんですか？」と聞いてきた。

「これが意外に結構つくもんやで。なんちゆうか…碧とギンには上下関係みたいなものができるってな」

「上下関係？」

「無意識やろな。なんか碧がいつつも下手に出てる感じや」

そないなところを見ると、なんだか危なっかしく思うんや。碧がいつかギンの盾になつて死んでしまいそうで、目が離せん。

「あ、平子サン」

「なんや？」

「隊首羽織に…涎、ついてますよ」

喜助が指差したところを見ると確かに涎だと思われるシミが2つほどついていた。俺はそれを見て叫ぶ。

「……あのくそ餓鬼共オオオオ!!」

明日、隊首会あるのにどうしてくれるんや!!



「……こつちにはおらん」

「こつちも」

ボクとギンはロン毛こと平子隊長を探していた。藍染は虚討伐とかなんとかで五番隊を留守にしており、平子隊長のサボりを監視する人がいなくなってしまった。

それに藍染からの言い付けで『平子隊長の監視と見張り頼むよ。すぐに帰ってくるから』と言われてしまった。しかしあんなお転婆ロン毛をずっと見張ることはできず少し目を離れたすきに消えてしまっている。今慌ててギンと探している状況だ。

「どないしよ。これ絶対ボクら怒られてまうで」

「…マジどこ行つたんだあのくそロン毛」

「口、悪うなつてもうてるって」

「ついうっかり」

ギンに口の悪さを指摘されやめる。そもそももういい歳した大人なんだからサボるなよ。子供に探させてどうするんだ。隊長として失格じゃね？なんて怒りを持ちながらも探すこと数十分。十二番隊の周りをウロウロしているとひよ里さんにあつた。

……ひよ里さん、死神やつてたんだ…。なんか意外。前ひよ里さんは死神が嫌いだと言っていた。そんなひよ里さんが黒装束を身に纏っているところを見るとなんだか新鮮に思う。

「こないなところで何しとんのや」

「確かシンジのところに新しく入ってきた奴やろ？」と聞かれボクらは頷く。

「市丸ギン言います。どうぞこれから宜しゅうお願いしますわ」
「市丸碧です。よろしくお願いします」

名前を言つて一礼するとひよ里さんは一言。

「なんやお前ら礼儀正しい奴らやな!!ウチそう言うの嫌いじゃないで!!」

「猿柿ひよ里や。シンジのことで困ったことあったら遠慮なくウチに言い。成敗してやるわ!」と笑つて言つてくれた。ボクとギンは顔を見合わせる。そして頷いた。

「ん?なんや?なにかあつたんか?」

「今、隊長何処に居るか知つとりますか?サボつて消えはつたんですよ」

「お陰でボクらほとんど瀨霊廷歩き回つてしまつて…」

「アイツ…!!」

ひよ里さんはワナワナと肩を震わせると「ついて来い。ウチが案内してやるわ」と言つて歩き始めた。

「居場所分かんのですか？」

「澁霊廷探し回って居らんかったのやる？」

「後は十二番隊の周りだけやで。探しとらんの」

「だったらここにしかおらんわ。アイツ…友達おらんからな」

ひよ里さんはズカズカと隊舎に入ると真っ直ぐ隊首室を目指した。隊首室のドアの目の前で足を止めたかと思うと——ドアをおもいつきり蹴飛ばした。

「おいコラシンジ!!なに部下に迷惑かけとんねん!!アホか!!死ね!!」

「あら、ひよ里サン。お帰りなさい」

クリーム色をした髪 of 男の人の横にはボクらの隊長平子真子が座っていた。ひよ里さんは隊長の胸ぐら掴むとグワングワンと前後に揺らし言う。

「お前も隊長なんやろ!!仕事ぐらいサボらずにやれ!だから部下に呆れられるんやろ!!」

「はあ!? 呆れられとらんわ! 俺だってな少し休息が必要やねん! ずっと働き蟻のように働いてられるか!!」

「なにが休息やねん! そんなマトモな言葉で取り繕うとしても無駄やハゲ!!」
「ハゲとらんわ! チビ!!」

マシンガンのように悪口の言い合いをしていくひよ里さんと隊長を遠目で見てみるとクリーム色が話しかけてきた。

「どうも。十二番隊の隊長を勤めさせてもらってる浦原喜助ツス。宜しくしてもらえるとありがたいツスね」

「……胡散臭」

「…酷い!」

思っていたことが思わず声に出してしまった。どうやらそれはギンも同じのようである。ボクらは顔を見合せると笑った。

「ぶぶー!! 喜助! お前嫌われとるな!!」

笑っている隊長にボクは「安心してください、隊長。ボクらもそんな隊長好きじゃないですから」と言った。すると隊長は「なんやて!! どう言う意味や!!」と言ってきたので「そのまんまの意味ですけど?」と返しておく。すると横から「ちやつかりボク巻き込まんといてよ」とギンが言ったがボクは聞こえていないフリをした。

「お前、入隊してまもないコイツらにそんなこと言われるなんてもう信用がた落ちちゃんけ」

呆れた目で呟くひよ里さん。ひよ里さんの言葉を聞いてギンが口を開いた。

「ボクはそんなこと言つとらんで」

「…ギン……!!」

「ま、好きか嫌いかで言われたら嫌いやけど」

上げて落としたギンはかなり性格が悪いと思う。そんなギンを見てボクらのような胡散臭い笑みを更に深くしているこの浦原って言う人は更に性格が悪い。

「嘘や嘘。本当はそないなこと思つたらん。だからそんなに泣かんで。ええ年頃なんやから」

「な、泣いとらんわ!!アホ!!」

「帰るで!!」と大声を出して先に行つてしまつた隊長を見て慌ててボクらはひよ里さんと浦原（呼び捨て）に一礼をし、追いかける。

そんな姿を見て浦原がボソリと言つた。

「…なんだか、親子みたいツスねえ」

「あれがが?」

ひよ里の疑問に浦原は「ええ」と言つた。

「なんだかんだ平子サンも好かれてるようですし、ボクらは研究を進めようとしましよう」

「ウチ、手伝わんからな」

ひよ里の言葉に浦原は土下座をして頼み込みひよ里から冷たい目で見られるのは数分後の話。



。 澗靈廷と流魂街は違う。その為、ボクとギンに慣れないことが沢山あった。例えば――

「なんやお前ら。ほんまにもう食べへんのか？」

「うん。お腹いっぱい」

「ボクもや」

食事の量、とか。ボクもギンもかなり草食な方なので食べるという概念がそんなにな
い。昔乱菊に食べなさすぎると怒られたこともあった。

流魂街にいるときは生きるのに必死で食事の調達なんか自給自足だったからそんなに多く食べれない。そんな流魂街とは違い瀨霊廷では沢山ご飯が出てきた。その為、ご飯なんか半分も食べきれずダウンしてしまう。

残すのももつたないので平子隊長にあげようとするのだが中々平子隊長は受け取ろうとしない。嘘じゃなくて本当にお腹いっぱいなのに。

「食べな背大きくならんで」

ボク達の前に置かれていた丼を食べながら平子隊長は言った。ボク達、食が細いからこんなに小柄なのかな？

多分こんなところは父ちゃんに似たんだと思うけど。父ちゃんいつも母ちゃんに「あんた身長と体重の比率がおかしいのよ!!」なんて言われて怒られていたこともあったし。……うーん、やっぱり父ちゃん似か。

「よくそんなに食べれるよね」

「よく太らんなあ」

「俺はお前らとは違って働いとるからな」

「それ、あんたが言えん」

平子隊長はよく食べるけど太ってもいないし細過ぎてもないちようどいいぐらいの感じの人だ。身長もそこそこ高い方だし少し羨ましい。ちなみに父ちゃんもつと高かった。

「お前ら流魂街時代なに食いよったんや」

「よく食べてたのは……」

「干し柿やね。あれは美味しい」

「それ、腹に溜まるか？」

「意外に溜まるんや、これが」というギンの言葉にボクは頷く。平子隊長は怪訝そうな目でこつちを見てきている。嘘じゃないって、本当だつて。

結論から言うと平子隊長は約二人前を食べた。…よく食べるなあ、この人。



「平子真子よ。その隊首羽織についておるシミはなんじゃ」

とある隊首会。総隊長に聞かれ俺は冷や汗を流す。総隊長は隊首羽織を何故か大事にしとるからシミとかがついとると五月蠅いんや。

「わあ、ホントだ。2つほどついてるねえ。…涎かい？」

「ボクもよく枕にするんだ」と言う京楽に「アホか」と言う。

「うちの餓鬼共が布団がわりにしよった。お陰でこの様や」

「ん？平子結婚なんてしていたか？猿柿との間にできた子供か？」

「ちやうわ!!と言うかなんで相手がひよ里やねん!…新しく入ってきた奴や。二人おつてな、これがとんだじゃじゃ馬で……」

「ほう、会ってみたいな」

浮竹がにこりと笑う。アイツ餓鬼好きやからな。全く餓鬼のどこがええんか…。

「ペ、いつ!!」

この後すつごく総隊長に怒られた。勿論、隊首羽織を枕として使ってるなんてカミン
グアウトをした京楽と共に。

市丸碧の斬魄刀

「なあ、そう言えば、お前らの斬魄刀ってどないな物なんや?」

平子隊長がボクとギンに聞いてきた。ボクとギンは顔を見合せると言った。

「『鬼火』^{おとび} って言う名前前の斬魄刀です」

「ボクのは『神鎗』^{しんそう} やで」

「いやそないなこと聞いとるとちやうねん」

「能力や、能力」と言う平子隊長に「えー、教えたくないなあ」とボクは言った。

「ボク達のが教えて欲しいなら隊長の斬魄刀も教えて下さいよ。何気に始解も卍解も一回も見たことないし」

「俺のか?俺のは『逆撫』^{さかなで} つちゆう名前前の斬魄刀や」

「能力は？」

「誰が餓鬼なんか教えるかアホ」

「ほらー、教えてくれない」

「隊長が教えてくれないのになんでボク達が教えなきゃいけないんですかー」と言うのと
「俺隊長やからな。部下の斬魄刀の能力ぐらい把握しとかなあかんやろ」とボクの頭を
叩きながら言った。ボクの頭は叩かれる為にあるんじゃないぞくそやろう。

「…秘密」

「なんやねん!!教えろ!!」

「どうせ今度虚討伐しに行くとき見るやないですか」

「別に今教えなくてもいいしー」

「…:…はあ、ほんま餓鬼やなお前ら」

「餓鬼」という言葉にムスツとすると隊長は「そうやって一々反応すんのがあかんねん」と笑いながら言った。

「次回隊長ナンパする」

「普通にビンタされて終わるでー」

「見てなあ」

「誰に次回予告しとんねん!! って言うかフラれる前提かいな!!」

ボク達は平子隊長の言葉を無視して歩き出した。結果、隊長に背中蹴られた。痛い。虐待だ。



「まど惑わせ」
「おにび鬼火」

「いころ射殺せ」
「しんぞう神鎗」

とある虚討伐。平子隊長が凄く五月蠅かったので始解を披露することとなった。ボク達の隊長は凄くめんどくさい。そしてうざくてくどい。特にウザいのは髪形だと思

う。

因みにボクとギンはもうすでに具象化まで進んでおり卍解までの道のりもそう遠くはない。これを教えると「お前らほんまに天才か!」と隊長に言われた。隊長曰くボク達は「生意気な餓鬼」であり「天才」には程遠いと思っていたらしい。普通の人間は本人を目の前にしてそんなことは言わない。遠回しに隊長は普通じゃないといつてたりする。

え?ここまで自分の自慢と隊長の愚痴しかないじゃないかって?仕方がないだろ。それほどまでにボクはストレスが溜まっていると言うことだ。考えてみて欲しい。ボクとギンの上司にマトモな奴がいけないことに。一人は黒幕だしもう一人はウザウザ口毛と来た。ストレスしか溜まらない。だからこそこんな戦闘の時にストレス発散をするのである。

「死ねええええええ!!」

ボクの斬魄刀『鬼火』は火炎系の斬魄刀である。周りに沢山の鬼火を出し攻撃すると言うものであるが…。

「…荒れとるなあ」

ギンが呟いた。ボクの後ろには数百個の鬼火が浮かんでおり、そのまま鬼火は虚へと突撃していった。

「フーハツハツハ!!滅びろ!!消えろオオオオ!!」

「…なんか壊れとるで、碧」

「なにが碧をあんな姿に…」

「ストレスやない?この世界はストレス社会やし」

後ろ（セリフは上から順番）で平子隊長と藍染、ギンがそんな会話をしているなんてボクは知らない。

因みにこの日ボクは約数十匹の虚を倒したとして表彰されるのだがこれもまた別なお話。



「悩みあるなら人生の先輩に言うてみ。俺が教えたる」

ついこの前、虚討伐時にボクが沢山のストレスを抱えていることが発覚した。隊長面をする平子隊長はそんなことをいい始めた。

「隊長程 “人生の先輩” と言う言葉が似合わない人は初めてです」

「おいコラ、そりやどう言う意味や」

「そのままの意味ですけど？」

「…なんかコイツ藍染に似てきおったわ」と呟く隊長の足をおもいつきりボクは踏む。因みに後悔もなければ悪気もない。

「いった!!部下が隊長の足踏みおった!!ええんか!?そんなことしてええんか!」

「それ、ストレスの原因の1つだから」

「やっぱり……」

ギンが隣で頷いた。ギンもストレスの原因が分かっていたらしい。って言うかこの人しかいなくね？いやまあ藍染とかいるけれど、アイツ一応優しい設定で今生きてるから。本性を知ってるこつちとしては更に気持ちが悪くてそれがまたストレスになるんだけど。

「なんやねん！碧もギンもほとんど仕事サボってばかりやん！なんで俺がこんなにも苛められなあかんねん!!」

「隊長、全て自分に返ってきてますよ」

「ブーメランです」といつの間にか現れた藍染に隊長は驚きの声をあげた。

「惣右介！いつの間に戻って来よったんや！」

「つい先ほどですよ」

にこりと優しい笑みで笑う藍染はなんとも気味が悪い。ストレスである…。藍染を倒すまではボクのストレス治りそうにもないな。誰か助けてー。

バカ二人、追いかけて

ギンと碧に置いてかれて何十年も経った。あの二人は私を置いて真央霊術院に通うと言う噂を聞き付けた私は慌てて同期のテストを受けて入学した。

結論から言うにあたしとギン、碧の差は大きかった。ギンと碧は一年で卒業し『神双』なんて大層な異名までつけられているにも関わらず私は真央霊術院にきっちり六年居座った挙げ句卒業した後、席官入りすることも出来なかった。

ギンは参席、碧は四席まで上り詰めたと言うのに。

男女の差とかそんな生易しいものじゃないと思う。きつと天才か凡人の差で才能やセンスがあるかないかの差だと思う。そんなの勝てるわけないじゃない。あの二人のとなりを…歩けるわけないじゃない。

ダメよ、弱気になつちやダメあたし。天才？才能？センス？そんなの…あたしは要らない。あたしはそんなの必要とせずたかずはるひさに自分の努力で上まで上り詰めるんだ。

そして今日見事、副隊長にあたしは任命された。話を聞くと前任の高須春寿副隊長が高齢のため、辞退なされたそうたかずはるひさだ。その時高須副隊長が新たな副隊長に推薦したのがあたしだったと。

理由が知りたかった。つい最近ようやく始解が使えるようになったようなあたしが副隊長なんて荷が重すぎる。だからあたしは聞いた。「なんであたしを推薦したんですか?」つて。高須さんは一瞬きよとんとした顔をするするとすぐに笑いだし言った。

「キミが夜遅くまで残って練習し斬魄刀と向き合っていた姿をずっと後ろで見てきたんだよ」

「え……」

まさか見られていたとは。思わぬ言葉にあたしはものすごい間抜けな顔を晒してしまふ。それを見た高須副隊長は更に笑いながら言った。

「副隊長の仕事としてね、最後に十番隊隊舎全ての施設があるんだよ。キミが帰らないことには儂も帰れなかったものだからねえ。つつい後ろのほうで覗き見してしまっただ」

「す、すいません!!」

まさか修行が終わるまで待つてくださってたなんて…!!あたしなにやってんのよ

！バカ!!副隊長の気配ぐらい気づきなさいよ!!

「なに、謝ることはない。若い子が頑張るのはとてもいいことではないか。儂は嬉しいよ。最近キミみたいな情熱を持った子が少なくなつた。確かにキミには副隊長はまだ重荷かもしれないね。けれど、いつかキミはなつてよかつたと思う日が、キミの実力を感じられる日が来るはずさ。キミがなにかを守りたいと強く願うとき、平隊士であることが嫌になるかもそれない。その時は副隊長の権限を使えばいい」

「……え?」

「キミが正しいと思つたことは部下も分かってくれる、隊長も分かってくれるはずさ。少なくとも十番隊にそんな分からず屋はいないと儂は思つている」

「……………」

「キミならこの十番隊をもつとよく、明るくしてくれる、儂はそう信じているよ」

高須副隊長はあたしの肩に手を乗つけると、引き継ぎを全て終わらせ出ていつてしまつた。

そして高須副隊長と入れ替わるように十番隊隊長志波しほ一心いっしんが入つてきた。

「お前が新しい副隊長か!!俺は志波一心だ!!これからよろしくな!!」

「ガハハ」と笑いながらあたしの背中をバンバンと叩き隊長が言った。背中がジンジンと痛くなる。きつと赤い手形がついているであろう背中のことを思うと思わず顔が歪む。勿論隊長は気づいていない。

鈍感ね。ギンなら気づいてくれるのに――。

そもそもギンはそんなことしないかと少し笑いながら思うとふとなんでギンが出てきたのだろうかという疑問に感じた。

「高須さんがキミは頑張りやだと聞いたからな!どんな男かと想像したら…まさか女だったとは!!」

さっきの疑問なんかを吹き飛ばすぐらいの声で隊長は言った。あたし、男だと思われてたの…。

「普通、乱菊って言う名前前で分かりませんか?」

「男かもしれないだろ!!」

「あたしには隊長の言ってる意味が理解できないわ」

あたしの言葉を聞いてまた隊長は大きな口を開け、笑う。

「その調子ならこれからもやっていけそうだな!!」

隊長の言葉にあたしはついクスリと笑ってしまふ。

「…これから、よろしくお願いします、隊長」

「ああ！松本！よろしくな!!」



「え？なんやて？もう一回言ってくれへん？」

ギンは珍しく笑みを崩し驚いた表情でボクに「もう一回」と言ってきた。ボクは苦笑いでもう一度言っただげ。

「乱菊がね、十番隊の副隊長になったんだって」

「元十番隊副隊長に推薦されたらしいよ」と言えばギンは「…いつの間に乱菊、死神になっとなんや…」と呟いた。

「乱菊あれでもボクらと同期だよ？」

「…なんやそれ。初耳なんやけど」

「まあクラスも違っただし、ボク達は飛び級しまくったからね。会うこともなかったし」

因みにボクが乱菊が死神になったと知ったのは数年前。平子隊長にパシりにされ十番隊へ足を運んだときだった。まさか瀟_{しやう}霊_{れい}廷_{てい}にいる筈のないと思っていた女性…乱菊と鉢合わせしたのだ。勿論ボクは乱菊が死神になってたことを知らなかったので驚く。乱菊はそんな驚いているボクを無視して言ったのだ。

「あんた達あたしを置いてホントなにしてんのよ!!」

そんな乱菊のきつい言葉と共にボクは頬をおもいつきりビンタされた。

頬は腫れるし隊長には笑われた(十番隊、五番隊両方の隊長に)。悪いのは乱菊じゃなくボクとギンだと分かっていたので隊長達に笑われてつもりもつた怒り全ては平子隊長に行った。とりあえずは平子隊長の頬をつねりボクと同じ顔にしてやるので気をおさめた。因みにこの後、平子隊長に凄く怒られたが後悔はしていない。笑う方がいけないんだバカヤロウ。

そもそもギンは乱菊が死神になったことを知っていると思ってた。だから何気なく普通に「乱菊副隊長になつたらしいよ」と言えば驚きの顔と「もう一回言え」。予想外にも程がある。

「今の話からすると…乱菊とは瀨霊廷で一度もあつてないわけだよね?」

「そうやな」

「つてことは、ギンもあつたらビンタされるんじゃない?」

「だってギンは乱菊を拾った…いわば保護者みたいなところにいるわけだし、その乱菊

を置いていった訳じゃん？往復ビンタは覚悟しといた方がいいんじゃない？」と言えばギンは笑って「乱菊ならやりそうやね」と言った。

「ええ。あたしはギンに往復ビンタの1つや2つやってやるわよ」

「……」

突如後ろから聞きなれた…いや、昔よりも声が少し高くなっている声が聞こえた。ギン肩が強ばるのが見える。そして…ギンは瞬時に相手に自分の心情を悟らせない笑みを張り付けた。

「…なんや、松本副隊長おったんか」

「ええ、いたわ。といつてもついさつき来たばかりだから往復ビンタの話しか聞いてないけど」

乱菊が来たのは本当についてさつきらしい。乱菊の声からも表情からも怒っているのがわかる。ボクは口出しするつもりはないけれど、ギンはどんな風に乱菊に対応するのか。だいたいには想像がつく。

どうせ冷たく接するんだ。わざと自分から突き放すように。それは本当にボクの考えた通りとなった。

「あんたは…あんた達はいつも、いつも…!! なにも言わずどこかへ行っちゃおう! 待つてるあたしの身にもなりなさいよ!!」

乱菊は大きく手を振りかぶりギンの頬を叩こうとした。けれどそれはかなわなかった。なぜならギンがあたる直前に乱菊の腕をパシりと掴んだから。

「それで? そんなこと言いにはわざわざここまで来たん? ……案外副隊長も暇なんやね」

いつもの笑みを張り付けたままギンは乱菊に言った。乱菊は泣かなかった。でもとてつもなく儂い、壊れそうな顔で言った。

「もう…あたしはギンをビンタすることさえできないのね」

「邪魔したわ」乱菊はそう言うところかへと去ってしまった。乱菊の霊圧が感じられな

くなるとギンは「はあああ」と長いため息をつき地面にしゃがみこむ。

「…なにやってんやろ、ボク」

「乱菊悲しませてしもうた。見捨てられるかもしれない」そう頭を抱えながら言うギンに「自分がやった行動なんだから責任持ちなよ」とボクは言う。

「…せやけど……。はあああ」

「本当にギンってバカだよね」

「…それでも碧の『相棒』なんやろ？ボクは」

「うん。たとえギンが好きな女子の前では仮面を被った内心気弱な少年だとしても、

どっかの少女マンガでありそうな性格だとしてもボクの『相棒』にはかわりないよ」

「……ボク碧の『相棒』やめたい。言葉が痛いわ」

ギンの言葉にクスツとボクは笑うとギンに手をさしのべた。

「乱菊の奪われたものを取り返すまでは『仮面』をかぶり続けるんだろ？こんなところで

へこたれるなよ」

ギンはボクの手をつかむとボクは力をいれギンを立ち上がらせる。

「せやな。乱菊の奪われたもん取り返して全部終わったら乱菊に謝ろう。それまでの……辛抱や」

「そうそうそのいきだよ。たとえボク達よりも乱菊が上の立場にいたとしても、ボク達三人の中で乱菊が一番出世してたとしてもこの調子で頑張ろう」

「……なあ、なんなん？ さつきから。ほんまにボク励ます気あるか？ さつきから要らんことばっか言うとるやん。五月蠅いねん」

珍しくギンに蹴られた。尻痛い。

——少年達は厚い厚い仮面を被った

——上司も部下も全ての人を欺く仮面を

——カオもカラダもココロも、全てに仮面を被せ

——少年達は少女の為に全てを殺した

——そして明日。少年達は自分達のことを気にかけてくれていた『上司』を裏切るこ
ととなる

——それでもなお、少年達は仮面をかぶり続ける

——
全ては少女の為に

上司が消えるトキ①

「…本当にいいの……？」

ボク達は「あの人」を裏切る準備をしていた。

「ボクはやる。碧、やりたくないんやろ？ならせんでええよ。ボク一人でやる」
「それはダメ」

「何がダメなん？」とボクに聞いてくるギンにボクは「ギン、そんなに一人で抱え込まなくていい」と言った。

「…抱え込んでなんかあらへんよ」

「うん。抱え込んで。断言する」

「そんな…断言いらんわ……」

苦笑いで言うギンにボクは言った。

「ボクはあの人よりもギンの方が大切だから。ギンを見捨てて一人でいくことはないし、見捨てもしない」

ボクとギンはいつか離れ離れになるだろう。でもギンが乱菊とくつついてくれたらまたボクは……この世界の本当のボクとギンは会えるから。

この世界に来て早数百年。まだ本当の世界に帰るメドは経ってないし、どうやって帰れるのかもわからない。だから決めたのだ。自分が帰れるその日までボクはボクを大切に育ててくれた……この世界のギンではないけれど、ギンを助けると。

乱菊の奪われた物を取り返して、ギンは乱菊とまた平和な暮らしをする。そんな世界にするためにボクはギンに力を貸す。これが今ボクにできる最大の親孝行だと思っから。

——帰れるその日までボクは



カランと下駄の歩く音、そして次にザツと草履の歩く音がする。

「お」

藍染を連れて歩いていた平子は下駄の音で振り向き後ろを歩いていた三人組に話しかけた。

「お——す。おはようさん」

「あ、おはよツス平子サン」

平子達の後ろを歩いていた一人、浦原喜助が返事をする。

「シンジでええ言うてるやろ。めんどいやっちな」

平子の言葉に浦原は「ハハハ」と笑う。平子は浦原の後ろを歩いて一人、くろつち 涅マユリに話しかけた。

「おはようさんマユリ」

「余所余所しく涅と呼べとっているだろう。不愉快な男だネ……」

「めんどいやっちなア」

平子はせっかく挨拶してやったのに、と言うような顔で涅に文句を言うと平子は話題を変えようとした。そうしたのである。

「そーいや聞いたかオマエあの話」

「どの話ツスか？」

平子の腰に渾身の蹴りが入る。音もズゴオといい音がした。平子を蹴った人物に平子は怒鳴る

「何やねんひよ里いきなり！」

「ウチへの挨拶がまだやつ!!」

「なんでオマエにアイサツせなあかんねん!!」

「あかんにきまつとるやる流れ的に！一人だけアイサツせえへんて」

「ええんですー！俺は隊長オマエは副隊長！隊長のすることにイチイチ口出さんといへん…あ痛たたたたアつ!!」

ドタンバタンと目の前で乱闘が起きているにも関わらず浦原も藍染もいつも通り平然とした顔で立っている。

「そうだ浦原隊長。もう耳にされましたか？」

「何をツスカ？」

「流魂街での変死事件についてです」

藍染が浦原に告げると平子はひよ里との乱闘を止め「それや俺が言いたかつたんは！ナイスフォロー惣右介!!」と言った。

「変死事件？」

どうやら浦原は聞いていなかったようで平子達に説明を求めた。平子は浦原に説明する。

「せや。ここ一月程、流魂街の住人が消える事件が続発しとる。原因は不明や」
「消える？どこかへいなくなつちやうつてことツスカ？」

浦原に疑問を平子は「アホか」と言つて一蹴する。

「それやつたら蒸発て言うわ。ちやうねん。消えるねん。服だけ残して跡形もなく。死んで靈子化するんやつたら着とつた服も消える。死んだんやない、生きたまま人の形を保てんようになつて消滅した。そうとしか考えられへん」
「生きたまま人の形を保てなく…？」

浦原にはまだまだ疑問が残るようだが平子にはそれが答えられなかった。

「スマンなア。俺も卯ノ花隊長に言われたことそのまま言うてるだけや。意味わからへん。ともかくその原因を調べる為に今、九番隊が調査に出とる」



「不明つてなに〜〜〜ね——拳西〜〜〜」

けんせい

緑色の髪色にゴーグルを着けた女性九番隊副隊長久南白は自分の隊の隊長六車拳西むぐるまけんせいに聞いた。

「うるせえぞ！不明なもんは不明なんだよ！ゴチャゴチャ言うな！」

「なにそれー！原因不明なモンの為に隊長出る必要ないじゃんかあ！」

「だからソレを調べに行くんだろが!!」

「先遣隊のコたち出たじゃん! 10人も! あのコたちの連絡待てばいいのに拳西のせつかち! 出たがり!」

さすがに白の言うことに苛ついたのか無言で殴りにいこうとする拳西。慌てて隊士達が拳西を止める。

「そもそも俺がいつてめえについて来いなんて言ったよ!? てめえなんかついてこなくてもいいんだよ! 帰ってクソして寝てるポケ!」

「ぶくくくく! 白は副隊長だから隊長についていかなきゃダメなんです! 知らないのバカじゃないの拳西。ばくくくくくくくか」

「……………!!」

「隊長!!」

「またしても白を殴ろうとした拳西を隊士達が止める。すると白は「おはぎが食べた」だの「お腹すいた」だのとダダをこね始めた。

「どうします？ 隊長…」

「ほっとけ!!」

即答だった。

「うわああああ!!」

「!!」

人の叫び声がある。走って叫び声の方向に行くと虚が現れた。拳西達は自分の斬魄刀を構えると虚に向かい、斬魄刀をフリ翳した。

「吹っ飛ばせ 『断地風』」

拳西が斬魄刀の解号、そして始解の名を呼ぶ。すると拳西の目の前にいた虚は爆発した。拳西は『檜佐木修兵』と言う名の男の子を助け逃がそうとする。すると戦闘中にどこかへと行っていた白を見つける。

「白……てめえ戦闘中どこ行ってやがっ……」

「そのの茂みの中にねえ！こんなの落ちてたよ！」

「ほい！死覇装！」白はそう言つて拳西に落ちていた死覇装を見せた。

「ここにねいっばい脱いであんの！10着も！」

死覇装が10着。それは九番隊の先遣隊の人数と同じであり、先遣隊の可能性が高いだろう。魂魄消失で初の死神の犠牲者。拳西はてきばきと部下に指示を出していく。「瀨靈廷に近づく前にここで殺す」と宣言した拳西は修平に「日が落ちないうちに帰れ」と言った。

修平は69と書かれた拳西の腹を見ていた――。



「フム…良いネ…良い感じだヨ…！」

マユリは試験管の中に入った液体をぐるぐると掻き回しながら言った。

「オイ！二十二番の容器はまだかネ！」

マユリは机をバンバンと叩きながら言う。ひよ里は小柄な為、大きい容器を持つてく
るには少し時間がかかる。だがそんなことも考えずマユリはひよ里に文句を言う。

あまりにもマユリがうるさかった為ひよ里は容器をおもいつきり地面に叩き落と
した。

「ヒトが親切で手伝ったつとつたら何やねんその口のきき方は！ふざけんなやハゲ虫コ
ラア!!」

「…何を急に怒っているのかネ？君のそう言う処…正直引くヨ」

「やかましい言うてるやろ!!」

ひよ里はマユリを指差して怒鳴る。

「そもそもなんでウチがオマエの手伝いせなあかねん!!ウチ副隊長やぞ!オマエ何席や言うてみい!!」

「笑止。この私に席次なんて必要ないのだヨ」

真顔で言うマユリにひよ里が「ウチが言うたるわ!」と言った。

「参席や参席!!わかるか!?!ウチは副隊長オマエは参席!!オマエがウチに命令したらあかねやっ!!」

「君こそ解っているのかネ?この技術開発局に於ては私が副局長君は研究室長。私の方が上だ」

ひよ里は瞳孔をカッ開いて浦原の名前を呼ぶ。浦原は目を擦りながら何かを肩にかけ出てきた。ひよ里もそれに気がつきその説明を求めた。

「何やねんそれ?」

「あコレツスか？新しい義骸の試作品ツス。今朝平子サンが言ってたじゃないツスか。流魂街の事件は人の形を保てなくなつて魂魄が消えるんじゃないかって。仮にそれが本当だとすれば分解しかけた魂魄をもう一度人型の器に入れば魂魄は消えずに済むんじゃないかと思つて。その器を義骸技術を転用して作ろうとしてるトコツス」

「オマエ…」

ダダダダツと誰かが走つてひよ里たちのところへ向かつてきている音がする。九番隊隊士であり拳西の伝言…研究員の要請を浦原は聞いた。

浦原はひよ里を指名。ひよ里は文句を言っていたがうまく浦原が丸め込み結果ひよ里がいくこととなった。



うざい白の寝言を聞きながらテントの中で休んでいた拳西。外から呻き声が聞こえたので慌てて外に出ると自分の隊士が仲間を殺しているところを目撃した。しかし、そ

の男も何者かによつて殺される。

——敵はまだ近くにいる。

結果は周りを警戒した。白を起こそうとするが白は起きず仲間が一人、また一人と殺られていく。

——異様な霊圧。そして刺された自分の…腹。

「……て……めえ………」



『緊急招集！緊急招集！各隊長は即時一番隊舎に集合願います！！九番隊に異常事態！九番隊長、六車拳西及び副隊長久南白の霊圧反応消失！それにより緊急の——』

寝ていた頭が一瞬にして覚醒した浦原。ひよ里はどこに行ったのか、そう研究員に聞

くと「先程出発した」と。浦原は慌ててひよ里を追う。

ボクが行くべきだった……—

こんなことになるなんて……—



「火急である！前線の九番隊待機陣営からの報告によれば夜営中の同隊隊長・六車拳西、同副隊長・久南白の霊圧が消失。原因は不明！これは想定し得る限りの最悪の事態の一つである！昨日まで起きた単なる事件のは一つであったこの案件は護庭十三隊の誇りにかけて解決すべきものとなった！よってこれより隊長格5名を選抜しただちに現地へと向かってもらおう！」

総隊長が全て言い終わると同時に浦原が到着した。浦原は自分に行かせて欲しいと

頼むが却下され選ばれた5名は――。

――三番隊隊長、おわとりぼしろうじゆうろう鳳橋楼十郎

――五番隊隊長、平子真子

――七番隊隊長、あいかわらフ愛川羅武

――鬼道衆総帥大鬼道長、つかびしてっさい握菱鉄裁

――鬼道衆副局長、うしようだはちげん有昭田鉢玄

話し合いの末、鬼道衆のトップ2を出すのはさすがにと言うことで握菱鉄裁の代わりに矢胴丸リサがいくこととなった。



ひよ里は逃げていた。ボロボロな体で逃げていた。刀は決して抜かない、いや――抜けない。

やられるかと思った。しかし平子が間一髪助けに入ったお陰で死にはしなかった。

「……真子……！」

「アホか。なんで刀抜かへんねん」

ひよ里はうつむいて言う。

「…アホか。抜けるわけないやろ」

ひよ里を襲っていた人物、それは――

「…拳西……!?!」

虚の仮面をつけた九番隊長、六車拳西だった。

平子の後を追って他のみんなも来る。しかし真実を目の当たりにし、走る足を止めた。信じられなかった。仮面も霊圧も全て虚なのに…姿は拳西のまま。何がなんだかわからなかった。

勿論先に到着した平子にも分からなければ、ひよ里にもわからない。

「俺にもよう分からへんわ。ほんまに拳西なんか違うんか……。とにかく確かなんは刀抜かんと……死ぬゆうことや」

拳西が吠えた。一瞬のうちにラブの後ろへと回り込むとラブをぶつ飛ばした。ラブも咄嗟に受け身をとったのか大丈夫だった。

刀を構えた皆を見てひよ里が叫ぶ。「拳西なんやぞ！」と。しかし皆は言った。「俺らが止めなあかんねん」と。「殺さなくても助ける方法は沢山ある」と。

リサと鳳橋が拳西に向かう。すると鳳橋のすぐ後ろに——。鳳橋がわけもわからず吹っ飛ばされる。

白のような奴。白は平子をターゲットにし、凄いスピードで向かっていった。平子は受け身をとるがそれでもダメージは受けてしまう。なんとか鉢玄のおかげで助かったが。

鉢玄が白を『五柱鉄貫』で身動きをできないようにしたあと、拳西を『鎖条鎖縛』で拳西の動きも封じる。

しかしそれも単なる時間稼ぎに過ぎなかった——。

拳西ホロウにリサがやられた。鳳橋がやられそうになっているところを鉢玄が九十番台の詠唱破棄でなんとか捕まえる。

「…さアてと…：…どないしたモンやろなア…。鬼道でどうにかならへんか？」

鉢玄に無茶振りをかける平子だが原因が分からなければ治せるものも治せないと言われてしまう。

「げほっ、ごほっ」

平子が抱えていたひよ里が突如咳き込む。

「何やねんひよ里。大丈夫か？ハッチいとりあえずコイツから治したつてく…」

「…シン…」

ひよ里が苦しそうな声で平子の名を呼ぶ。

「シン…ジ…はな…放…せ」

ひよ里の顔が白い仮面で覆われる。そして平子の肩から足にかけて斜めにおもいきり斬った。倒れる平子、ひよ里が平子を斬ったことへの仲間達の動揺。そしてひよ里の遠吠え。

「グオオオオオオオオ」

「ひよ里！」

「ちイツ！どうなってんだよっ!!」

突然、皆の体に異変が起きた。気づいた時には遅く皆は東仙とうせん要かなめに斬られてしまう。

「なんでや…お前…拳西を…自分とこの隊長を…裏切ったんか?!」

「裏切つてなどいませんよ」

平子からしては聞き慣れた声が聞こえる。この場にはいないはずの“声”が。

「彼は忠実だ。ただ忠実に僕の命令に従ったに過ぎない。どうか彼を責めないでやってくれませんか——平子隊長」

平子は敵の名を、敵の親玉の名を呼ぶ。

「……藍………染……!!」

自分の部下。藍染惣右介の後ろには何気に平子が気にかけていた人物——市丸ギンと市丸碧がいた。

上司が消えるトキ②

「やっぱし…お前やったんか…」

ジリジリと近づいて来る藍染に平子は言った。藍染は焦らず顔色一つ変えずに余裕の表情で言う。

「気づかれていましたか。流石ですね」

「当たり前、前やる…」

「いつから？」

藍染が平子に聞くと平子は怪我のせいだろうか。荒い息をしながら藍染に言う。

「オマエが母ちゃんの、子宮ン中、おる時からや…ッ」

「成程」

「俺はずっと、オマエを…危険やと…信用でけへん、男やと、思っとった…。せやから俺

は、オマエを五番隊の、副隊長に選んだ…。オマエを…監視する為や、藍染…！」

平子は藍染に告げる。藍染は余裕な表情を崩さない。いや、藍染は…笑っていた。

「…ええ。感謝しますよ、平子隊長。あなたが僕を深く疑ってくれたお陰であなたは気づかなかった」

「…気づいとった、言うてるやろ…」

平子の言葉に藍染は「いいえ」と否定する。

「気づかなかったでしょう？この一月、あなたの後ろを歩いていたのが僕ではなかったと言う事に」

「…な…!？」

平子は驚愕する。藍染から告げられた真実に。自分は本当になにも見えていなかったと言う事に。

「敵」にこの世界のあらゆる事象を僕の意のままに誤認させる。それが僕の斬魄刀『鏡花水月』の真の能力です。その力を指して——『完全催眠』と言う」

「…完全………催眠やと……!?!」

藍染の口は止まらない。まるでここであなたが知つても支障がない、と言うように。

「あなたは鋭い人だ平子隊長。あなたが普段他の隊長が副官に対するそれと同じように、ギンや碧のように僕を気にかけて接していたのなら。或いは見抜くことができたかも知れない。だがあなたはそうしなかった。あなたは僕を信用していなかった故に常に僕と一定以上の距離を保ち、心を開かず、情報を与えず、決して立ち入ろうとしなかった。だからあなたは気づかなかつたんです。僕が全くの別人に掘り替わつても。僕の身代わりをさせた男には僕の普段の行動とあなたや他の隊士、隊長に対する受け答えのパターンを全て完璧に記憶させました。もしあなたが僕のことを深く理解していたなら、僅かな癖や動きの違いに違和感を覚えたでしょう。あなたが今そこに倒れているのは、あなたが僕のことを何も知らないでいてくれたお陰なんですよ、平子隊長」

「……藍染……」

平子は藍染の名を呼び立ち上がる。

「…それからもう一つあなたは先程僕に『監視する為に副隊長に選んだ』と言いました
 がそれは間違いです。隊長の『副隊長任命権』と同様に隊士側には『着任拒否権』と言
 うものもあります。まあ実際にそれが行使されることは稀ですか、それでも僕には『副
 隊長にならない』と言う選択肢もあつた。何故そうしなかつたか。…理想的だつたか
 らです。あなたのその僕に対する過大な疑念と警戒心が、僕の計画にとつてまさに理想
 的だつたからです。解りますか？『あなたが僕を選んだ』んじゃない。『僕が
 あなたを選んだ』んです。平子隊長。あなたは仲間達に謝罪すべきかも知れませぬ。
 あなたが僕に選ばれたが為にあなたも、その仲間も、そこに横たわる羽目になつたんで
 すから」

「……………藍染……！」

平子の霊圧が急激に上がる。すると平子の目から、口から白い液体のようなものが出
 てきた。それを見て藍染は更に笑みを深める。

「…安い挑発に乗って頂いてありがとうございます」

「くそ……ッ！……俺もか……！」

平子の後ろでは仲間達も平子のように顔から液体が現れ苦しむ。白い液体はやがて虚ホロワのような仮面カクシが現れ後に——虚化と呼ばれる。

拳西、白を除くもので一番早く虚化した人物は猿柿ひよ里だった。ひよ里は虚のような雄叫びをあげる。そしてひよ里は平子の方を向くと言ったのだ。「…シ…シ…ン………ジ………？」と。ひよ里はまだ自我を失ってはいなかった。

「要」

「はこ」

藍染に命令された東仙要はひよ里を平子の目の前で斬った。そして藍染は平子に告げる。

「——終わりにしましょう平子隊長。あなたは完璧な上官だった。あなたは僕を警戒しすぎたが故に距離を取った。あなたはその目で見ることで僕の動きを抑制しようと考えた。…最後に覚えておくと良い」

藍染は斬魄刀に手をかけ、言った。

「目に見える裏切りなど知れている。本当に恐ろしいのは目に見えぬ裏切りですよ平子隊長。さようなら。あなた達は素晴らしい材料だった」

藍染は平子に斬魄刀を振りかざし――

振りかざせなかった。浦原に止められたからだ。藍染の副官章は浦原によって斬り飛ばされる。しかし藍染は顔色を変えることはなかった。

「これはまた…面白いお客様だ…。…何の御用ですか？浦原隊長」

「あかんやん見つかつてもた」

「どうするんですか？藍染副隊長」

「あかん」や「どうするんですか」などと言っているギンにも、碧にも焦りの表情はない。逆に…余裕の表情である。それほどまでに藍染達は浦原達に対して優勢なのだ。

浦原は全て知っていた。平子達が虚化をしていると。そして浦原は藍染の思ってい

た通りの男だった。

藍染達は虚化した人間を置いて、逃げた。



『目に見える裏切りなど知れている。本当に恐ろしいのは目に見えぬ裏切り』ほんまそうやなあ藍染」

浦原達から逃げると藍染はこれからのことを準備する為、瀨霊廷へと戻った。ギンとボクは別についていかなくてもいいと言われたので現在藍染とは別行動中である。

「はよ見たいなあ。藍染の吃驚する顔。ボクらが伝えていた斬魄刀の能力が本当は違……うと知ったときアイツどんな表情カオするんやろ」

「さあ、どんな表情カオだろうね。ボクには解らないや」

「せやね。ボクらはアイツと違う。解る筈がないんや。愚問だったわ」

流魂街を二人で歩きながらギンは言った。

「せやけど…あかんで碧。さつき、ひよ里はんと隊長が切られたとき一瞬^{ほんま}本当の解放し
そうになったやろ。ほんまに一瞬やつから、それも藍染は隊長達に気をとられとった。
だからバレてはないんやと思うんやけど…」

「つい。あの人達はボク達に色々なことを教えてくれてたから。情がわいちゃった」

——それにひよ里さんは本当の世界でもお世話になつていたから

——平子隊長はボクの名前をつけてくれた人だから

「…解つてるならええんや。次からこんなことないようしてな」

「うん」

その後の会話はなかった。

いつもはもう一人^{平子隊長}が真ん中において、ウザイぐらいのマシガントークを続けて来る人

がないからかもしれない。いつの間にか三人でいることが「当たり前」となつていたボクら。

——「当たり前」と言うものは恐い。

——だつてもしその「当たり前」が壊れたとき、

——自分達は何をすればいいのか解らないから。

—
馴れるのにはまだ時間がかかりそうだ



——『妖刀』

『妖刀』と呼ばれる刀は沢山ある。そして市丸碧の斬魄刀もその『妖刀』の一つだった。名前はない。『妖刀』と呼ばれるだけで刀自体に名前はなかった。

碧が初めて斬魄刀と対話をした日。それは忘れられない程濃く、忘れられない一日となった。

一回の対話で死ぬかと思った。本当の命の危険を感じた。それほどまでに碧の斬魄刀は危険なモノなのだ。しかし碧はこれからのことを考えて「卍解」を習得しなければならぬ。卍解には「具象化と屈服」が必要となり、それがまた碧を追い込ませる要因の一つである。

——あんな奴らを具象化…？ 屈服…？ できる訳がない

碧の正解への道のりはまだまだ遠そうである。

妖怪——アヤカシ——

「姐だっき己様！ご指名です！」

妖怪一つ目小僧は姐己と言う名の九尾の元へと駆け寄った。姐己は皇帝の座るような大きな椅子に座っている。黒い髪色に白い肌。紫色の浴衣には赤色の彼岸花の刺繍が入っている。姐己と言う人物はとても妖艶で美しくそして近寄り難い人であった。

「わつちを指名？ほお、あの小僧もやりおるのお」

「わつちから契約やくそくをするなど小僧の死に等しいと言うのに」と姐己はクツクツ笑いながら言った。

「それほど力が欲しいのか、はたまた只の自殺希望か……。まあ良いわ。どつちでもわつちには変わらん。ちつとばかし小僧の指名とやらに付き合つてやろうではないか」

「本気ですか、姐己様!？」

「ああ、本気じゃよ。わっちの力に耐えられなく死んで行つたのならそこまでの命。わっちらを使うには等しくなかつたと言うことじゃ」

「少なくともわっちはわっちよりも強い奴に使われたい」そう言つた姐己に一つ目小僧は反論を止めた。

「それに……今は『妖刀』の名はなくとも、わっちらが小僧を認めた時には名がつくであろう。どんな名がつくのか、楽しみで仕方ない」

「……姐己様はアイツのこと、どう思っているのですか？」

「……………わっちは小僧に同情するわ」

「同情?…」

「暇潰しのために家族と離ればなれにされ、最後には興味もない死神になり、家族が死する時を見せられる。小僧はわっち達とは違って悪いことなんぞ何一つやってはおらぬのにな。可哀想な奴よ」

姐己は空を見る。空には沢山の雲がかかっており月は見えなかつた。

「無理して大人になろうとすると子供はいつかは壊れる。子供の内は沢山甘えておればいいものを……。現実とは、神とは時に残酷じゃ」

姐己は椅子から立つと歩きだした。目的地は姐己の言う「小僧」の元である。



姐己は姿を変えた。先程の女性の姿から、銀髪の、——と瓜二つの少年の姿へと。

「小僧、わっちを指名したらしいの」

「お前が一番扱うのに難しいと聞いた」

「ほう、それでわっちを選んだ、と。∴小僧はわっちをなめているらしいの。そんなんで小僧——死ぬぞ」

姐己に「小僧」と呼ばれた少年は怯まなかった。それほどまでに少年は姐己の力を使

いたいのかもしれない。

「ボクは死なない。ボクは大切な人の大切なモノを取り返さないといけないんだ。そして、あの人達には平和に暮らして欲しい」

——小僧それほどまでに“仇”を討つ力が欲しいのか

「だから姐己力を貸して欲しい」

姐己は目を瞑った。数秒程考える。小僧は何も知らない。小僧が護ろうとしている人が死ぬと。小僧のいた世界とは違うのだ。その真意に小僧は気づいていない。

「小僧は護るための力が欲しいのだな？」

「ああ」

「……そうか。良いだろうわっちの力で良ければくれてやる」

——小僧がどう足掻こうが死ぬと決まっている者は死ぬ

——それは小僧が護ろうとしているやつも然り
——だからくれてやろう、わっちの力を
——貸してやろう、わっちの力を

——“仇”を討つ為の力を

「わっちを、上級妖怪アヤカシを呼びたい時は『——』と呼べ。解号は——じゃ」
「ありがとう、姐己」
「ああ」

——ああ、楽しみじゃ
——小僧が真実を見たとき、誰の力を使うのか

——小僧は「藍染」を殺せるほど^{原作}真実に影響を及ぼせるのか
——ああ、楽しみで仕方ない



「ギンと碧には三番隊の隊長と副隊長をやってもらいたい」

藍染はボクとギンを呼び出してそう言った。浦原や隊長達が尸魂界を追放されて百年。藍染は新しく五番隊の隊長になった。そしてギンは副隊長に、ボクは副隊長補佐となった。全ては藍染のもくろみ通りに進んでいる。

「どつちが隊長なんやろ」

「ギンでしょ」

「ボク？無理やてそんな堅苦しいとこ嫌いやもん。碧やってな」

「嫌だ」

「げえ、即答はあかんやろ」

「嫌だ」

「……話通じんわ」

結局どつちが隊長をやるかでじゃんけんをするとボクが勝つたので負けたギンが隊長をやることに。隣でぶつぶつとギンの小言が聞こえるが全て無視した。

「で、いつからなんです？ボクらが三番隊に移動するのは」

「今からだよ」

「すんません隊長。もう一度言ってくれますか？今聞こえちやあかん言葉聞こえて」

「今からだよ」

「…空耳じゃなかったわ」

と言うことは今から早急に引き継ぎをやらなきゃいけないらしい。と言っても引き

継ぎをやるのは副隊長のギンだけで後任のいないボクはやらなくていいらしい。

藍染は隊士に呼ばれていった。ボクは藍染が出ていった後、ギンに応援をした。

「頑張ってギン」

「少しは手伝ってな」

「嫌だ」

「…また即答…」

ギンは苦笑いだ。今回の嫌だにはちゃんと意味が込められている。

「だってボク、雛森桃のことそんなに好きじゃないからさ」

「……」

どうして雛森は藍染が全て正しいと思うのだろうか。ボクには信じがたい。東仙に続く藍染信者。ボクは嫌いだ。東仙も雛森も藍染も。

「そうか。確かに分かるわ。ボクもあの子のことは好きになれんなあ」

「うん」

「どうせいつかは藍染に捨てられる、それを分かってないあの子は可哀想や」
「うん」

「…憂鬱やなあ」

「頑張れ」

…応援したらギンに足蹴られた。痛い。



「三番隊に誰おるん？ やっぱ隊士ぐらいの名前は覚えておかなあかんやろ」
「えつとね…」

ボクは三番隊隊士名簿を見て名前を言っていく。

「…あれ…:…?」

「どうしたん?」

「副隊長補佐がいる」

副隊長補佐の欄に “吉良イツル” という名前が。

「ほな、その子に沢山仕事預けよか」

「だね」

基本サボり魔のボク達は仕事を全て吉良に預けることにした。

「それにしてもギンが隊長だなんて考えられないなあ」

「せやね。ボクもあんまし想像つかへんわ」

「…:…ボクはギンの味方だから」

「なんや急に」

ギンは笑った。ボクも笑った。なんとなく、言いたかったただけなんだ。ただそれだ

け。

「…ギンはボクの前から消えないよね？」

「……………」

「藍染倒してまた三人で暮らすんだもんね」

「そうや。藍染倒すまでは三人誰も欠けちやあかん」

「——ボクは消えへんよ。碧の前から。今も昔もこれからもずっと相棒や。相棒には嘘つかへん」

ギンは初めてボクに嘘をついた。

ボクがそれを知るのはまだまだまだ遠い未来の話。

親子

碧が消えて早3ヶ月。碧はまだ帰ってきていない。

「はよ帰って来てもらわな俺尸魂界に帰らなあかんのやけど」

平子隊長はまだ何故か現世に残りボクと一緒に碧を探してくれていた。「帰らないで大丈夫なんですか？」と聞けば五番隊副隊長雛森桃に「それなら一緒に探してあげてください！」と言われ帰るに帰れなくなったらしい。

「そうや、喜助ンとこ行つたんか？」

「喜助？それって浦原喜助？」

「ああ。同じ街すんごること知らんかったのか？」

「知つとつたけど頼る気にはならんかったなあ。あの人もボクのせいで尸魂界追放されたもんやし」

ボクがそう言うのと平子隊長は「ちやうで」とボクの言葉を否定した。

「あれは全て藍染のせいや。確かにギンも加担しとったけど俺らはオマエを恨んでなんかおらんで」

「…ボクには隊長達の考えてることが全然解らんですわ。仮にも加担しとったんや。ここで斬られてもボクは可笑しくない。なのにそんなこともせず碧を探すために力を貸してくれるなんて……アホちゃいますか」

「アホでも何でもええわ。家族がおるやつを斬ることなんで俺にはできん」

平子隊長はそう言うのと立ち上がり「ほな、行くで。早く立ち」と言った。



「えっ、市丸サン結婚してたツスカ!?それはおめでとうございます」

「いや喜助、今そんなんでもええねん。碧探しとるんやどうかできんか?」

「どうにかつて言われてもツスね…。アタシはその碧サンに会ったことがないんで探しようが…」

ボクは隊長に連れられて浦原商店と言う店に来ていた。隊長が浦原に事情を話すと先ずは結婚してた事に驚かれ次は子供が居たことに驚かれた。最後には碧に会ったことがないから探しようがないと。

「でもまあアタシも頑張ってみますよ。平子サンからの頼みツスからねえ」

「じゃあ市丸サン質問していくんで答えてください」と突然やる気になった浦原の言葉にボクは頷く。

「碧サンは霊力が高いツスカ？」

「うん高い。ボクよりも乱菊よりも高い」

「…そりやそうだ。元隊長と現副隊長の子供なんすから高くないほうが可笑的い」

浦原はウンウンどうでも頷きながらメモ帳に何かスラスラと文字を書いていく。

「じゃあその碧サンの霊圧はどっち似ッスか？」

「は？霊圧にどっち似とかあるん？」

平子の疑問の声に浦原は「あるに決まってるじゃないッスか」と言う。

「遺伝で顔や雰囲気、味覚等が似るように霊圧も親に似てくるんすよ。もう一度聞きます。碧サンの霊圧はどっち似ッスか」

「多分ボクやと思う。乱菊が言つとつた。霊圧から風貌まで全部ボクに似とるって」
「解りました。……もうしかしたら探せるかもしれないッスね」

「おお!!ほんまか喜助!!」

平子隊長が聞くと「はい、アタシがその装置を作れば、ツスけど」と言った。

「装置？」

「そうッス。ボクの昔の実験で色んな世界があることは解つてたツス。だからその世界……いやこの世界だけを抜いて市丸サンと似たような霊圧を探す。一つの世界に2つの

反応が起きたとき、その世界に碧サンがいる、つて魂胆スね」

「まずは霊圧探知機作らないと」と呟く浦原。

「碧サン見つけたら次はその世界に市丸サンを飛ばす装置を作るツス。とりあえず市丸サンは碧サンの顔を見れば安心でしょう?」

「そーやね」

「ならまずは霊圧探知機を造るところから始めないと」と言つて奥に消えようとした浦原だが寸前で止まる。

「3日ツス」

「はっ。」

「3日で仕上げてみせます。それまで待つて貰えますか?」

「当たり前やろ。こっちは頼んでる側や。文句は言えん。せやろ?ギン」

「そーやね。ボクは何でアンタが碧を探してくれるのを手伝つてくれとるかの方が謎に思えて仕方ない」

「アタシは、別に尸魂界を追放されようがそんなに変わんないんすよ。けれど平子サン

達は違う。尸魂界で隊長として瀟靈廷を尸魂界を護ることに誇りを持っていた。平子サンの方が辛かった筈だ。なのに今平子サンはあなたの味方として碧サンを探している。平子サンがあなたを許しているのにアタシが許さないなんてあり得ないでしょう?」

浦原はそう言うのと今度こそ奥へと消えていった。



3日経ったある日。浦原から連絡を受け平子隊長とボクは浦原商店に来ていた。

「碧サンがどこにいるのかも解つて設定もしてあります。後は市丸サンがこの中に入ってもらえれば」

目の前にあるのは人が一人入れるぐらいの小型機械。

「成功するかどうか解りません。それでもやりますか？」

「やるに決まっとるやろ」

ボクはそう言うのと機械の中へと入った。



「家族を持つと人は変わるものなんスね」

「ほんまそうやな」

暫く平子サンと会話をする。あるボタンを押しながらマイクに喋りかける。

『聞こえますか？市丸サン』

市丸サンに喋りかけると市丸サンは返事をしてくれた。

「ああ聞こえるで」

『ボクのカウントダウン後に市丸サンを飛ばします』

「解ったわ」

市丸サンが理解してくれたようなのでアタシはカウントダウンを始める。

『——3、——2、——1、』

市丸サンは白い光に包まれた。



機械は無事作動することができた。後は市丸サンの体が消えて碧サンのいる世界に市丸サンの霊圧が2つあれば…成功。しかし市丸サンの体は消えておらず碧サンの世界にも市丸サンの霊圧は2つなかった。失敗に終わってしまった。

横たわって倒れている市丸サンを揺らして起こす。しかし市丸サンは起きない。暫く放置しておけば起きるだろうと思ひアタシは平子サンに手を貸してもらって市丸サンを空いている部屋に寝かせた。



目を覚ますとボクは久しぶりの景色を見ていた。ここは——三番隊隊首室か。『三』と書かれた白い隊首羽織を来て椅子に背に凭れかかつとるボク。ここが碧のいる世界、か。早く碧を探して顔を見たい。

ボクは何故昔の自分の体に入っているのかとかそんなのは気にせず碧を探し始めた。碧はそもそも瀟靈廷にいるんか？流魂街とかにおらんやろな？そもそも、今の時代つてまだ藍染おるやん。藍染になんか変なことされとらんやろな碧。ああ駄目や心配で仕方がない。

三番隊隊舎の廊下を歩いていると反対側からボクに似た銀髪と男が来ていた。一目で解ったわ。碧や。あああんなに大きくなって。思わずボクは碧に抱きついた。

「えっ、えっ…!?ちよ、ギンどうしたの？変なもの食べた？熱にでも侵された？」

随分毒舌になってしもうて。でも……

「ああ、碧や。ボクの大切な碧^{むすこ}」

「…むすこつて、もうしかして…父ちゃん…？」

「久しぶりやな、碧」

ボクが碧の名前を呼ぶと碧は目に涙を浮かべて「父ちゃん!!」と抱きついてきた。

「会いたかったで碧」

「うん、ボクも、会いたかった…！」

「積もる話もあるんやけど…そろそろ時間やな」

「え、時間…？」

「また来るわ碧。顔だけでも見れて良かった」

ボクは碧の話なんかまともに聞かず目を瞑る。

そして次、目を開けたときは平子隊長のドアップの顔が見えて思わずひっぱたいた。



イツルが五月蠅くて渋々ボクと碧は仕事に取り掛かった。ボクは隊首室で書類に判子を押す作業をしている。…こんな作業ならイツルでもできるやん。イツルにまわそ。

ボクは椅子の背に凭れかかり目を瞑る。

いつもやらんことやったから疲れたわ。休憩や休憩。ボクは意識を飛ばした。

目を開けると木の板で作られた天井が見える。何故か布団に入つとるボク。…可笑しいやろ。ここは隊首室でもなければ尸魂界でもない。ここ、どこや。

「やっと起きたか、ギン」

「…アンタは……!!」

「なんや俺の顔見てそんな幽霊でも見るような顔しおつて。なんか俺の顔についとるか？」

「なんで、なんでアンタが。なんかアンタが隊首羽織着とるねん!!アンタは虚化で…」
ボクがそう言うのと目の前にいた人物——平子真子は驚きの表情になった。

「失敗だと思ってたんすけどねえ。以外にも成功でしたか」

襖を開けて出てきたのは浦原喜助。こいつは藍染の手によつて平子達と追放されたはず……!

「浦原喜助!!」

「どうもこんにちわッス、市丸サン。あなたに質問なんですが碧サンって知ってます？」
碧のことを聞いてくる浦原にボクは警戒体制に入る。何が狙いや、こいつら。

「…オマエ、碧を狙つとるんか…」

「違いますよ。次の質問です。あなたには碧サンと血縁関係がありますか？」

浦原の問いにほうがではなく平子が答えようとする。

「は？そんなもん」

勿論平子の言葉を全ては言わせない。

「ないに決まつとるやろ」

「!!」

平子の表情が「あり得ない」と言っている。何故そんな顔をするのかボクには全く解

らなかつた。

「ボクは碧とは血は繋がつたらん。前に言うたやろ?」

ボクの言葉を聞いて浦原は「やはり…」と声を漏らす。そして顔をあげたかと思うと浦原は言った。

「改めましてこんにちわ。碧サンが翔んだ世界の市丸サン。ボクの名前は浦原喜助ツス。どうやらアタシの作った装置のせいでこの世界の市丸サンと碧サンがいる世界の市丸サンの魂が入れ替わったようぞ」

「ほんまか?」

そう言つて平子はボクの顔にズームしてくる。そこでボクの意識は途切れた。

碧が翔んだつてなんや? 浦原はまるで碧がボクのいる世界の住民やないみたいな言い方。それに平子のあの驚きよう。まさか…ホントは碧とボク血が繋がつてみたいなこと…ないよな?



「?倒れたでこいつ」

平子サンが市丸サンの顔に更に自分の顔を近づけ頬をつねったりしている…。平子サンはおもいつきり市丸サンからビンタを食らっていた。

「いった!!何すんねんオマエ!!顔腫れたらどうしてくれるんや!」

晴れ晴れとしている表情の市丸サン。アタシは市丸でに「お帰りなさい」と言った。

「なんや、オマエこっちの世界のギンかいな」

「どうでした?碧サンの様子は」

「三番隊の副隊長やとった。それに大きくなってカツコええ男になとった」

「話せたんスね。それは良かった」

「ああ。元気そうで良かった」

旅禍

「朽木ルキア処刑だつてよ」

「らしいなあ。六番隊隊長さんへこんでたりしてな」

「見に行つてみる?」

「せやね」

「性格悪いなあボくら」

朽木ルキアの処刑を言い渡された隊首会の後、ボクらは歩いてきた六番隊隊長に絡む。

「随分冷静やつたなあ六番隊隊長さん」

「それほど朽木ルキアに興味ないんでしょ?」

「ゴ立派ゴ立派!」

ボク達の声を聞き、朽木隊長は歩く足を止める。少しだけの殺気が肌にヒシヒシと伝

わる。相当朽木隊長はご立腹のようだ。

「自分の妹が死ぬつてのにあの冷静さ。サツスが六番隊長さん。死神の鑑！」

「バカ言えや。死神で死ぬだの何だのにビビつてんのはテメーらと九番隊長ぐれえのモンだ」

「え———そうかア？」

「ギンはそうかもしれないけれどボクは違うよ？ギンと乱菊が生きてればボクはそれでいいし」

「市丸達に依存してるおめえも変わらねえよ」

「そうかな？」

朽木隊長は振り返りボク達に話しかける。

「隊長格が三人も揃つて私に何のようだ？」

朽木隊長は鋭い眼差しでボクらに言った。殺気も数分前とは確実に変わっている。まるで首もとに刀を突き付けられているような感覚。

「いややなあ。妹さんが処刑されるってんで六番隊長さんがへこんでへんか心配しててやんか」

「ボクだったら耐えきれないなあ。だってギンが処刑されるようなモンでしょ？絶対殺すわ。ギンを処刑させようとするやつも、賛成したやつも全員、死体を直視できないぐらいにぐちゃぐちゃに殺してやる」

「…兄等には関係の無い事だ」

「へこむ訳や無えよな。名門にや罪人の血は邪魔なんだからよ」

「…ほう。貴族の機微が平民に理解できるとは意外だな」

「それでもねえよ。俺あ昔っから気が利く方なんだ。どうだ？気が利くついでにさっきの罪人、処刑より先に俺が首を落としてやろうか!？」

朽木隊長と更木隊長の霊圧同士がぶつかり合う。なんだかんだ言っただけで朽木隊長ってすぐにキレルからなあ。困りもんだよ全く。

「ほう知らなかったな。兄程度の腕でも人の首は落とせるのか」

「試してやろうか？」

「試させて欲しいのか？」

乱闘が始まる十秒前。ギンとボクは更木隊長に白い布をグルグルと巻き付け動けなくし、朽木隊長から離れる。

「ボク、草鹿副隊長探してくる」

「うん、頼んだわ」

ボクは瞬歩で消え、近くにいますであろう草鹿副隊長を探す。正直言って草鹿副隊長がこの場においても変わりはいないだろうが、あの人を見つけたら大人しく帰るだろう十一番隊舎に。

「カンニンしてや六番隊長さん！」

「おいコラ市丸!!放せこらてめえ!!」

「少なくともボクと碧はあんたのコト怒らす気は無かってん！」

「あいつを斬らせろ!!斬らせろっ!!」

「碧も草鹿副隊長見つけたみたいやし、ほんなら妹さんによろしゅう」

市丸ギンは碧のもとへと更木を連れて向かった。



父ちゃんと久しぶりに会ったあの日からギンはボーっとすることが多くなった。今のところ何も支障は出ていないけれど、これからはそうとは限らない。

「だからギン、なにかあるならちゃんとボクに相談…」

「……………」

「ギン」

「……………」

「ギン！」

「……………」

「…人の話ぐらい聞けよ!!」

「うわっ!? なんやねん! 急に大声出さんで!? びっくりするやる!」

「何度も名前呼んだわ! ボーっとするな! いつか死ぬよ!」

「すまん、ちよっと考え事しとつてな」

ボクは「はあ」とため息をつく。

「これからは気を付けるから安心してな」

「当たり前。逆にしなかつたらボクが一回痛い目に合わせるところだよ」

「それ、本人の目の前で言うか? 普通」

ボク達は「いつもの日常」を送っていた。今現在だつて吉良から逃げて歩いている。最近には瀨霊廷内で逃げているとすぐにバレるので流魂街まで行って逃げているのだが…。

大きな霊圧。それをボクらはすぐに察知した。

「…白道門の方やね」

「どうする?」

「行こか。どうせボクら暇やし」

「だね。旅禍かな」

ボク達は白道門の方へと向かった。白道門につくと☒丹坊が旅禍に白道門を開けていた。話を少し聞くと☒丹坊は旅禍に負けたらしい。

「へえ。負けたんだ、☒丹坊」

「負けたらあかんやろ、門番」

「負けたのに門開けちやってるね」

「…始末せな、あかんね」

「だね」

話が纏まったボクらは一気に霊圧を解放する。ボク達の霊圧に気づいた☒丹坊は顔を真っ青にさせ、汗を流していた。

「誰だ？」

「さ…三番隊隊長…市丸ギン…そして、市丸…碧…!?!」

「あアこらあかん」

☒丹坊の首横を光の速さで何かが通る。

「…あかんなあ…門番は門開けるためにいてんとちやうやろ」

「負けた門番の末路、解ってるよな？」

☒丹坊の片腕が民家の屋根まで吹っ飛ぶ。☒丹坊の腕からは血が吹き出す。それでもなお、☒丹坊は片腕で白道門を支え続ける。

「うっわ!!片腕でも門支えてるよ」

「サスガ尸魂界の豪傑。けどやっぱり門番としたら失格や」

ニコニコといつもの表情でボクらは言う。☒丹坊は汗をダラダラと流しながら言った。

「…オラは負けたんだ…負けだ門番が門を開けるのは…あたり前のことだべ!!」

「——何を言ってるの？わかってないねえ」

「負けた門番は門なんか開けへんよ。門番が『負ける』ゆうのは『死ぬ』ゆう意味やぞ」

ギンの霊圧がドンと上がる。ギン、完全に遊んでるな……。ボクは思わず「はあ」とため息をついてしまう。旅禍はギンを斬るつける。しかし、ギンは防ぎ怪我はなしだ。当たり前か。

「☒丹坊と俺たちの間でもう勝負はついてたんだよ！それを後からちよつかい出しやがってこのキツネ野郎×2！」

「……………」

旅禍は後ろにいた女に話しかける。

「…井上、☒丹坊の腕の治療たのむ」

「あ…はっ、はい！」

旅禍は斬魄刀を構えるとギンに言った。

「来いよ。そんなにやりたきや俺が相手してやる。武器も持ってねえ奴に平気で斬りかかるようなクソ野郎は…俺が斬る」

「ふっ、面白い子だねギン。ボク達に喧嘩売ってきちゃったよ。旅禍の分際で「せやね。おもしろい子や。ボクらが怖ないんか？」」

ギンが旅禍に問うときさも当然と言うように「全然」と言った。

「もうよせ、一護!!」

——一護…?」

——萱草色の髪に…身の丈ほどもある大刀…

——そうか…

「キミが黒崎一護か」

「!知ってんのか俺のこと?」

ボク達は後ろへ後ろへと歩く。黒崎一護との間合いを伸ばしているのだ。

「この反応彼が黒崎一護で確定じゃん」

「あっ!?!おい!何処に行くんだよ!?!」

「ほんなら尚更……ここを通すわけにはいかんなあ」

ギンは斬魄刀を構える。

「何する気だよそんな離れて?その脇差でも投げるのか?」

「脇差?ギンの斬魄刀が?……笑わせないでよ」

「脇差やない。これがボクの斬魄刀なんや」

ギンは右足を後ろに引き右手で持っていた斬魄刀を前に出す。左手を前に自分を抱き締めるようにすると解号を呟いた。

「射殺せ『神鎗』」

ギンの斬魄刀『神鎗』の刃が伸びる。黒崎一護は咄嗟に自分の斬魄刀で受け身を取るが神鎗によって匣丹坊と共に門の外へと出されてしまった。

「バイバ——イ♡」

門が落ちてきて黒崎一護は見えなくなった。

殺意と怒り

『隊長各位に通達！隊長各位に通達！只今より緊急隊首会を召集!!繰り返す——』

「あ——あ。呼ばれてもうた。早いで嗅ぎ付けんの」

「藍染がそう仕向けてるんだから当たり前でしょ？嫌だなあ怒られるの」

「ボクだって怒られるの嫌や」

そんな話をしながらボクらは一番隊隊舎へと向かう。門の前につくと声が聞こえた。どうやら隊長各は全員集合しているらしい。

「…来たか」

「さあ！今回の行動についての弁明を貰おうか！三番隊隊長——市丸ギン!!!」

「そして三番隊副隊長——市丸碧!!!」

ボク達は歩いて中へと入り真ん中に立つ。ちなみに緊張はしていない。

「何ですの？イキナリ呼び出されたか思うたらこないな大袈裟な…。尸魂界を取り仕切る隊長さん方がボクらなんかの為にそろいもそろってまア……でもないか」

「十三番隊長さんが見えないですね？どうしたんですか？」

「彼は病欠だよ」

「あ——聞いたことあるわ。お大事につて言ってもらえませんか？」

ボクが東仙隊長に言うのと横から「フザケてんなよ」と声が聞こえた。勿論発した人物は更木隊長である。

「そんな話にここに呼ばれたと思ってるのか？てめえら、二人で勝手に旅禍と遊んできたそうじゃねえか。しかも殺し損ねたつてのはどういう訳だ？てめえら程の奴が旅禍の4、5人殺せねえ訳ねえだろう」

「あら？死んでへんかってんねやアレ」

「ギンはともかくボク、過大な評価受けてるなあ」

ボクは呟く。勿論ボクの声はこの場にいるであろう隊長全員に聞こえていると思う。

「てつきり死んだ思うててんけどなア。ボクらの勘もニブったかもしれん」
「だねえ。少しサボり気味だったし」

ボクがギンの言葉を肯定するとある人物の笑い声が部屋に木霊した。

「猿芝居はやめたまえヨ。我々隊長クラスが相手の魄動が消えたかどうか察知できないわけないだろ。それともそれができないほど君達は油断してたとも言うのかネ!」

「いややなあ。まるでボクらがわざと逃がしたみたいな言い方やんか」

「そんなにボクらをしながら悪者にしたいの? 涅隊長」

「そう言っているんだヨ」

「うるせえぞ涅! 今は俺がコイツらと話してんだ! すっこんでろ! 俺に斬られてえなら話は別だがな!」

「…下らぬ」

「やれやれ」

ボくら達の間にも不安な空気が流れたその時だった。

「ペいっー！」

言い合いを止めたのは総隊長であり、驚いたみんなは総隊長に注目する。

「やめんかみつともない！更木も涅も下がらつしやい！…じゃがまあ今のでおぬしらがここに呼ばれた理由は概ね伝わったかの。今回のおぬしらの命令なしの独断行動。そして標的を取り逃すというのは隊長、副隊長としてあるまじき失態！それについておぬしらからの説明を貰おうと思つての！その為の隊首会じゃ。どうじゃい。なんぞ弁明でもあるかの、市丸や」

総隊長がボクらを睨む。ボクらは顔を見合わせると笑みを作り言った。

「ありません！」

「…なんじゃと？」

「弁明なんてありませんよ。ボクらの凡ミス。言い訳のしようもないですわ」

「だからどんな罰でも受ける覚悟——」

「…ちよつと待て、市丸、市丸副隊長」

「どんな罰でも受ける覚悟です」とすべてを言い切る前に藍染がボクらに話しかけてきた。それと同時に警鐘が鳴り響く。なんでも瀨靈廷に侵入者が出たそうさ。

更木が走り出す。きつと彼の頭にはもう旅禍のことしか入っていないだろう。藍染の静止の声も勿論聞かない。無視である。

それを見た総隊長は隊首会を一先ずお開きにする決断を下した。皆が部屋を出ていく。藍染も出ようとしたがボクらの横を通り過ぎる時、眩いた。

「随分と都合よく警鐘がなるものだな」

「…ようわかりませんな。言わはってる意味が」

「…それで通ると思ってるのか？ 僕をあまり甘く見ない事だ」

日番谷隊長はその光景を見ていた。



僕達は歩いていった。現在は旅禍も侵入しているためなんとも雰囲気ギスギスとしている。

「いやあああああああ」

雛森の叫び声が響く。ボクらはそれを聞いても急ぎはしない。

「藍染隊長、藍染隊長つ、いやだ……いやです、藍染隊長！」

吊るされた藍染を見て雛森は叫ぶ。

「何や。朝っぱらから騒々しいことやなア」

「お陰で目エ覚めたからいいんじゃない？」

雛森がボクらの顔を見てまた目に涙を溜める。そして——目の色を変えた。

「お前か!!!」

雛森が斬魄刀を手につけ、ギンに突進していく。それを見たイヅルが動こうとするが、ボクがイヅルに静止の言葉をかけ、ボクが動き出す。

「っっ!!!」

「ボクの隊長に手をだそうとしているキミはボクに殺されても文句は言えないはずだよ
ね?」

「どけ!!!」

「……話を通じないようだ。やはりキミは好きになれない」

「弾け!! 『飛梅』!!!」

「———」

雛森の始解の言葉に被せるようにボクは小さく自分の斬魄刀の始解の名を呼ぶ。お陰で『飛梅』を食らってもボクは無傷。

「クロス」

一気に霊圧をあげ、斬魄刀の能力を使おうとしたその時——ギンがボクに声をかけた。

「やめえ、碧」

「…ギン」

「そないなことで本気出したらあかんよ。瀟霊廷が壊れてまう」

「……………」

「イツル、雛森副隊長捕らえてな。せやないと碧が殺してまうから」

「は、はいっ!!」

イツルが雛森を捕らえる。数秒後に騒ぎに駆けつけた日番谷隊長がボクらの前に現れた。どうやら遠くからでもこの光景を見ていたらしくボクらに近寄ってくると日番谷隊長は言った。

「…市丸。てめえ今…雛森を殺そうとしたな?」

「はて、どちらの市丸かわかりませんな」

「…雛森に血イ流させたら俺がてめえを殺すぜ」

「あら、ボクの質問には答えてくれないんか。それにしても怖いなあ。悪い奴が近づかんように見張つとかなあきませんな」

大切な女好きを護ろうとしている騎士。日番谷隊長が一瞬ギンと被つて見えた。



藍染は全ては日番谷水獅郎に擦り付け、雛森に刀を抜かせた。日番谷隊長は身に覚えのない罪を藍染に被せられ驚愕している。雛森は泣きながら日番谷隊長に刃を向けたら。

日番谷隊長はなんとか雛森を説得しようとするが、それは叶わなかった。遺言として雛森に渡された藍染の手紙。それは全て藍染の字で書いてあり自分が見間違う筈がないと。

日番谷隊長は試行錯誤する。そして見つけたのだ。

——笑っているボクとギンを

「…そうか…これもか…これも全部てめえの仕業か!!!市丸!!!」

日番谷隊長は霊圧を上げてボクらに向かってくる。するとボクらと日番谷隊長の間に雛森が間に入る。

「…雛森…ッ!」

空中で避けられなかった日番谷隊長は雛森を思わず殴ってしまう。

「…あら。酷いなア十番隊長さん。傷ついて我を忘れた女の子をあない思いきり殴らんでもええのに」

日番谷隊長は唇を噛み締め、何かを思い出すように言った。

「…てめえの目的は何だ」

『…はあ……相変わらずやなア…』

『だね。最後の警鐘くらいゆつくり聴いたらいいのにね』

『そうやで。じきに聴かれへんようになるんやから』

「藍染だけじゃ足りねえか…。雛森まで…こんな目に遭わせやがって…血が滲むほど刀を握り締めなきやなくなるまでこいつを追いつめやがって…雛森に血イ流させたらてめえらを殺す!!!」

「…あア…あかんア。十番隊長さん。こないなところで斬魄刀抜かれたら…ボクが止めるしかないやないの」

ボクら、と言わなかったと言うことは遠回しにボクに下がっている、と言う意味だ。大人しくボクは後ろに下がる。珍しくギンもうやる気になつてることだし。

「霜天そうてんに坐せ!! 『氷輪丸』!!」

溢れた霊圧が創り出す水と氷の竜。そして天候さえも支配する。これが日番谷隊長の持つ氷雪系最強の斬魄刀――。

日番谷隊長は凄早い早さで突進していく。勿論ボクに向かってくるおこぼれの攻撃は全て避けきった。

ギンと日番谷隊長の攻防は続く。そして遂に日番谷隊長がギンの片腕を凍らせて封じ、勝利したかと——勝利に確信したその瞬間。

「終わりだ市丸」

「射殺せ『神鎗』」

ギンは日番谷隊長を狙ったのではない。日番谷隊長が避けると予想したギンは日番谷隊長の後ろで横たわって寝ている雛森を狙って始解をしたのだ。

「……ええの？避けて。死ぬであの子」

「……雛——……」

しかし雛森に『神鎗』が当たろうとしたその時、乱菊が間に入り斬魄刀で攻撃を相殺した。

「松本……!!」

「……申し訳ありません。命令通り隊舎へ帰ろうとしたのですが……氷輪丸の霊圧を感じて

戻って来てしまいました…。刀をお退き下さい市丸隊長。退かなければ——ここからはあたしがお相手いたします…。！」

ギンの凍っていた片腕が段々と溶けていく。ギンは——笑っていた。ギンは刀を退く。日番谷隊長はボクらを追おうとしたがギンはそれを止める。

「ボクを追うより五番副隊長さんをお大事に」

「行くで」とボクに声をかけギンは瞬歩で消えてしまう。ボクは一瞬悲しそうな顔をしている乱菊を見て——ギンを追った。



日番谷隊長達の霊圧が感じられない程遠い場所でギンは頭を抱えていた。

「あ——!!何してんねんボク!!ら、乱菊に斬魄刀向けてしまった!切腹!今すぐ切腹するから後始末頼んでもええか、碧!!」

「いや、なんで!?なんで切腹!?!ちよ、やめて!ここで死なれてもボク困るって本当にマジで!!」

「でも、でもでもでも!!ボク乱菊傷つけてまったんやぞ!?死んで詫びるしかないやろ!!」
「詫びれてないよ!だからやめて!死んだら元も子もないから!!」

この後無駄にしぶといギンを説得するのに一時間かかった…。

沢山の違和感

碧を見つけて、一緒に暮らし始めてどれ程の時が過ぎただろうか。今までは碧が隣に
いることが当たり前やったけど、今はそれに違和感を感じ始めていた。

碧がボクん家の前で倒れているところを偶々発見して、看病をした。家に帰れないと
聞いたからボクは家に居ていいと言った。そして碧は居候をし始めた。

ボクは見たことがなかった。碧が家族を探しているところを。当たり前のように家
に居て当たり前のようにご飯を作っていた。ボクもそれになれていたら可笑しいと
は思っていなかった。

他にも碧は寝ぼけてボクのことを「父ちゃん」と何度か呼んだことがある。挙げ句の
果てにはボクのことを「父ちゃんと呼ぶせてくれ」なんて頼まれた時もあった。勿論
断ったが。

異様に似ている顔、体つき。それに碧はまるでボクの癖から何までを知り尽くしてい
るような感覚。今思えば全て違和感である。元々この違和感を感じ始めたのは死覇装
と隊首羽織を着た平子真子と緑色のしましま帽子を被った浦原喜助に出会ってからだ。

尸魂界を追放された平子真子が何故死覇装を来て、隊首羽織を着ているのか、色んな

疑問は浮かんだ。が、一番疑問に感じたのは浦原喜助が『碧の翔んだ世界の市丸さん』と言ったことだ。浦原のその言い方ではまるで碧はこの世界の住民やないみたいな言い方。これがずっと気になっていた。

「ギン」

「……」

頭を叩かれる。叩いたのは碧で碧は鬼の形相だ。後ろに般若が見える。

「旅禍も今は尸魂界内にいるんだから気抜いちやダメ。またポーっとしてたよ？」

「なア碧」

「…反省してないなコノヤロウ」

「碧の『家族』ってどんな奴なんや？」

碧の顔が驚愕へと変わる。そして驚愕の顔から少し懐かしそうにそして悲しそうな顔へと変わった。

「……急になんでそんなことを？」

「…ホントはずつと前から気になってたんや。そもそも碧は家の帰り方解らんくてボクん家住んでた訳やろ？でも家の帰り方探しとるようにも見えへん。逆に碧、ボクを手伝ってくれとるやん。それが謎で仕方がなかった」

「もうしかしてだけどそれが原因でここ最近ボーつとしてた訳じゃないよね？」

「……………」

急にボクが黙ると碧は「凶星かよ…」と呟く。碧は「はあ」とため息をついたかと思うと「ボクん家は少々特殊でね」と語り始めた。

「…教えて、くれるんか？」

「こんなことなら別に。隠す必要もないしね」

碧は懐かしむように目を細めた。



「父ちゃんはやんちゃ者でね、死神だったんだけど尸魂界追放されちゃって現世でボクと暮らしてた」

「…尸魂界追放つてどれだけのやんちゃやったんや……」

いやあんただけどね、なんて言葉は口に出さない。確かにボクの父親は『市丸ギン』だけどこの世界の『市丸ギン』ではないから。

「やんちゃのし過ぎで死にかけて父ちゃんを血だらけになってまでも母ちゃんが救護室に連れて行って父ちゃんを死なせなかった。そこで父ちゃんと母ちゃんは永遠の愛を誓った。もう二度と離れない、離さないって。二人は凄くラブラブだけど母ちゃんは死神を仕事としてるから父ちゃんに中々会えなくてそれでも二人は仲睦まじく、ボクが生まれました。ボクは父ちゃんっ子で母ちゃんよりも父ちゃんが好きで、父ちゃんの真似を沢山してた」

「……」

「家に籠ってばかりだったからボクは友達を探す旅に出掛けた。お陰で変なところに迷いこんで帰れなくなるしここ何百年も生きてるのに友達はギンと乱菊だけ。後はもうギンが知ってる通りだよ」

「妹とか居らへんのか?」

「いないね。ボクは一人っ子。こう見えても長男でね」

ボクはニコリと笑うと「無駄話はここまでにしようか」と言つて話を変えた。

——きつとギンは何かに勘づいてるんだろうな

ボクがギンの「息子」だとバレそうになつたら死神を辞めよう。ギンの元から去ろう。そしてボクはストーカー業にでも転職してギンを影から見守ろう。

ゲシリとギンから蹴られる。

「いった!?何すんの!?!」

「嫌な予感がしたから蹴つただけや。後悔はしとらんで」

「理不尽っ!!」

理不尽な暴力反対!!たとえボクの心をギンが読んだとしても!!



「ねえねえ創造主サマア。楽しいイ？こんなの見えて楽しいイ？」

「嗚呼、嬉しいよ。あまりにも藍染が愉快過ぎてね嬉しいさ」

「アタシはねえ暇なのオ。創造主サマと一緒に暇は好きじゃないンだア。∴人間脅かしてきてもいい？」

MマGジIシCシIヤAンNズS・RレEドDドは長い髪の毛をくるくると指先でまわしながら言った。「創造主サマ」と呼ばれた男性は「ダメだよ」と言う。

「ええくなんでエ」

「現世では市丸ギン達が気を張っているからね。現世に降りた瞬間キミは浦原喜助の実験材料となってしまうだろう」

「アタシそんなに弱くないモン。だアかアア大丈夫ウ!!」

「ダメなモノはダメ。……其処まで聞き分けの悪い子に育てた覚えは、無いけどなア」
「……………ゴメンナサイ」

「解ればいいんだ」

冷や汗をダラダラと流しているマジシャンズ・レッドの頭を「創造主サマ」は撫でる。

「…創造主サマって、藍染惣右介”好きだよねエ”

「好きじゃないさ。どちらかと言うと嫌いな部類だよ」

「えエ!? 似てるよオ? 二人とも」

「止してくれ。そんなことを言われると……………藍染惣右介を殺したくなる」

殺気と靈圧を一気に放出する「創造主サマ」を見てマジシャンズ・レッドは「創造主サマも殺る気満々じゃアン」と嬉しそうに呟いた。

「この世の人間の中でどうしても藍染は好きになれない。何故だろう」

「それはア二人が似てるからでしょオ? 似た者同士は磁石と一緒に引き合わないしい。仲のいい人だって大抵自分とは性格が全然違う奴じゃん」

「何度も言うが私は藍染とは似ていないよ」

「創造主サマ」は侵害だ、と言う風に頭を振った。

「認めちゃえばいいのにイ。そっちの方がラクだよオ？」

「なんで変なところで創造主サマって頑固なのオ？」と聞いてくるマジシャンズ・レッドの頭を「創造主サマ」は軽く叩いた。

「私は部屋に戻るよ」

「創造主サマ」が部屋に戻ろうと歩き出したときマジシャンズ・レッドはボソツと呟いた。

「創造主サマと藍染は血が繋がってるからなア。そこが許せないのかもねエ」

「創造主サマ」は何も聞いていないフリをした。

「創造主サマ」と藍染

昔々。何千年も前のこと。四大貴族とは、また違う貴族があった。名は「藍染」。後に没落し、過去から書類から尸魂界から抹消される貴族である。

藍染と言う貴族は四人家族。それ以外の血筋もなく、小さな貴族であった。家族構成は父と母、兄と弟。

父は死神をやっており、高貴でプライドの高い人だった。母は体が悪く、いつも寝ていた。自分が死の瀬戸際にいると言うのに家族のことばかり心配する優しい人である。兄は知的で死神の卵が通う真央霊術院でもトップを誇っていた。弟は人と簡単には馴染めない引つ込み思案ではあったものの、兄以上の天才で研究等をよく好む性格であった。

父、あいぜんたいすけ 藍染大介

母、あいぜんうさこ 藍染右左湖

兄、あいぜんそうすけ 藍染惣右介

弟、あいぜんゆうすけ 藍染悠右介

家族の仲はとても良好だと思っていた。そう、思っていたであつた。

家族が壊れ始めたのは母、右左湖の死から始まった。朝起きて、母の容態を確認しに行った時にはもう死んでいた。父は母を愛していた。だからこそ母の死に嘆いた。それでも兄弟の前では悲しさを感じられないほど気丈に振る舞った。そして――父は殺された。殺した人物は……兄だった。



兄、惣右介と入れ違うように真央霊術院に入学した僕……惣右介は現在気持ち高昂っていた。真央霊術院から『浅打』と言う斬魄刀を貰ったからだ。

斬魄刀は自分の片割れ。どんな能力を秘めているかは解らない。謎ばかりの斬魄刀。そんなモノを貰った僕は早く斬魄刀と対話をしてどんな能力なのか確かめたかった。何より父様と兄様に褒めて貰いたかった。

走って家に帰って、部屋を開いたら信じられない光景が広がっていた。血だらけの兄。真っ赤な父様。僕は狂ったと思った。兄は父を殺し、そしていつか尸魂界の王とな

ると言ったのだ。信じられなかった。あんなに優しい兄が、あんなに父と母を愛していた兄が父を殺したなんて。

「悠右介、いつ僕が父様と母様を好きだと言った？」

「一度も僕は言ったことはないよ」そう笑いながら言う兄を凄く軽蔑した。

「まあ、感謝はしているよ。僕が生まれなければこんな野望も持つことができなかつたしね」

ジリジリと歩いて近づいて来る兄を見て僕はついつい後退りしてしまう。

「父様の次は——君だよ、悠右介」

僕の背中にはひんやりとした感触が伝わった。壁だ。もう後ろは壁、目の前には兄。死ぬ覚悟をした。兄が僕のは首を絞め殺そうとしたその瞬間——。

「ひやははははっ!!」

兄の時が止まった。兄は僕の首を絞める寸前で止まり動かなくなった。そして僕の目の前には長い金髪を三つ編みにして高いツインテールにした20代ぐらいの女性が立っていた。

「時が止まったね!!面白いね!!」

「きやははははっ!!」と笑い駆け回る女性を僕は呆然と見る。僕の視線に気づいたしたは走るのをやめ僕を見た。

「自己紹介?自己紹介して欲しい!?!きやははははっ!!いいよ、やってあげる!!アタシはねえ『めいきようすい明鏡止水』って言うんだ!!こう見えてもねえ、キミの斬魄刀なのさ!!ひやははははっ!!」

——斬魄刀?こんな五月蠅いのが僕の…?

「ひやははははっ!!五月蠅いって失礼だねえ!!まあ、いいけど!!あ、因みにアタシの能力はね時を止めるんだ、キミの霊圧を使って!!だからキミの霊圧が底を尽きたらまた時間は動き出す!!早く殺しちやいなよ!!じゃないとアンタが殺されることになるよ!!?きやははははっ!!」

「いや、殺さない。僕は逃げるよ」

「なんで?殺した方がラクだよ?簡単だよ?」

「…こんな奴殺す価値もない」

「ひやははははっ!!キミは怒っているんだね!!だから殺さないのか!!キミは変わってる!!うん、解った!!アンタの指示にアタシは従うよ!!」

『明鏡止水』はそう言う僕を持ち上げた。

「ちよっ、!?何しているんだ、キミは!?」

「ひやははははっ!!アンタよりもアタシの方が足早いから!!こっちの方がラクだろ!?きやはははははっ!!」

もう兄の霊圧が感じられないほど遠く、遠い場所まで『明鏡止水』は走った。それに

わざわざ空き家まで探してくる、なんとも好い斬魄刀である。

「これからどうするんだい!? きやははははっ!!」

「とりあえず、『藍染』と言う貴族は無かったことにするよ。丁度人の記憶を消せる試作品を作っていたところだ」

「試作品なんかでホントにいいの!? きやははははっ!!」

「僕の理論には間違いはないよ。きつと大丈夫だ」

「凄い自信だねひやははははっ!!」

結果、記憶は消せた。記憶も書類も全て尸魂界に『藍染』と言う記録は残っていない。記憶を消したのは僕だが書類から『藍染』を消したのは兄だ。

もう僕も『藍染』には興味がなかった。研究に没頭し忘れようとした。だが、忘れることは出来なかった。

兄が憎かった。



マジシャンズ・レッドがあんなことを眩くから、遂に夢まで出てきてしまった。別に黒歴史とか言うまでの過去ではないが、思い出したいくない記憶ではある。あんな奴と似ていると言われると無性に腹が立つのだ。まあ兄弟なので似ていて当然だとは思うが。

部屋を出て顔を洗う。

「お早うございます、創造主さま」

「お早うPINKY」

途中廊下で会ったピンキーに挨拶をし、マジシャンズ・レッドを起こすため、マジシャンズ・レッドの部屋に向かった。

マジシャンズ・レッドを起こすのに約一時間奮闘したことをここに書き記しておく。

朽木ルキア

「なア碧」

「ん？」

「朽木ルキアっちゆう子に会いに行ってみよか」

突然ギンがそんなことをいい始めた。ボクはそれに驚くこともなく「いいよ」と了承する。

「おおきに」

「礼を言われる程でもないと思うけどね」

ボクは苦笑いをする。朽木ルキアのいる懺罪宮へと向かった。

大きな霊圧どうしが先ほどまでぶつかっていた。戦闘をしていたのだろう。2つの霊圧のぶつかり合いがなくなり、1つの霊圧が消える。

「やっぱ、勝てんかったか六番隊隊長さんには」

「でも卍解かあ。この土壇場でよく覚えられるなあ。ホント尊敬するわ」

ボクはケラケラと笑いながら言った。

「全然尊敬しとるように見えんよ、その顔」

「えー、ホント?」

懺罪宮に着くと朽木ルキアは言葉を呟いていた。

「…恋……次……?」

今しがた消えた霊圧が阿散井のものだと気づいたルキアは叫ぶ。「何故お前の霊圧が消えるのだ!!」と。叫ぶルキアにボクとギンは段々と近づいていく。

ボク達の霊圧に気づいたルキアは目を見開きこちらを見た。

「おはよ。ご機嫌いかが?ルキアちゃん」

「いいお目覚めはできてるかな?」

「——市丸、ギン。……——市丸、碧」

ボク達のことを呼び捨てにするルキアにギンは「あかんア」と咎める。

「相変わらず口悪いんやねえキミは。ギン、碧やのうて 市丸 隊長、市丸 副隊長。いつまでもそれやったらしかられるでお兄様に」

ルキアはボクらの霊圧にあてられたのか沢山の汗をかきながら「……失礼しました……市丸……隊長……副隊長……」と謝った。

「あ、もうしかして本気にしちやった? 別にいいよ、ボクらはそんなの気にしないから。ボクらとキミの仲でしょ? ……ねえギン」

「そうやで」とボクの言葉を肯定するギン。ルキアは恐る恐る「何故ここに来たのか」とボクらに問うた。ギンとボクは厭らしい笑みを浮かべながら言った。

「ちよつと嫌がらせしに」



——この男が、いや、この男“達”が嫌いだった。

私が護廷十三隊に入隊する前に兄様は六番隊の隊長になった。それと時期を近くして三番隊の隊長、副隊長になったこの男達は私が時折兄様と歩いていると決まって兄様に声をかけてきた。

傍から見れば隊長各同士の世間話に見えただろう。実際話の内容など有つて無いようなものだった。だが私にはとてもそうは思えなかった。初めてこの男達を見た時、全身から刺すような汗が吹き出したのを憶えている。

——指先も

——口も

——僅かな眼の動きさえも

——全てが蛇の舌嘗めずりに見えて話しているのは兄様なのに常に私の喉元に手をかけられているように思えて瞼一つさえ動かせなかった。

——この男達が嫌いだった

日常の小さな亀裂を毒気で溶かされ、知らぬ間に病のようにぬるりと奥底へと入り込まれる。そういう恐怖をこの男達に感じていた。

理由など無い。最初から私の中の何かがこの男の総てを悉く拒絶していたのだ。それはそれから幾度言葉を交わしても微塵も薄れることはなく、そして今も——

「どないしたん？」

「急にポーっとしちやってさ」

何一つ変わってはいない——

「…いえ…」

市丸ギンは空を見上げると言った。

「ああそうや。死んでへんみたいやねえ…阿散井クン」

「…な…まさか…！」

私は必死になって恋次の霊圧を捜す。すると集中して捜せば弱々しいが恋次の霊圧が感じられた。しかし…このままでは……。

「死んじやうだろぅね直ぐ」

市丸碧の発言に私は目を細めて睨む。

「可哀想やなア阿散井クン…」

「ルキアちゃん助けようとしたばっかりにこんなことになって…」

れ、恋、…次が私を助けようとした…!?

「莫迦な……！適当なことを言うな！！何故、恋次が私を……」

「怖い？」

「……何……だと……？」

市丸ギンの言葉に私は何故か核心をつかれた気がした。

「死なせたないやろ。阿散井クンも他の皆も。死なせたない人おると急に死ぬん怖るやろ？」

「……………!!!」

市丸ギンの言うとおりであった。今、私は……死ぬのが怖い……。

「助けたるか？」

「……な……!?!」

市丸ギンの言葉に回りは啞然する。そして直ぐ市丸碧を除いて騒ぎ始めた。

「ルキアちゃんも阿散井クンも旅禍のみーんなも」

何を言っているのだこの男達は…!? 正気か!? 私を助けてこの男に何の得がある!? 一護や恋次を助けて何の得があるのだ!?! いや、それとも本当に――

市丸ギンと市丸碧は私の頭を掴むと耳元で囁いた。

「嘘」

「バイバイルキアちゃん」

「次は双極で会お」

手を振って去っていく二人の姿を私は暫く見届けた。希望は捨てた筈だった。生きる理由も失った筈だった。未練などない。死ぬことなど恐ろしくはないと。

――揺るがされた

希望に似たものをほんのわずかちらつかされただけでこんなにも容易く、生きたいと、思わされてしまった。覚悟を――。

「ああああああああああああああああああああ」



「ボク達性格悪いね」

「やね」

満面な笑みでボク達は歩いていった。心なしか少しスッキリしたような気がする。

「ルキアちゃん壊れちゃったかな？」

「さア。どうやろね」

「でもボクはこれぐらいじゃ壊れんと思うで？」とギンは言った。

「…やっぱり？」

「ここで壊れたら全てがおしまいや。何も意味を成さん」

「うん」

「どうせ黒崎一護が助けに来る。絶望と言う名の闇におつたときの希望と言う名の光は凄く眩しく…救われるんや。心身共にな」

ギンは少し羨ましそうに言った。

「はよこんなの止めて乱菊と共に……」

ギンは苛つく程青い空を見て眩いた。ボクも空を見て「そうだね」と小さい声で返した。

悲痛な叫び、そして願い

「碧、乱菊頼むわ」

「……ごめん。ボク、乱菊とは付き合えな……」

「なんでそうなるんや!？」

「え? 違うの?」

突然ギンからの乱菊頼む宣言。流石にボクも将来自分の母親となる乱菊とは付き合えないので断つたのだが……。どうやら違つたらしい。まあ、当たり前か。

「碧が囿になって十番隊長さんと乱菊を離れさせるんや。いけるやろ?」
「もちのろん」

ボクが頷くとギンは「おおきに」と言った。

「それじゃ作戦開始としよか」



中央四十六室。尸魂界全土から集められた四十人の賢者と六人の裁判官で構成される尸魂界の最高司法機関。尸魂界、現世を問わず死神の犯した罪咎は全てここで裁かれ、その裁定の執行に武力が必要と判断されれば隠密機動、鬼道衆、護廷十三隊等の各実行部隊に指令が下される。

そして、一度下った裁定には例え隊長各といえど異を唱えることは許されない。それが四十六室だ。その四十六室が今、俺の目の前で全滅————している———。…
試しに血を触ってみる。が、それも黒く変色してひび割れるぐらいに血は乾いており、四十六室はかなり前に全滅させられたことがわかる。

いつだ?! いつ殺された?! 阿散井がやられて戦時特令が発令されて以降はこの中央地下議事堂は完全隔離状態に入り、誰一人としてここへ近付くことさえ許されなかった。

そして今日、俺達が強行突破するまでここへ至る十三層の防壁は全て閉ざされたまま
で何者も侵入した形跡はなかった。

殺されたのはそれよりも前！そしてそれ以降に俺達に伝えられた四十六室の決定は
全て――

「贖物か……！」

やったのは誰だ？市丸か？だが誰にも気づかれず四十六室を皆殺しにし、それを今ま
で隠し通す……それほどのことを奴ら二人で？他にも協力者がいるのか――

「やっぱりここにいたんだ、十番隊長さん」

遠い入り口で俺に話しかけて来たのは……――

「……市丸碧……やはりお前らが……！」

市丸碧は俺と目を合わせるとその場から立ち去った。

「!! 追うぞ松本!!」

「はい!」



「待て市丸! てめえらが四十六室を殺ったんだろ!!」

「さあ、それはどうだろ」

「質問に答えやがれ!!」

ボクに怒鳴ってくる日番谷隊長に優しいボクは教えてあげる。

「いいの? 十番隊長さんボクなんかを追って」

「どういう意味だそれは!!」

「キミは雛森桃の騎士ナイトなんだろう？ だったらちゃんと守ってあげなきゃ」

ボクの言葉に日番谷隊長は驚いた顔をする。

「何言つてやがる…!? 雛森は今…」

「十番隊隊舎にはいないよ。十番隊長さんは雛森桃の為に高等結界『鏡門きやうもん』を張ってきたみたいけど…あれって案外内側からじゃ普通に破れるんだ。知らなかったでしょ？ 雛森桃は鬼道の達人と言われる程の腕前だし結界を破るなんてわからないよ。自分の周りに結界を張って霊圧を消すことなんて更に簡単だろうね。…気づかなかったの？ 十番隊長さん達の後ろついて来てたことにさ」

日番谷隊長は唇を噛み締めると「松本!!」と乱菊の名前を呼んだ。

「任せていいか!」

「どうぞ!」

日番谷隊長はボクを追うのをやめ、雛森桃を追いに反対方向へと走り出す。ボクは逃

げる足を止めた。

「…何？逃げるのやめたの？」

「……………こうやってちゃんと話すのって久しぶりじゃない？乱菊」

ボクがそう言うのと乱菊は一度目を閉じた。そして乱菊は目を開くと「スウ」と息を吸う。一体乱菊は何をし始めるつもりなんだらうか。

「……………アンタ…アンタとギンは一体何をしようとしてるの？いつも二人で悪巧みしてるような顔しちやって…姿を消す…！」

ボクは乱菊の問いにいつもの仮面のような笑みを張り付けて言った。

「ボクの役目はね、乱菊をここで足止めすることだよ」

「足止め…？あたしを？」

意味がわからない、そんな顔をしている乱菊の言葉にボクは肯定の意味として頷い

た。

「そう。乱菊は関わる必要はないんだ。死神なんか止めてひっそりと暮らして。そしてらキミの目の前に、乱菊の目の前にいつか…騎士^{ナイト}が現れるからさ」

ボクが乱菊にそう告げると乱菊から怪訝な目で見られた。

「騎士^{ナイト}? そんな人、あたしにはいないわよ」

「いるよ。好きな女性^{ヒト}の目の前ではカッコつけたがりやで自分の行動にいつつも後悔してる騎士^{ナイト}がさ。乱菊にここで死なれたら騎士^{カレ}は生きる意味をなくしてしまう。だから乱菊、死神やめてひっそりと暮らして…?」

ボクが乱菊に言うのと乱菊は「そんなことできるわけないじゃない!!」と大声で言った。

「あたしはいつとも独りぼっち! 碧みたいにギンに近い人間じゃなければ、あたしは碧のこと全然知らない!! 何も知らない無知な哀れな女よ! カッコいい、好きな背中を追いかけても最後には見えなくなつて、視界にすら入らなくなる…!!…あたしは、あたしは

…!!また三人で前みたいな暮らしが出来ればいいと思つて、アンタ達を止めに来たの!!
こんな危ない仕事なんか、早くやめて欲しかったのに!!そんなあたしの気も知らないで
アンタ達はまたあたしを独りぼつちにする!!騎士ナイト?そんなのあたしが知るわけない
じゃない!!」

乱菊は「ハアハア」どういう肩で息をした後、言葉が続ける。

「あたしは諦めない…!!ギンに壁を作られたあの日から!!あたしの意思は固まったの!!
アンタ達を連れ戻して、またあの日常に戻るつて!!」

「だから、こんなことはやめて碧!!」それは乱菊の悲痛な叫びだった。

「乱菊…」

「アンタならギンを止められるでしょ!?ギンにも言つてよ、もう止めて、つて……」

乱菊の頬が濡れた。雨は降っていない。憎い程の晴天である。空を見ても雲一つ無
かった。

それを見てなお、ボクは首を横に振った。否定の意である。

「なんで…!？」

「ギンにはやりたいことが有るんだ。それが成し遂げられるその日までボクらはやめられない、とめられない。だから…乱菊の願いは聞けない」

「…っ…!？」

「…ごめんね」

ボクは乱菊に一言謝るとギンのいる場所へと向かった。



いつつもそう。あたしの言葉なんかろくに聞かないでいなくなる。碧のいなくなつた地面を見てあたしは唇を噛み締めた。

また、またあの二人を止められなかった――。

あの二人があたしの言葉を聞かないのは日常茶飯事。だから期待はしていなかった。していいなかったけれど…。

「…少しぐらいいは迷って、くれると、思ったんどけどなあ……」

目から涙が溢れ出す。泣きたい訳じゃない。けれど止まらない。止める術を今のあたしは知らなかった。

独りぼっちは辛い。寂しくて、怖くて、胸がはち切れそうで。

一体あたしはいつまで、独りぼっちでいればいいの…？

もう、あの頃のような、三人で楽しく笑いあっている日常は戻って来ないような気がした。

「ごめんな、乱菊」

ギンの謝罪の言葉はあたしの耳には届かない――。

生きていた

「ここは…清浄塔居林せいじょうとうきりん…四十六室の為の居住区域…どうしてあたしをこんなところに…? 市丸隊長」

現在ボクと雛森ちゃんは清浄塔居林と呼ばれる場所へと足を運んでいた。ボクが雛森ちゃんに「ここに来たことは?」と聞くと雛森ちゃんは「来たことも、見ることも初めてです」と答えた。

「…逢わせたい人おんねん」

「…逢わせたい…あたしに…ですか?」

雛森ちゃんの問いにボクは「そうや」と答えた。

「ほれ、後ろ見てみ」

「うし…ろ…?」

雛森ちゃんの後ろにある扉には死んだとされていた藍染が立っていた。雛森ちゃんは本当の藍染か、と確かめそして藍染に抱きついて泣いた。

…全く趣味の悪いやつちゃ——。

雛森ちゃんは藍染の計画の捨て駒に過ぎない哀れで可哀想な子。だがボクは決して助けようとはしない。

乱菊が静かに安全に暮らせるなら犠牲だって何だって捧げる——。

「君を部下に持てて本当に良かった…。ありがとう雛森くん…。本当に、ありがとう…」
藍染は雛森ちゃんを抱き締めると冷たい目で見下ろし言った。

「ヤ、ようなら」

雛森ちゃんの腹を刺す。雛森ちゃんはあり得ない、と言うような顔で藍染を見上げた。

「嘘」

雛森ちゃんの腹を刺した斬魄刀を藍染は抜くと同時に雛森ちゃんは倒れた。藍染は斬魄刀に着いた血を振り払い言った。

「…行くぞ、ギン」

「…はい。藍染隊長」

いつか、いつかお前も地面にひれ伏す時が来るんやね、藍染。その日が楽しみやわ。



藍染が阿散井に朽木ルキアを渡せと言っている時にようやくボクはギンと合流できた。

「ただいま、ギン」

「お帰り。遅かったなア」

「そう？急いで来たつもりだったんだけど」

「これでも結構本気を出して走ったのだ。大体七割ぐらい。少しぐらい勘弁してほしい。」

「…断る」

阿散井は藍染の言葉を受け入れなかった。ギンとボクは斬魄刀を構えようとするがそれを藍染は止める。藍染は『鏡花水月』を構え言った。

「こちらも君の気持ちも汲もう。朽木ルキアは抱えたままで良い。腕ごと置いて退がりたまえ」

藍染は阿散井に攻撃を仕掛けるが、全て、とは言えないが藍染のほとんどの攻撃を交

わすことに成功していた。成長とは恐ろしいものである。

阿散井の攻撃を素手で受け止める藍染は化け物だ。

「最後だ。朽木ルキアを置いて退がりたまえ」

「…放さねえぞ…誰が、放すかよ…バカ野郎が…！」

藍染の最後の忠告に阿散井は笑いながら断った。

「そうか。残念だ」

藍染は『鏡花水月』を構え阿散井の首に振り落とそうとした。が、それは旅禍、黒崎一護によって止められてしまう。

「よオ。どうしたよしゃがみこんで。ずいぶんルキア重そうじゃねえか。手伝いに来てやったぜ、恋次！」

藍染は黒崎一護を見て少し笑う。剃ればボクもギンも一緒だった。その後、少しの間

先ほどの真剣な雰囲気が無かったかのように阿散井、黒崎、朽木は喧嘩ケンパをし始める。

「すいませーん、藍染隊長」

「手エ出したらあかんおもつてあの子が横通るん無視しました」

「ああ、いいよ。払う埃が一つでも二つでも目に見える程の違いはない」

藍染の言葉を聞いて三人は喧嘩ケンパをするのをやめて藍染をロックオンした。どうやら阿散井と黒崎の共同戦線が始まるらしい。

「あの子ら藍染隊長の隙を狙ってるね」

「そやね。…そないなことしても無駄やのに…」

ギンの言うとおり全て無駄であった。阿散井は肩を斬られ黒崎は腰を斬られる。全ては一瞬のことである。

「立つんだ。朽木ルキア」

藍染は朽木の首についている首輪を触りながら言った。藍染は朽木の首についている首輪を斬られ無理やり持ち上げ立たせる。

「…ああ、そうか。僕の霊圧にあてられて体が弛緩しかんしてしまっているのか。なに、気にすることはないよ。自分の足で歩かせた方が程のが楽だと言うだけの話だから——」

鎖の擦れる音がする。音の主は黒崎一護でどうやら生きていたらしい。頑張つて立とうとしている。そのまま黒崎に藍染は真実を伝えた。「全ては浦原の仕業である」として崩玉ほうぎょくのこと全てを。

「藍染!!!」

上空から降ってきた狛村。狛村は藍染に攻撃を仕掛ける。

「…随分久し振りだね。その素顔を見るのは。どういう心境の変化かな…狛村くん」

狛村の攻撃を片手で受け止めた藍染。狛村は藍染に言った。

「何故…そうして笑っていられるのだ…藍染!!」

狛村の鉄拳が藍染を襲う。が、もちろん藍染には効いていない。

「我々、全員を謀^{たほ}つた貴公の裏切り…儂は決して赦しはせぬ!!」

「狛村は藍染の横に立っていた東仙に視線を移し「…貴公もだ東仙…!」と言った。

「何か弁明でもあるなら言ってみろ!」

「……………」

「…無いのか、何も…!残念だ…東仙…!」

狛村は霊圧を上げ叫んだ。

「卍解!!」

藍染は未だ東仙の横から動かない。

「破道の九十『黒棺』」
くろひつぎ

同じ隊長各同士で、手も足も出ない。そこまで藍染と護廷十三隊の力の差は激しいのだ。

「…『鏡花水月』の完全睡眠は完全無欠だ。例えかかるとわかかっていても逃れる術などありはしない」

そう言った藍染の元へとボクとギンは歩いて近づいていく。

「九十番台詠唱破棄!…怖いわア」

「ボクも練習したらできるようになるかな?」

「出来るんとちやう? 碧はボクよりも霊圧高いんやから」

ギンはボクにそう言うと言った。

「いつの間にそんなコトまでできるようになりはったんです？」

「いや、失敗だ。本来の破壊力の三分の一も出せていない。やはり九十番台は扱いが難しよ」

藍染はそう言うのと朽木ルキアを再び無理やり立たせる。

「…さて、済まない。君達との話の途中だったね。そう、朽木ルキア。君が現世で発見された時真つ先に僕が行ったこと。それが四十六室の抹殺だ」

藍染は笑つて言う。

「君達は恐らく勇音くんからこう聞いている筈だ。『藍染惣右介は死を装つて行方をくらませる後に四十六室を殺害した』と。だがそれは間違いだ。君が発見されてすぐに僕は四十六室を殺し、『中央地下議事堂全体』に『鏡花水月』をかけた。そうして『四十六室が生きて会議を続けている状態』に見えるようにしておけば万一何者かが入ってきてても異変に気づかれることは無い。尤も四十六室うちがわから許可しない限り隊長各に議

事堂に入る権限など無いんだがね。そうして僕達は常に四人の内一人を議事堂に置きそれ以降今に至るまで四十六室を演じ続け全ての命令を操作し続けた。捕縛を確実にする為に君の捕縛役を六番隊の二人に替え君を人間から遠ざける為に義骸の即時返却破棄を命じ君の魂魄を完全に蒸発させ内部から『崩玉』を取り出す為に双極を使つて君を処刑することを決めた」

朽木ルキアと黒崎一護の目が見開かれる。

「僕達が地下議事堂を完全に開けたのは二度の隊首会を含む前後数時間だけだ。死を装つて地下議事堂に潜伏したのはその直後。君達の働きで処刑が失敗する可能性が出てきたと判断したからだ」

藍染は懐から何かを取り出す。

「魂魄に直接埋め込まれた異物質を取り出す方法は二つしかない。双極のように超々高度の熱破壊能力で外殻である魂魄を蒸発させて取り出すか何らかの方法で魂魄組成に直接介入して強制的に分離させるか。万一双極での処刑が失敗した場合そのもう一つ

の方法を見つけないければならない。その為に必要だったのが尸魂界の全ての事象、情報が強制集積される地下議事堂の大霊書回廊だ。僕はそこで浦原喜助の過去の研究を一つずつ細かに調べ上げた。魂魄への異物質埋没は彼の編み出した技術だ」

カシツと何かを藍染はセツトしながら言う。

「ならば其を取り出す技術も彼の過去の研究の中に必ず隠れていると読んだ。…そう」

藍染を円形状に囲む白い柱。

「これがその」

「…待——」

「こたえ解だ」

藍染はルキアの心臓を貫いた。そして『崩玉』をルキアの中から取り出す。

「…ほう、魂魄自体は無傷か。素晴らしい技術力だ。…だが残念だな。君はもう用済み

だ」

藍染はルキアを持ち上げギンに命じた。

「殺せ、ギン」

ギンは斬魄刀に手をかけると「…しやあないなあ」と言う。

「射殺せ『神鎗』」

ギンの斬魄刀の刃が伸びる。ルキアの元へとギンの刃が行ったか、と思ったが――。
朽木白哉がルキアを庇い刺された。

「…兄……………様……！」

朽木白哉が両膝を地面につく。ルキアが白哉に「何故だ」と問いかけるが白哉は答え
ない。いや、答えられないのだろう。

藍染がルキアにジリジリと近づいていく。ルキアはすかさず白哉を抱き締め護ろうとした。藍染が斬魄刀を触ったとき……二人の隠密機動衆が藍染の首に刃を向けた。

「……これはまた、随分と懐かしい顔だな」

「動くな」

「指一本でも動かせば」

「即座に首を刎ねる」

瞬神夜一と二番隊長碎蜂が言った。藍染はそれを見て「……成程」と呟く。ドン、と大きな音が3つ。それは丹坊以外の門番がこの地に降りてきた音であった。

藍染は三人の門番までも手懐けており、更に優勢へと持ち込む。するとまたドン、と音がなった。その音の主は空鶴を肩にのせた丹坊が落ちてきた音であった。

「空鶴!!!」

「おう夜一! あんまりヒマだったからよ散歩がてら様子見に来たぜ!」

空鶴は夜一にそう言う。「さア行くぜ丹坊!」と丹坊に声をかける。

「散在する獣の骨！」

尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪

動けば風

止れば空

槍打つ音色が虚城に満ちる！

破道の六十三『雷吼炮』!!!」

空鶴が『雷吼炮』で門番の一人を吹っ飛ばす。しかし他の門番は眉毛一つ動かさなかつた。それを見て丹坊は覚悟を決め、また一人と門番を吹っ飛ばす。

砂やら小さな岩などがボク達に当たる。

「うわあ、派手だなあ」

「どないしよか？」

ボクとギンは飛んでくる小さな岩を手で払い除けていたら手首を捕まれる。

「動かないで」

ボクとギンの手首を掴んでいたのは乱菊でボク達は捕まってしまおう。

「すいませーん藍染隊長」

「捕まってしまったわ」

藍染はちらりとこちらを見る。乱菊を筆頭に他の隊長各がこの場に集まっていた。優勢から劣勢に、そう思われたが――。

藍染は笑った。

「…どうした何が可笑しい藍染」

「…ああ済まない時間だ」

藍染が立っている地面に正方形の光が灯る。その光は空まで行き届き…大虚メノスクランデが空を裂いて出てきた。それも数十体。

光は藍染だけではなく、東仙、ボク、ギンの足元にも光が灯る。ギンは残念そうな顔

をすると言った。

「…ちよつと残念やなあ…。もうちよつと捕まつとつても良^えかつたのに…。さいなら乱菊。ご免な」

ボク達の体が浮き上がる。藍染はかけていた黒淵の眼鏡を握り潰して髪をオールバックにかえた。そして言う。

「私が天に立つ」

藍染は二言ぐらい死神達に言葉を言う^と空へと呑み込まれた。それはボク達も一緒だった――。

何も無い

「それにしても虚ウエコムンド圏ドってなアんにも無い所やなア」

砂しかない大地を見てギンは言った。

「…退屈しそうだね」

「そやね」

乱菊にお別れを言ったあの日からギンの元気がない。それに気づいているのは多分…いや絶対にボクだけだろう。ギンはもう乱菊に会ったあの日ぐらいから自分の気持ちを隠す事を得意としていた。が、それでも縁が深いボクと乱菊は分かっている。

ギンはすぐ人に壁を作り笑みで気持ちを隠すからみんなからは不気味と言われ畏れられてきた。ギンのメンタルって意外に弱いからそんなので少し悩んだりする。そんな事を知っているボクだからギンの表情を読み取られる。

「……そんなに後悔するなら全部ボクに任せて残れば良かったのに」
「…昔碧言ったやろ？ボクだけに業は負わせんって。ボクも一緒や。それに…アイツには大きなモン貸しとるからなア。返して貰うまでは乱菊の元に戻れん」
「変な意地張っちゃって…。バカだなあ」

クスクスと笑うとギンは少しムツとした表情に変わる。いつぶりだろうか。あの仮面のような笑みが取れたのは。

「ボクは莫迦じゃあらへんよ。少なくともお前よりは頭ええわ」

「ハイハイそうですねー隊長殿ー」

「なんやその棒読み苛つく」

「それにボクもう隊長あらへん」そう言って先に歩きだしてしまふギン。ボクは慌ててギンの後を追う。



暫くの時が経ったとき。グリムジョー・ジャガージャックと言う十刃^{エスパーダ}が独断行動をして藍染信者の一人、東仙に片腕を切り落とされていた。挙げ句の果てには破道の五十四『はいえん廃炎』で切り落とされた腕を燃やされていた。

東仙に攻撃をしようとしたグリムジョーだが藍染に釘を刺され大人しく…若干荒れてはいたが戻っていった。

「あーあ。また部下で遊んでさア」

「意地が悪いなア…」

「——見ていたのかギン、碧」

藍染はボクとギンの顔を見た。

「あそこであんなん言ったら要やったらああすること最初からわかつてはったやろ？」

「腹黒いよなア。意地悪いよなア」

「…碧、うるさいよ。それに本当にそう考えていたのかはわからないだろう？」

「それに破面が五体消えても問題はない」と藍染は言った。

「所詮は最下級だ。ギリアン 予定には寸分の狂いもない。最上級ヴァストローデを揃えて十刃が完成すれば我々の道に敵は無い」

そう言つて藍染は歩いて行つてしまった。

「…我々の道に敵は無い、ねえ」

「ああ、虫酸が走るわ。あんな奴の仲間なんて」

「少しの辛抱だよギン。いつかぜつたいに」

「わかつとる。ここまで我慢してきたんや。後少しぐらいできる」

ギンの顔は無表情だった――。



「結局、No. 6はグリムジョーなんだよね？」

「そうやろ。だってルピ生きとらんし」

井上織姫の力で片腕を取り戻したグリムジョーはルピを殺しNo. 6の力を再び取り戻した。

「コロコロ替えるのやめてもらいたいな。覚えるのめんどくさいし」

「覚える系は好きやろ碧。変なところで手エ抜こうとしちやあかんやろ」

「だってー」

ぶーすかぶーすかと文句を言うボク。ボクは歩く足を止めた。それに気づいたギンも足を止め振りかえる。

「?どうしたんや碧」

「いやー、暇だし井上織姫さんに逢いに行こうかな」

ボクは呟いた。

井上織姫。彼女とは本当の世界で何度か会ったことがある。主に両親が誕生日は二人で居させるようにボクが仕向けて織姫さんの家に泊まりに行くのだ。

織姫さんの家だったら父ちゃんも母ちゃんも文句は言わない。人間で唯一ボクと関わりのある人間だと言つてもいいだろう。

「……この時代の織姫さんにお世話になつた訳じゃないけど……恩は返さないといけないし……とりあえず、側に……いやでも多分お世話係はウルキオラになるだろうし……うーん……」

とりあえずギンとボクは別れブツブツと言いながら歩いていた。するとなんと言うことだろう。いつの間にか部屋についてしまったじゃあないか。

考えても仕方がない。流れに身を任せようと思つたボクはとりあえずノックをした。

「は、はいっ……!!」

「どうぞ!!」と上ずつた声が聞こえてボクは思わず笑つてしまった。



グリムジョーっていう人の腕を治したら人が一人殺されちゃって、その後私は軟禁？なのかな。されちゃった。部屋に居ても何もすることはなし私はとりあえず窓を見つめた。

「どうしよう…」

思わず呟いた時、ドアがノックされちゃって驚きのあまり私は上ずった声で返事をしました。

は、恥ずかしいい!!

顔が真っ赤になるのがわかる。ドアが開かれると同時にクスクスと笑い声が聞こえる。部屋に入ってきたのは、銀髪の男の人だった。

「…市丸碧って言うんだ。これから少しの間よろしくね、井上織姫さん」

「え、えつと…」

私が困った顔をしていると市丸さんはまたクスクスと笑いながら「ここは、私は貴方達とはよろしくするつもりはありません!! っていうところだよ」と言った。

…あれ? この人…もうしかししたらイイ人かもしれない…。

「ここは退屈で暇だよねえ。分かるよ。ボクだつて…そうだ」

「な、なら何で虚^{しん}圈^{なまじゆう}に貴方は居るんですか…!？」

私が聞くと市丸さんは「織姫さんはさ、松本乱菊つて知ってる?」と聞いてきた。

「…え? なら、乱菊さん…? 知ってますけど…」

「乱菊とは腐れ縁だね。ボクの知り合いが乱菊に好意を持つてるんだ。乱菊もきつとアイツに好意を持つてる。でもね、色々な理由があつてボクの知り合いは乱菊の側に居られない。アイツは自分の気持ちも素直に言えないような奴だからな。ボクが側に居てやらないといけないんだ」

悲しそうな笑みで市丸さんは言った。

「…市丸さん……」

「碧でいいよ。市丸って虚圏こじにはボクともう一人いるしね」

…市丸って…。この前、乱菊さんが寝ている時に寝言で呟いていた単語。本当にこの人は乱菊さんと知り合いなんだ——。

「織姫さんはさ、仲間を裏切る時苦しかった？」

「え？」

「多分…いや苦しかったよね。ボクはね、無心だった。何も感じなかったんだ。いや乱菊を裏切る時悲しかったよ？でもそれだけ。多分未だギンも乱菊も生きてるからだと
思う」

何を、言ってるんだらう。私には碧さんの言っていることは理解出来なかった。

「もし自分がこの世界の住民じゃなかったらどうする？」

「？」

「ボクは見えない壁を作って、それでできるだけ情を持たないようにする。……けれど
やっぱり」

「…親に情を持たないようにすることなんてできっこ無いよね」そう小さく呟いたのを
私は聞き逃さなかった。

「急に变なこと言っでごめんね!!意味わからなかったでしょ!!ぜーんぶ冗談!!」

ニカツと笑う碧さんの顔は乱菊さんの面影があるような気がした――。



敵襲が来て藍染に呼び出された。正直に言うと話の内容はそんなに覚えていない。
それほどつまらない会議だった、と言うことだ。

会議が終わった後、ボクはギンと廊下を歩いていった。

「よう気に入ったようやね碧」

「んー、まあね」

「ようやくオトモダチ出来たんやない？」

「…それ、ボクが友達いないみたいな言い方…！」

「そう言ってるんよ」

ほんの数十分ギンとの殴り合いをした。

戦い

「…なんや覗き見かいなあんまりええ趣味やないなあ東仙サン」

「キモい、キモいよ東仙!!」

本当の事を言っただけなのにボクはギンに頭を叩かれる。

「…心外だな。君も奴等の動きが気にかかって此処へ観に来た口だろう？市丸」

「いややなア。冗談やないの」

「これだから冗談も区別の出来ないお堅い人はさ」

「…一旦黙ってくれへん？碧」

…また頭を叩かれた。痛い。絶対たんこぶ出来たねコレ。

「ねー東仙。コレどうにかしてよ」

ワンダーワイスがボクの腕をつかむ。捕まれない方の手でワンダーワイスを指差すと東仙は「ワンダーワイス」と名前を言う。すると大人しく手を離すなるワンダーワイス。

「…何やあの難しい子があんたにはえらいなついてるなア」

「…純粹なものはそれ同士引かれ合うものだ。その子が何について純粹なのかは未だ量りかねるがな」

「成程なア。道理でボクらには仲良うしてくれへん筈やね」

「え？ボクは至って純粹ですけど？なのに何でギンよりも敵視されちゃってんの？ボク？」

ボクがワンダーワイスを指差して言うときギンは「当たり前やろ」と言った。

「生粋のドSが何言つとんねん。アホか」

「はあ!?!Sじゃないし!!どこ見て言ってるの!?!」

ギンの胸ぐらを掴みグワングワンと揺らす。

「……つちよつ、止めてエ。酔う、酔うから」

「……………奴等五人に別れたんだが…」

東仙はボクとギンが言い合っているのを見ながら小さく呟いた。

「ボクはSじゃなああいいいい!!」

「…吐く…」

「ワンダーワイス!!袋だ!!袋を持ってこい!!」

「……………袋……?」

その場はカオスだった。



「あー。碧のせいで大変な目にあつたわ」

「ホント何ボクの一張羅に吐いてくれてんの!? 汚れた!! 臭い!!」

「何度も止める言うたわ!! それを無視して振り続けたんは碧やる!!」

「はあ!?! ボクが悪いって言ってるの!?!」

「碧、ギン。喧嘩は止めてもらえるかな」

「せめて外でやって来てくれ」 そう言う藍染にボクは拳手して言う。

「藍染隊長ー。喧嘩してませーん。ただのじゃれ合いでーす」

「そやそや。これが喧嘩の内に入るんやったらボクら何回も喧嘩やつとるで」

「……無性に爛にさわるね」

プププと笑うと藍染にギンと共に軽く頭を叩かれた。ジンジンする。

「…何か言うことは?」

「(い) (い) 免なさい…」



「眠ーい。何かあったらギン起こして」

「今寝るん？場違い過ぎるやろ」

横でブツブツ姑のように五月蠅いギンを無視してボクは目を瞑る。そして、目を開けた時は……

「何で現世？」

護廷十三隊を敵にしてギンに抱えられてました。

「ほんま何度も起こしたんやで？なのにこの状況下で寝れるってどれだけの神経しとんねんお前」

「…なんかご免なさい」

とりあえずギンにおろして貰う。

「寝起きに戦闘かあ。きつついなア」

「多分未だボクらは戦闘せんで」

ギンがそう言った瞬間――

「おー、珍しい」

「イツルが怒つとるなあ」

「元氣そんで何より」

急激に大きくなったイツルの靈圧を感じてボクとギンは笑いながらそう言った。

「何でこんなにイツル怒ってるんだろ？」

「大方イツルと中つた奴がボクらの名前出したんとちゃう？ボクら裏切り者やし」

「そっか」

ここでボクとギンの会話は途切れた。

ピクリとギンの眉毛が動く。

「…乱菊…」

反射だろうか。ギンは斬魄刀の柄を手にかけている。

「抑えて、ギン」

「…わかつとる」

「わかつてないよ」

「わかつとる!!」

「なら…斬魄刀から手を離しなよ」

ボクがギンの手を指差すとギンはハツとしたような顔をして斬魄刀から手を離す。

「…もう少し、もう少しだから…抑えて、お願い…!」

「…わかつとる…」

ギンの横顔は苦しそうで見てるこっちが辛かった。



「…なんやえらい…懐かしい顔が揃うてるやないの」

「ホントだ。平子サンいるじゃん。生きてたんだ」

「久し振りやなア藍染」

目の前には昔失踪したとされる元隊長各がたっていた。それは懐かしい顔が沢山いて表情筋がついつい緩みそうになってしまう。

だが直ぐに戦闘は始まり簡単に「フーラー」がやられてしまう。それを見たギンが嬉しそうな声色で言った。

「ひゃあ可哀そ」

戦闘を観戦していたボク達だが平子さんがボク達に攻撃を仕掛けてきたせいで観戦

とも言わなくなった。ボクとギンが応戦する。

「もういいよ。ギン、碧。終わりにしよう」

「……………何やと……………」

藍染は用済みのハリベルを斬った。

「どうやら君達の力では私の下で戦うには足りない。ギン、碧、要。行くぞ」

ハリベルはすかさず藍染を攻撃したが首を斬られて瞬殺されてしまう。

「さあ始めようか。護廷十三隊そして——出来ない破面もどき達」

藍染がそう言うときひよ里さんが「…藍染…」と声を漏らす。

「…迂闊に近付かんとけよ。藍染のあの能力や。考えなしに近付いたらその時点で終いやぞ」

「…わかつとるわ」

ひよ里さんが齒軋りしながら平子さんの言葉に答えた。

「アホ。お前に言うてんねん。柄から力抜けひよ里」

「流石思い遣りの深い言葉だ。平子隊長」

「藍染の言葉にひよ里さんが顔を上げる。藍染の言葉に反応するひよ里さんを平子さんが咎める。」

「だが迂闊に近付いたら終わりとは滑稽に響くな。迂闊に近付こうが慎重に近付こうが或いは全く近付かずとも全ての結末は同じこと。未来の話などしていいない。君達の終焉など既に逃れようのない過去の事実なのだから」

ひよ里さんだけではなく、平子さんを除く他の皆が藍染の言葉に反応する。

「挑発や！乗るな!!」

「——何を恐れるコトが有る？百年のあの夜に君達は既に死んでいると言うのに」

もう我慢は出来なかった——。

ひよ里さんが目をおかつ開き藍染に攻撃を仕掛ける。

「ひよ里っ!!!」

しかしひよ里さんを攻撃したのは藍染ではなくギン。ギンの斬魄刀『神鎗』でひよ里さんの胴体を切り離れた。

「お一人様お————終い」

「ひよ里!!!」

平子さんが慌ててひよ里さんのところへ駆け寄る。

「……(ぎ)……ゴメンな……シンジ……ウチ……ガマンできひんかった……」

平子は織姫の力にすがった。早く一護は帰って来ないのかと。平子さんの悲痛な声だけが木霊する。

平子さんが藍染を睨む。

「良い眼だ。百年振りに生き返った眼を見た気がするよ。平子真子。憎いかわたしが。憎ければ向かってくるがいい。君は特別に私の剣でお相手しよう」

平子さんはひよ里さんを地面に置くと「一護が戻ってくるまでハッチ頼む」と言った。

「随分と信頼しているんだね。あの少年を」

「理解でけへんやろ。仲間すら信じひんオマエにはのオ」

「信じるということは頼るといえことと同義だよ。それは弱者の行いだ。我々には無用のものだよ」

「あんだけ手下引き連れてた奴がよう言うわ。部下には自分のこと信じるように口八丁くちはちちようで誑たぶらかかしてつてんやろが」

「いいや。私は部下達に自分を信じろなどとただの一度も言ったことは無い。共に来いとは言ったが信じて共に来いなどとは言わなかった。常に私を含めた何者をも信じる

など言つて聞かせた。だが悲しいことにそれを徹底出来る程強き者はそう多くない。全ての生物は自分より優れた何者かを信じ盲従しなければ生きてはいけないのだ。そうして信じられたその重圧から逃れる為に更に上に立つ者を求め上に立つ者は更に上に信じるべき強者を求める。そうして王は生まれそうして全ての神は生まれる。まだ私を信じるなよ平子真子。これからゆつくりと信じられる神が誰なのか教えよう。信じるのは、それからだ」

藍染は冷たい眼で言つた。藍染が斬魄刀を抜く。それを見た平子さんは嬉しそうに「やつと抜きおつたか」と言つた。

「オマエは俺の斬魄刀の能力を知らん。——言うとかで藍染。他人の神経を100%支配する斬魄刀がオマエの『鏡花水月』だけやと思つたら大間違いや。——倒れろ『逆撫』」

全てが逆様の世界へと変わる。しかし藍染は「只の眼の錯覚」で済ませ平然と平子さんを斬る。「只の子供遊び」だと。それは一瞬の出来事で、藍染は「ついで」のように東仙も斬る。前の戦いで重症を負っていた東仙は直ぐに死んでしまった。

黒崎一護が虚圏から現世へと戻つてきた。そして藍染に斬りかかる。が、藍染に一撃

目を防がれてしまう。

「…良い斬撃だが場所が良くない。首の後ろは生物の最大の死角だよ。そんな場所に何の防御も施さず戦いに望むと思うかい？」

藍染は振り返って黒崎一護を見据えて言う。

「…何を考えているか当ててみようか。初撃の判断を誤った。今の一撃は虚化して撃てば一撃で決められた——。撃ってご覧。その考えが思い上がりだと教えよう」

黒崎一護は顔に仮面をつける。

「そうだ、来い」

黒崎の攻撃『げつがてんしゅう月牙天衝』は藍染に届いていなかった。そして一瞬で黒崎一護の下へと藍染は行くと言った。

「こうすれば今すぐにも心臓に手が届きそうだ」

藍染が黒崎一護に問いかける。藍染に吞まれそうになった黒崎一護を狛村が止める。そしてその場にいた全員が言った。「俺達がお前を護つてやる」と。一護は「みんなボロボロなのに何を言ってるんだ」と言う。すると平子さんは言った。

「オマエ一人で戦わず方がよっほど無茶やろ。一人でやられたハラの虫おさまれへん奴がようさんおんねん。一人で背負うな、厚かましい。これは俺ら全員の戦いや」

そうやって全員が藍染に斬魄刀を向けた。



藍染だと思っていた者は雛森だった。動揺した隊長各及び仮面ヴァイザードの軍勢はやられる。総隊長まで出て来て戦う。総隊長の攻撃、そして黒崎一護の攻撃で藍染を少しだが斬ることに成功した。だがそれは直ぐに治ってしまう。藍染が黒崎一護を「生まれた瞬間

から特別な存在だった” そう言った瞬間、元十番隊長黒崎一心が出てきた。

「——喋りすぎだぜ藍染」

「…………お…………親父……………か…？」

全ての真実を知らない黒崎一護は動揺する。黒崎一心は一護を連れて距離を取った。

「…それにしても随分と長い見物だったね。ギン、碧」

「見物してたのと違いますよオ。手助けに入る隙も必要も見つからへんかったです」

「みーんな藍染隊長の方に行っちゃうからこっち暇だったんですよ？」

「…そうか」

黒崎一護が後ろから攻撃してくる。ギンがそれを受け止めた。

「ねえねえギン。どっちが戦う？」

「せやね…。ボクから行くか」

ギンはそう言うのと黒崎一護の下へと歩いて行く。

「…久しぶりやね。君と戦うんは。今度は手加減無しや。卍解『神殺槍』かみしにのやり」

ギンの周りの建物全てが真つ二つに斬られる。ボクはギリギリ回避成功。

「あつ、ぶねえ…！」

し、死ぬかと思った…!!しかしギンの攻撃は黒崎一護に止められていた。

「同じ卍解が卍解で止められるワケねえだろ」

そう言つて黒崎一護がギンに攻撃する。ギンは避けられず頭に傷を負ってしまった。

「ギン…!!」

「大丈夫や。安心してええよ」

「にしても…」とギンが言葉が続ける。

「…やっぱり気味の悪い子や。怖いなア。これは今のうちにちゃんとお仕置きしとかんと…難儀なことになりそうや」

ギンはいつの間にか斬魄刀を縮めており、それを構える。

「さてしかしどうしたもんやろね。ボクの卍解はあつさり止められてもうたし——普通に戦うしかないんやろか」

そう言つてギンは黒崎一護に突進する。素早い剣技。黒崎は防御で精一杯だ。

「大した刀やね。斬り込んでるこつちのんが折れてしまいそうやわ」

「よく言うぜ。じゃあさつさと折れちまえよ！」

ギンは黒崎一護と間合いを取ると『神殺槍』を伸ばし黒崎一護の肩を斬る。黒崎一護は戦いの中でギンの卍解が一番怖いのかを見極めた。伸縮の速度だと。

それを聞いたギンはニヤリと笑みを深めると手を叩いた。そして言ったのだ。『神殺槍』の速さは手の叩いた音が聞こえる速さの五百倍だと。そしてそれを知ったところで勝ち目はないと。

「…大丈夫だよ、ギン」

——何か嫌な予感がする。

その嫌な予感が当たってしまった。ボクは目の前が真っ暗になる感じを感じた。

ifの終わり

ギンが乱菊をどこかに連れて消えたとか今となってはどうでもいい。今のボクにはギンが藍染に斬られ刺されているこの光景の方がよっぽど重大だ。

「…ギ、ン………？」

乱菊が空から降ってくる。ボクの体は冷たくなって動かない。

やめろやめろやめろやめろやめろヤメロっ!!

ギンの下へと走って行きたいのに足が鉛のように重くて動かない。指先が驚くほど冷たい。自分の顔が自分で理解出来る程——青い。目が充血してボクは…吼えた。

「あいぜエエエンンンンンン!!」

ボクは藍染に斬りかかった。



碧から違和感を感じ始めたのはだいぶ前からやった。何者なのか、ボクは詳しいことは知らん。ずっと考え取った。そして結論に行き着いた。

碧は多分ボクの息子や――。

母親はきつと乱菊だろう。時折見せる碧の笑顔。あれは乱菊の笑顔と同じだ。どここの世界のボクの息子かは解らんけど――ご免な碧。この世界では生んでやれんかった。

黒崎の強い眼になったのを見てボクは安心する。ふと視線を外すとそこには小さい碧が眼に涙を溜めてこちらを見ていた。

この世界で生めない事を謝る？ いや……ここはお礼を言おう。少なくとも何らかの形で碧はこの世界に来てくれた。ボクに顔を見せてくれた。こんな情けないボクに着いてきてくれた、その事全てのお礼を言おう。最高の笑顔で。

「ありがとう」

この世界に少しだけでも来てくれてありがとう

ボクと一緒に行動してくれてありがとう

ボクに笑顔を見せてくれてありがとう

ボクと乱菊の奪われたモン取り返そうとしてくれてありがとう

ボクの息子…ボクと乱菊の息子として生まれてきてくれてありがとう

—さいなら

小さな碧から「こちらこそ、ありがとう」と言われたような気がした。



ボクの斬魄刀は藍染に意図も容易く受け止められてしまう。

「キミは随分とギンに執着していないかい？」

藍染はそう言うと言った。

「やはり君達親子は似ているよ」

「!!」

「どうやってこの世界に来たのかは流石の私でも解らない。教えてくれないかい？」

ボクは無言で斬魄刀を振り回す。

「…無視か」

「……ボクは藍染に嘘をついていた」

「……」

ボクは斬魄刀の握る力を強める。

「ボクは火炎系の斬魄刀だと言ったな？ ホントは違うんだ。名だつて『鬼火』じゃない。
ボクの斬魄刀は——悪あくと契約やくそくし墮落だらくしろ『臥薪嘗胆がしんしょうたん』っ!!」

黒い霧がボクと藍染を覆う。

「死ころせ『神殺槍かみしじのやり』」

ボクの斬魄刀が『神殺槍』へと変わる。藍染は一瞬驚いた顔を見ると「成程」と呟いた。

「キミの斬魄刀は只の物真似か。面白くない」

「ボクの斬魄刀は契約している妖怪アヤカシの力を使うことが出来る!!姐己行くよ!!」

姐己が得意とするのは“変化”。その変化の力を使って色んな斬魄刀のに姿を変えることが出来る。

「…しかしこの程度の力。先程のギンの攻撃の方が強かった。もうしかしたらその姐己とやらは持ち主以上の力を出すことが出来ないんじゃないのかな」

「!!」

「もしそうでないのなら、キミはまず『鏡花水月』を使えばいい。しかし使わないと言うことは…本体を持っている私には通用しないから。それでいて幻覚の作用も弱いのだろう。…残念だ」

藍染はそう言うと言くとボクの体を斬った。

「本物以上に成れない物真似など虫けら同然だ」

勝てなかった。仇を討てなかった。ここで死ぬのだろうか。もう何もかもがどうでも良くなってきた。ああ、死ぬをだな。

ボクの体が光に包まれた――。



「もオー。何でアタシが市丸碧こんなやつ持たなきやならないのオ創造主サマア」

「MAGICIANS・REDマジシャンズレッドがチマチマしたことはやりたくない、と言ったのだろうか？」

暗い、暗い道。そこには小さな市丸碧マを抱えたMAGICIANS・REDマジシャンズレッドと創造主サマこと藍染悠右介あいぜんゆうすけが歩いていた。

「PINKYピンキーは現世を掃除屋は尸魂界の市丸碧マのことにについて全ての記憶を消しに行ってるんだ。ここにはMAGICIANS・REDマジシャンズレッドと私しかいないだろう。仕方の無い

ことだ」

そう言つて歩く創造主サマを見てマジシャンズ・レッドは頬を膨らませる。

「いい退屈しのぎになったよ。彼は良かった」

「ホント創造主サマって兄に似て性格悪いよねエ」

「…先の言葉は撤回しよう」

創造主サマの言葉に思わずマジシャンズ・レッドは吹き出す。

「どれ程嫌つてるのオ!?!クククッ」

「…碧カレとはもうおさらばだ。開くぞMマGジIシCヤIンAズNズ・RレEドD」

二人は足を止めると大きな扉がギギギと音を立てて開いた。扉はとある場所の空に繋がっていた。下を見るとそこには市丸ギンが立っていた。

「…初めまして、かな。市丸ギン」

「はよ碧返して貰えんか」

一年。碧がいなくなつて本当の世界は一年しか経つていなかった。それも全て創造主サマの仕業である。

碧の体は本当の世界の体の形になっており、子供の姿だ。碧が飛ばされた世界の体は本当の碧の体ではなく、マジシャンズ・レッドが作った「魂すら違和感を感じない本物そっくりな体」に一時的に碧の魂魄を移していた。そのお陰で藍染に体は殺された碧だけが瞬時に本物の碧の姿に魂魄を移し変えたことで生き延びている。

マジシャンズ・レッドは市丸ギンに碧を引き渡す。

「今回は有意義な時間を過ごせた。ありがとう、そして済まなかった」

創造主サマは市丸ギンに頭を深く下げるとマジシャンズ・レッドと共に何処かへと消えてしまった。



戦争が終わって藍染は投獄された。ギンは死んで碧はいなくなりました。

「碧っ!!碧っ!!」

あたしはいなくなってしまった碧をずっと探し続けた。

「おい、松本。一体誰を探してる」

「碧が!碧がいないんです隊長!!」

あたしがそう言うのと隊長は首を傾げて「…碧って誰だ……?」と言った。

「…え?」

「松本の知り合いか?」

あたしは碧の特徴をあげていく。だけど隊長は「知らない」と頭を横に振った。

碧の存在を覚えているのはあたしだけだった――。



碧が眼を覚ました。あれから一週間眼を覚まさなかつた碧。ボクは碧に抱きついた。

「大丈夫か、碧っ!?!怪我しとらんか…?」

「怪我?そんなのしてるわけないよ。だってボク散歩してただけなんだから」

「もう心配性だなあ」と笑いながら言う碧にボクは眼を見開く。…もうしかして記憶が抜かれとる……?この後碧に確かめを取ったら「友達を作るために散歩して帰って来て疲れて寝た」と返って来た。

碧に何があつたのかは解らんけど、記憶を消すほど悲しいことがおきたのならボクは詮索はせん。碧が無事に生きているのであれば――。

少年は記憶を消した。

記憶を消したことで少年は忘れようとした。

記憶は忘れても魂魄は覚えている。

楽しいあの記憶も悲しいあの記憶も全て。

いつか少年が思い出すその日まで——

——パンドラの箱に仕舞われることとなる。

番外編

結婚

松本がサボってきた仕事を俺は手伝う。：つたく、なんでアイツはこうもサボるんだ。志波隊長の時は自分があれほどサボるな、と口煩く言っていたのに。書類と睨めっこを俺はかれこれ何時間やったことだろうか。

「隊長」

珍しく真剣な声色で俺に話しかけてくる松本。俺は書類から前に立っている松本へと視線をかえた。

「…あたし、籍を入れることになりました」
「市丸か」

俺がそう聞くと松本は嬉しそうに「はい」と答えた。

「式はいつだ？」

どうせ松本のことだ。ソファアにでも寝そべって式場のカタログ片手にブツブツと何かを言っているんだろう。式の日程等が決まっていればその日は俺も速く仕事を片付けるつもりだ。そのため、知っておきたい。

松本は少し悲しそうな顔をする。「式は挙げないんです」と一言。

「…松本、熱でもあるのか」

仕事のことをし過ぎだろうか。基本的松本は仕事をサボるのでまともにはやっただ日には体がついていけないのかもしれない。そんなことを考えていると松本は「なんか失礼なこと考えてません!？」と言った。

「ほら、ギンは尸魂界を追放されてるでしょ？だから…」

「尸魂界では挙げられない、ってことか」

「それにあたしは現世のことはよくわからないから現世で挙げるところも出来ないですし。だから挙げなくてもいいかな、って」

「そうか」

俺はそう一言告げると書類を持って隊舎を出た。



十三番隊舎。書類を十三番隊に渡さなくてはならなかったので持ってきた。

「浮竹、体の調子はどうだ」

「今日はいい感じだ。：日番谷隊長はそうでもないみたいだね」

「暗い顔をしている」浮竹は俺の頬を引っ張りながら言った。

「悩み事があるなら俺に話してみてもどうだ？　こう見えても俺は日番谷隊長よりも長く生きてる。もうしかしたら力になれるかもしれない」

「……実は……」

俺は先ほどの事を全て浮竹に話した。すると浮竹も「意外だ……」と呟いた。

「……どうせ松本のことだ。式は挙げたいんだろう。だが市丸のこともある。……今回アイツは充分な働きもした。だからこそ俺は挙げてやりたいと思っっている」

「日番谷隊長は部下思いなんだな」

「そういうわけじゃねえ！」

浮竹は笑いながら「照れなくてもいいよ」と言った。

「わかった。俺も一肌脱ごうじやないか。俺にいい考えがある」

「？」

浮竹は襖の方に視線を移すと「聞いていたんだろ？　京楽」と言った。襖が開き京楽が

「バレちゃってたか」と頭をかきながら部屋に入ってきた。

「話聞いていたか？」

「ホント、盗み聞きするつもりはなかったんだよ？ 偶々タイミングが良かったと言うか……」

「聞いてたんだな」

俺が呆れた声で言うのと京楽は「ゴメンよ」と言った。

「いや、隠すことでもないし別に気にしてねえよ」

俺がそう言うのと浮竹が横で手をパチンと叩いて「さて」と言った。

「本当なら現世で挙げるのが得策なんだが……生憎俺達は現世のことについてよく知らない」

「黒崎達に聞こうとしてもまだアイツらは学生。知るはずもねえよな」

「となると……山爺を説得して尸魂界で挙げるのが一番得策かもしれないね」

京楽の言葉で雰囲気微妙な雰囲気へと変わった。

「山爺頭カタイからなあ」

「可愛い日番谷隊長の部下の為だ。俺達が頑張るしか無いだろう。なあ！日番谷隊長
！」

「……………」

「女の子の為ならボクも一肌かすよ」

こうして俺を含む三人は一番隊舎へと向かった。



「ならぬ。尸魂界を追放されたものが尸魂界に入るなど言語道断！」

「いいじゃん山爺。拳式ぐらいさあ」

「ならぬ！」

「そこをどうか頼みます！源流齋先生！」

「お願いだ総隊長!!」

「……………」

総隊長は上から俺を見下ろす。俺は頭を下げていたので総隊長の顔は見えないがきつと見下ろしているだろう。

「あ、あのっ!!総隊長！わ、私からもお願い出来ないでしょうか!」

この場からは聞こえる筈のないソプラノの声。俺が振り向くと「ハアハア」と肩で息をしている雛森が立っていた。

「雛森!」

「…日番谷くんは暫く五番隊の仕事を手伝ってもらってた時もあつたし…私にはこれぐらいしか出来ないけれど…」

雛森はそう言つて笑つた。

「総隊長！市丸はもう尸魂界に攻撃する気はねえ!!そんな気があるならアイツはもうとつくに現世を滅ぼしている!!」

「そうだよ山爺。だからさ」

「源流齋先生！」

「総隊長!!」

「…ふむ」

総隊長は長い髭を触りながら言った。

「…そこまで言うのなら許可しよう。ただし市丸が居ていいのは1日限りとする」

「…!!ありがとうございます!!総隊長!!」

「やったね!シロちゃん!!」



「松本」

「? 何ですか隊長。仕事ちゃんと珍しくやりきりましたよ?」

「: 総隊長から尸魂界で式を挙げていいと許可がおりた。良かったな」

「えっ!?!」

「何で急に」と驚く松本を見て「珍しくお前は今回頑張ったからな。神からのプレゼントだろ」と言った。

「隊長の嘘とかじゃないですよね!?!」

「ちげえよ」

「じゃあホントに:?! やった!! あたしギンに連絡してきます!!」

ダダダと走っていく松本の後ろ姿を見て俺はため息をついた。
全く元気な奴だな。

その元気を仕事にもまわしてもらいたい。俺はそう思った。



「やっぱり尸魂界で挙げるんだから着物かしら？」

「でも最近は何魂界でも『ドレス』って言う衣服が流行ってるんでしょ？」

「そうなのよ。弓親、アンタはどう思う？」

あたしが弓親にカタログを見せると「乱菊さんはどう考えてもドレスでしょ」と言っ
た。

「それ、ギンにも言われたわ」

「ならドレスでいいじゃん。何迷ってるのさ」

「…ドレスにする!!」

急に立ち上がったあたしを見て弓親は思い出したように「よく総隊長からのお許し出
たよね」と言った。

「そうなのよ。あたしもびっくり」

「え？らんらん達知らないの？」

「あら！やちるじゃない!!」

突然ヒョコリと現れたやちる。やちるの片手には金平糖の入った袋を持っていて、今もボリボリと食べている。

「あのね、ひつつーとうつきーとしゅんしゅんがじいじに直談判したんだよ」

「え？隊長達が？」

「へえ。意外にいい隊長じゃん」

「ひつつーね、ひなもんと一緒にじいじに頭下げてたよ!!」

「ひ、雛森まで!？」

やちるはまだ金平糖が沢山入った袋をあたしに預け笑って言った。

「いい上司と後輩持ったね！らんらん!!結婚おめでと!!お祝いに金平糖あげろっ!!」

やちるはそう言うとは何処かへと行ってしまった。

「…隊長…」

「………何で副隊長知ってたの？」



結婚式当日。結婚式には沢山の人達が来てくれた。本当は一護や織姫達も呼びたかったんだけど現世で“テスト”なるものをやっていると耳にはさみ、呼ぶのを急遽止めたのだ。

「乱菊綺麗やで」

「ふふっ、ギンもカッコいいわ」

ウエディングドレスを身に纏ったあたしを見てギンが言った。あたしは嬉しくて顔を綻ばせながらギンにも「カッコいい」と言う。

式が始まると横側に座っていた雛森と目が合う。雛森に口パクで「ありがとう」と伝えると雛森はぶわっと目から涙を出しブンブンと首を縦に振っていた。それを見てあ

たしはクスツと笑う。

「…シロちゃん」

「おい、雛森。泣くの早すぎだぞ!?まだ始まってもねえのに…」

「乱菊さんかわいいよお、綺麗だよお、美人だよお」

「分かった、分かったから泣き止め」

泣いている雛森の横に座っている隊長がアタフタとしている姿を見て早くくっつけばいいのにと思ってしまう。

着々と式は続いてそして今式が終わろうとしている。

「新郎新婦、誓いのキスを」

その言葉を聞いた瞬間あたしはジャンプしてギンの唇にあたしの唇を重ねた。まさかこんな荒業をしてくるとはギンも思っていなかったのだろう。眼を見開いていた。

唇を離すとあたしはギンに言った。

「愛してるわ！ギン!!これからもよろしくね!!」

「ボクも乱菊のこと世界一愛してるで。もう、離さへん」

あたしとギンは抱き締めあった。盛大な拍手が会場に響き渡った――。

子供の名前

あたしの中に子供がいることが判明したのであたしは産休をとってギンのいる現世へと来ていた。

「うわあ、大分腹大きくなつとるな」

「そうね。何回もお腹蹴られたりするのよ」

あたしがお腹を擦りながら言うどギンは「乱菊と同じで活発なんやね」と言った。ど
ういう意味よ、そう聞こうとしたらあたしの伝令神機がなつた。電話である。

「はい、松本です」

「あたし産休取つたんですけど」と言ったら隊長の怒声が聞こえた。

『産休届け出してねえだろ！早く出せ!!』

ついうっかり。産休届けを隊長に出すの忘れてたわ。あたしはきつと机の上に置
きっぱなしとなってる産休届けを出すため、穿界門を通ろうとしたらお見送りに来た
ギンが「あんまり走ったりしちやあかんで」と言った。
あたしはそれに「わかってるわよ」と返した。



「…ちゃんと受け取った。ったく…」

隊長があたしを睨み付けて来るのであたしは視線をずらす。

「あ、そう言えば隊長」

「…なんだ」

「この子の名前何がいいと思います？男の子何ですけど」

あたしはお腹を擦る。隊長はあたしのお腹を凝視したかと思えば「それは俺じゃなくて市丸に聞くことだろ」と言った。

「ギンに聞いたら乱みだれかいいって。絶対性別勘違いしてるわ」

「……………」

「あたし的にはキンかシロガネがいいと思ってるんだけど全部ギンが却下しちゃって」

あたしが頬をふくらませながら言う。隊長は真剣な表情で「松本」とあたしの名を呼んだ。

「名前は市丸に決めさせる」

「それどういう意味よ!!」

近くにあつたクッション隊長にを投げてあたしは走って隊舎を出た。

「…。松本オ！走るんじゃない!!」

隊長の怒号を聞いてあたしは慌てて走るのを止めた。ふう、ナイス隊長！



「絶対いいと思うんだけどなあ」

「何がだい？」

「あ、京楽隊長。またサボリですか？七緒に怒られますよ」

あたしがそう言っても京楽隊長はヘラヘラと笑って「産休取ったんじゃないの？」と聞いてきた。

「産休届け出し忘れちゃって」

「ああ、それでわざわざ出しに来たのね。大変だねえ乱菊ちゃんも」

「そうなんですよ！隊長ホント五月蠅くて」

「まあ何気に優しいですけど」とあたしが言うと「意外と周り見てるよねえ日番谷くん

は」と京楽隊長は言った。

「早く雛森とくつつけばいいのに」

「早く雛森ちゃんとかくつつけばいいのに」

言った事が被ったあたし達は笑った。

「お肚子供いるんでしょ？名前決めちゃったりしてるの？」

「それがあたしの言う名前全部却下されちゃうです」

京楽隊長はあたしの言葉を聞くと苦笑いになって「じゃあまだ決まってるじゃないんだ」と言った。

「美月とかどうだい？きつと可愛い子に育つよ」

「隊長、乱菊さんのお腹の子は女の子ではなく男の子です」

「な、七緒ちゃん……」

音もたてずに現れたのは伊勢七緒。七緒は眼鏡を光にキラんと反射させると一瞬で京楽隊長を縄で縛った。

「書類は溜まりに溜まっています。さあ、帰りましょう」

「えっ、ちよっ、七緒ちゃん!？」

「…七緒また腕をあげたわね…」

七緒はあたしに「ではお大事に」と言つて京楽隊長を連れて消えてしまった。

「……女は怖いわ」



「あっ!!らんらんだあ!!ほら、ひなもん早く走って!」

「ま、待ってください…!」

前からドドドと音を発てて走ってくるのはやちると雛森。やちるはあたしの目の前まで走ってくる。「わあ、ホントにお腹おつきいよひなもん！」と言ってあたしのお腹に耳をあてていた。

「ほ、ホントだ…。確か男の子だったんですよね、乱菊さん！」

「ええそうよ。あたしの予想では絶対にギンに似ると思うのよね」

あたしがそう言うのと雛森は「なんだろう。私もそんな気がする…」とあたしの言葉に頷いた。

「あつ!!今お腹蹴ったよ、らんらん!!」

「ええ、そうねやちる」

「凄いね!!」

やちるの笑顔に癒されたような気がした。



「名前。うーん、名前、ねえ」

「なんや。そない悩んで。はよ止まらな看板に当たるで」

「うわっ!!」

名前のこととて悶々と考えていたら目の前に看板があつた。危ない。危うくぶつかるところだった。

「ありがとうございます、平子隊長」

「別にええよ。あ、そう言えば結婚オメデト。すまんね俺行けんくて」

「いえ。雛森の仕事代わつたつて聞いたし一応お祝いの品も貰いましたし別に」

あたしがそう言うのと「一応つてなんや、一応つて」と軽く頭を叩かれた。

「で、なんか悩みおつたけど何に悩んどつたんや？あ、もうしかして離婚か？離婚の危機

か？」

あたしは無言で平子隊長の脛に蹴りを入れた。

「いつつった!!何すんねん!ちよー痛いわ!!」

「離婚とかしないですよ!何縁起の悪いこと言ってくれてるんですか!!」

「名前考えてたんですよ、な・ま・え!!」とあたしはふくらんだ自分のお腹を指差して言った。

「平子隊長はキンとシロガネ、どっちがいいと思います?」

「:いや、どっちもあかんやろ」

「それだけは子供の為にもやめておいた方がええで」と真顔で言われてしまった。

「えー。そうですか?んー、じゃあどうしよ」

「どないな名前がええんか?」

「ギンが色の名前だからこの子にも色の名前をつけてあげたいんです」
「なら、碧ってどうや？」

「“あお”って色の名前も入ってるやろ」と平子隊長は言った。

「あおい、アオイ、碧……。平子隊長、それに決定!!」

「うおつ、急に大声出して……。つてもうおらん」

早くギンに教えてあげましょ!

こうしてあたしのお腹の中に入っている子は“碧”となった。

市丸ギンの誕生日

9月10日

今日は父ちゃんんの誕生日。母ちゃんが気合いを入れて現世へと来ていた。

「久しぶりね！碧っ!!」

ボクの顔を見るなり母ちゃんはボクを抱き締める。母ちゃんの包容な胸に顔が埋まり息が出来ない。その為背中をバンバン叩くのだが、母ちゃんは「そんなに喜んでくれるの!?!碧好きっ!!」等と言って悟ってはくれない。

「ら、乱菊さん碧くん多分苦しがつてるんじゃ…」

「あら? そうなの? ならちゃんと口に出さないとわからないわよ碧」

織姫さんに助けられた。危うく実の母親に殺されるところだった…。いや、口に出せて言われても喋れない状況下だったし。

今は父ちゃん抜きでお出掛けだ。勿論お出掛けの目的は父ちゃんの誕生日プレゼントを買うため。

ちなみに何故ここに織姫さんがいるかと言うとボクは父ちゃんへの誕生日プレゼントを買ったこの後織姫さんの家に直行しないといけないからだ。

誕生日の日ぐらい二人でラブラブして欲しいと言う子供なりの気遣いである。

「碧はギンになに買うの？」

「ボクは、父ちゃんの好きな小説家さんの新作だよ。買いたいとは言ってたけど本屋に行く用事もそんなになかったから買おうかどうか悩んでるのを見てこれを買おうかなって」

ボクがそう言うと母ちゃんは「あたし、なに買おうかしら……」と言った。

「干し芋？」

「母ちゃん、それ父ちゃんの嫌いなもの。せめて好きなものあげてよ」

父ちゃん曰く昔、上司に干し柿と称して干し芋を食べさせられたらしい。干し柿に似

てるくせに柿じゃないことに怒りを覚えてから嫌いになったとか。ちなみにこれのせいで瀨靈廷通信と言うものに「んなアホな」と言う題名で連載を持っていたらしい。

「……んー、ギンつて物とか欲しいってあまり言わないから困るのよねえ」

「父ちゃん物とか必要最低限しか買わないよね」

「母ちゃんと違つて」とボクが言うと母ちゃんに頭を叩かれた。

「だつて家にあるダンス全部母ちゃんの服で埋まつてるじゃん。着ない癖に何で買うの？」

「別にいいじゃない！欲しいんだから！」

母ちゃんを見て女性は全員こうなのか、と思つてしまう。

「織姫さんは母ちゃんと違つてちゃんとしてるよね」

「うーん。私の場合はお洋服とか買うお金がないからなあ」

「あたしのおさがりあげるわよ、織姫!」「ありがとうございます、乱菊さん!」と女子
トークに花を咲かせている為、ボクは置いてけぼり。……本買ってこよ。



結局母ちゃんは最後の最後まで悩んだ末に写真立てをあげることにしたらしい。母
ちゃん曰くそこそこお高い茶色を貴重としたカツコいいやつ。理由は父ちゃんがいつ
も家族皆で撮った写真を大事そうに持っているから、だそうだ。

「じゃあ織姫、碧を頼んだわよ」

「任せて、乱菊さん!」

「お幸せに〜」

ボクん家まで母ちゃんを送ってボクと織姫さんは織姫さんの家へと向かう。

「今日は何が食べたい？」

「私、碧くんの為に腕を奮っちゃうよ!!」と織姫さんが言うのでボクは「パスタ食べたい」とリクエストした。

「パスタ、パスタかあ。んー、あんど風味のカルボナーラ風パスタ作ろう!!」

…果たしてボクは生きて父ちゃん達の元へと帰れるのであろうか。

ちなみに織姫さんの作ったあんど風味のカルボナーラ風パスタは意外にも美味しかった。



「誕生日おめでとう、父ちゃん」

父ちゃんの誕生日は昨日終わってしまったけどボクは気にしない素振りで綺麗に包装された本を渡す。父ちゃんは本を見た後嬉しそうな顔をして「ありがとう、碧」とボ

クの頭を撫でた。

どうやら母ちゃんは写真立てを3つ程買ってきたらしく、その写真立てには既に写真が入れられていた。

1つ目の写真立てには父ちゃんと母ちゃんと母ちゃんが小さい頃の写真。

2つ目の写真立てには父ちゃんと母ちゃんと母ちゃんの結婚式の写真。

3つ目の写真立てにはボクが生まれて父ちゃんの指をしゃぶっている写真だった。

「ボク、今幸せや」

「なら良かった」

「今何歳？」と聞けば「覚えとらんよそんなチマチマしたこと」と返ってきた。

「意外と大雑把だよな、父ちゃんって」

「乱菊程じゃないけどな」

「ちよつと。それ、どういう意味よ」

ボクと母ちゃんの目が合う。二人で頷くと父ちゃんに抱きついて言った。

「ギン」「父ちゃん」

「お誕生日おめでとう!!」

父ちゃんは嬉しそうにボク達の事を抱き締め返した。

松本乱菊の誕生日

9月29日

今日はボクの母親、松本乱菊の誕生日である。

「…乱菊って言ったら服やなあ」

「でも男のボク達に母ちゃんの趣味ってわかんないよ」

「……無理やな」

「無理だね」

母ちゃんの誕生日プレゼントとして服をあげようとしたボク達だが、残念ながら女性の服の趣味がわからない為、断念。

「……人形とか……？」

「乱菊の喜びそうな人形わかるんか？」

「とりあえず派手なもの送つとけばいいんじゃないの？」と言えば「適當すぎやろ」と返ってきた。

「女性へのプレゼントが一番悩む」

「…せやなあ」

ボク達は『女性のプレゼント特集!!』とかかれた雑誌をペラペラと捲り母ちゃんに良さそうなものを選ぶ。

「『第1位!今流行ペアリング!!』だって。母ちゃん父ちゃんから貰った指輪大事にしすぎて使えないって嘆いてたしもう一個買ってあげれば?」

「あー、それいいかもしれんなあ」

「…ボクはなんか安い指輪をネックレスにして人形にでもつけてあげようかな」

「父ちゃんとは違ってボクそこまでお金ないし」とボクは言った。

父ちゃんは昔戸魂界で隊長をやっていたこともあったのでお金は一生暮らしているぐらいある。母ちゃんが使っても使っても無くならない、と喜んでいた程だ。

「ほな、買いに行こか」

「うん」

ボク達は何気に重い腰をあげた。

「…あかん、迷ったわ」

「…いつもは織姫さんとかがいるからなあ」

ボク達は大通りと呼ばれる場所で迷っていた。いつもは案内人として織姫さんとかこの地に詳しい人がついてきてくれるのだが今回は居ない。織姫さんも忙しいのだ。

父ちゃんもボクも家を出る機会が少ないので全くといって良いほど道を覚えていない。下手すれば母ちゃんの方が覚えてるかもレベルである。

「…あら、市丸サン達じゃないツスカ」

「浦原」

「どうもツス」そう言って扇子をヒラヒラと仰ぐ浦原はなんか似合っている。とてつもなくしつくりくる。…っていうか街中で扇子を仰げるのが凄と思う。

「なんか困ってるようでしたけど…何かあつたんですか？」

「…迷つたんだボくら」

「せやからどないしよ、って話とつたところや」

「あー、そう言う要件ならアタシよりも適任な人がちょうどそこに」

「ホラ」と浦原が指差した先にはオレンジ色のツンツンとした髪の毛が特徴の男性が立っていた。

「ん？黒崎一護やん」

「げっ…浦原さんに市丸ギン…と、誰だ？」

オレンジ色はボクを見て指差した。思わずボクはその指をへし折る為、逆方向へと曲げてしまう。

「いてててつ!! てめえ何しやがんだよ!」

「人に指差したらあかんやろ? なあ碧」

父ちゃんの言葉に「うん」と頷くとオレンジ色は「初対面で刀向けてきた奴には言われたくねえよ!」と言った。

「まあまあ黒崎サン。子供相手にそんなイライラしないで下さい」

「いや、どつちかって言うところの親子にイライラしてる」

「そんなんでもええねん。はよ碧に自己紹介せえや」

オレンジ色はキツと父ちゃんを睨み付けた後ボクに向かって「黒崎一護だ」と言った。

「…あんたが織姫さんの自慢の黒崎くん、か」

「井上知ってるのか…?」

「うん。何回かお泊まりしてるし」

黒崎一護は「そうか」と言うと浦原に「で、何してんだあんたらこんなところで」と

言った。

「いやあ、市丸サン達が迷ったんらしくてツスね？黒崎サンに道案内を頼みたいんすよ」
「どうせ暇でしょう？」と言う浦原の言葉に黒崎一護は一瞬嫌な顔をするものの「どこに行きたいんだ？」とボク達に聞いてきた。きっと彼は面倒見がいいのだろう。

「指輪ってどこで売つとるん？」

「指輪？指輪なら……」

「あそこだ」と黒崎一護が指を差す。意外に近かったらしい。父ちゃんは黒崎一護に「おおきに」とお礼を述べると「行こか」とボクの腕をひいた。

「……指輪って何しに行くんだ……？」

「さあ。結婚記念日か何かのお祝いで購入うんじやないツスカね？」

ちなみにボクと父ちゃんのおかげた誕生日プレゼントはとてつもなく母ちゃんに喜ば

れ暫く上司に自慢をしたらしい。母ちゃんの上司からの怒りの電話と苦情の電話が来なくなるのは母ちゃん誕生日の2ヶ月先の事だった。

消えた碧を探して

「…松本、いるか」

十番隊隊長 日番谷氷獅郎は副隊長 松本乱菊の部屋の目の前に立っていた。松本の部屋から返事は返ってこない。日番谷が松本の部屋のドアを開けると案の定松本はいなく、日番谷は眼を伏せて「…またか……」と呟いた。

市丸ギンが松本乱菊の目の前で殺されたあの日。松本の目の前から市丸とはまた別人の大切な人物がいなくなってしまうらしい。らしいと言うのも日番谷は彼の事を覚えていない。

松本曰く日番谷は彼とは仲のいい間柄だったワケではないが面識はあったらしい。けれど日番谷は忘れてしまっている。否、正確に言うとな彼に関わる記憶を書き換えられた、と言うべきか。

松本はずっと探していた。市丸碧と言う人物を。ろくに休みも取らずずっと探していた。その姿はとても痛々しく日番谷でも見ていられない程だった。

「…そろそろ無理矢理にでも休ませるか」

日番谷は松本の居ない部屋を見て呟いた。



穿界門を開いて碧のいなくなった現世でずっと碧を探していた。けれど碧は見つからない。見つかる気配もなかった。

探しても探しても見つからない。ホント、碧もギンもあたしには行き先を告げず何処かへと行ってしまふ。探すあたしの身にもなつて欲しい。

「…乱菊さん」

後ろから話しかけられあたしは振り向く。あたしに話しかけてきたのは織姫だった。

「…織姫」

「こんな時間に出歩いちゃ危ないじゃない」と織姫に言うと「乱菊さんも危ないよ」と織姫が言ってきたのであたしは「別に人間にはあたしの姿は見えないから大丈夫よ」と言った。

「違うよ。乱菊さん、最後にあつた時よりも痩せちゃつてる。ちゃんどご飯食べてないんじゃないの…?」

「……食べてるわよ」

「嘘」

織姫の眼を見て「食べてる」とは言えなかった。あたしは顔を伏せる。

「乱菊さん碧、つて人探してるんでしょ? 私多分だけどその人知ってる」

「ホント…!?!」

「確か…乱菊さんみたいに綺麗に笑う人だった…と、思う」

「あたしみたいにか。考えたことも…なかった、わ」

なんだか急に眠くなっちゃった。織姫の焦る声が聞こえる。…ダメね、あたし。ギンと碧が居ないと…ダメみたい。



「創造主サマア。昨日まで夜遅くになに作ってたのさア」

マジシャンズ・レッドは五徹目の創造主サマに聞いた。創造サマは「感情を人間化させる装置を作っていたんだ」と言った。

「感情を人間化させる装置イ？一体何に使うのさア」

「私のせいで心の傷を負ってしまった彼女の為に作ったんだ。だがまさか…死んだはずの市丸ギンまでも人間化、いや一時的に具象化させるとは思わなかったけどね」

創造主サマは水晶玉に映っている倒れた松本乱菊を見て言った。



乱菊は白い何もない世界に立っていた。

「……」は……」

「ほんの少し会わんかっただけで随分久しぶりな気がするなあ、乱菊」

「ギン……!?!」

「久しぶりやね」そう言っただけであたしに手を振るのは紛れもなくギンだった。あたしは走ってギンに抱きつこうとする。しかしそれは叶わなかった。ギンは透けてあたしと触れることはできない。

「!?!」

「ごめんなあ乱菊。これでもボク死んでもうてるから触れんのや。今は無理矢理機械使
うて具象化して乱菊の目の前に現れとるだけや」

「触れんでも少しの間だけやったら喋ることはできる。だからそない悲しそうな顔せん
といて」ギンそうは言った。

「それにな、ここに来るのはボクと乱菊だけやないんや」

「え？」

「お姉ちゃん!!」

急に足元に現れたのは小さい銀髪の男の子だった。その子の顔は…小さい時の碧の顔にそっくりで思わず目に涙が溜まる。

「…ボク、碧!!でもね、碧だけど碧じゃない」

碧はそう言った。

「いつまでも乱菊が前に進めたらんから小さな碧がわざわざこうして逢いに来たんや。もちろんボクも乱菊に逢いに来たんやで」

「ギン…碧……」

碧はあたしの手に触れようとする。しかし触れることは叶わず透けてしまう。それ

を見て碧は悲しそうな顔をするが見上げてあたしの眼を真剣に見た。

「悲しまないで。ボクもギンも居なくなつてしまつたけれどいつかそう言う運命だったんだ。特にボクはね。ボクはあるべき場所に帰つた。だから探しても居ないんだ」

碧は真剣な表情で言う。

「まだ乱菊とは会えない。運命が巡つて、巡つて、巡つた時いつかまたボクに会える。その時は三人一緒だ」

「運命は巡るもの。乱菊とギンは運命の人だから輪廻転生してまた巡り会える事ができるよ」と碧は笑つて言つた。

「凄いんだよ。ボクは楽しい記憶しかわからないんだけど、ほとんど乱菊達といった記憶はね楽しかったんだ。抜けた記憶が少ない。それほど乱菊とギンはボクに影響を与えたんだ」

「だから前に進むんや、乱菊」

「…進む…?」

「碧が言うにはまたボクと乱菊はいつか巡り会える。それに、碧とはよ会いたいならボク探さなあかんし」

ギンの言っている意味がわからなかった。

「ここで乱菊とサヨナラしたらボクは輪廻転生するやろな。その輪廻転生したボクを乱菊が尸魂界で待つんや。そしたらまた会える。ボクが乱菊探し出す。そしたら今できんかったことやろな」

「何を、言ってるの…?」

「この先の言葉は来世のボクに聞いてや」

「来世でボクと会えたら碧とも絶対会えるから」ギンはそう笑って言う。「そろそろ行くか」と言った。

「うん。バイバイ乱菊。次は本物のボクと会ってね!!」

「また待たせることになるけど…ええか」

た。ギンが不安そうなん顔で聞いてくる。そんなギンの顔を見てあたしはクスツと笑っ

「当たり前よ！直ぐに探し出して見せるわ！」

「ならその日まで」

「「バイバイ」」

ギンと碧の姿は一瞬で見えなくなった。



眼を開けると織姫の顔がドアップで見えた。

「あつ!!起きた!!良かったあ…!」

「浦原さーん乱菊さん起きました！」と織姫は大きな声を出して言った。

「そうですか。それは良かったツス」

奥から浦原が出て来てヘラヘラとした顔で「いやあ井上サンが貴女を抱えて連れてきた時はさすがのアタシでもびっくりしました」と言った。

「織姫、迷惑かけたみたいね。ここまで運んできてくれてありがとう」

「あれ？部屋を提供したアタシにはお礼の言葉ないんすか…？」

「…なんか乱菊さんスツキリしたような顔してる」

「そうね。きつといい夢見れたからだわ」

「無視？無視ツスか？」

横で五月蠅い浦原の顔面に一発拳をあてると大人しくなった。あたしは織姫の頭を撫でると「かし作っちゃったわね」と言った。

「そんな！かしだなんて思っていないよ！」

「乱菊さんが元気になってくれて良かった」そう笑う織姫にあたしは「一護に泣かされたらあたしに言いなさい。成敗するわ」と耳打ちした。

「へっ、えっ：!?!な、な、な、何で黒崎くん!?!」

「あら?好きじゃないの?」

「てつきり織姫は一護の事が…」と言うと織姫は大きな声で「わー!わー!!」と言った。

「もう、乱菊さんつたら!」

「別にいいじゃない。隠すことでもないんだし」

あたしは織姫にもう一度「ありがとう」と伝えたと穿界門をくぐった。



「帰ったのか、松本」

「はい、隊長。今までのご迷惑、ご心配をかけてしまつて……すみませんでした」

あたしが頭を下げると隊長は「顔を上げる松本」と言った。

「もう、いけるな」

「はい。もう大丈夫です」

「ならいい」隊長はそう言つて書類に視線を落とす。

ギン、貴方があたしを見つけてくれるその日まで

、あたしは待つてるから。だからその日まで

あたしは十番隊で頑張るとするわ

市丸碧の誕生日

10月12日

それは市丸碧の誕生日である。が、碧は走っていた。つい先日父親の市丸ギンから習った瞬歩を駆使して走っていた。いや、正確に言うのと逃げていたの方が正しいかもしれない。

どこに行く!? 織姫さん家…? いや、即母ちゃんにバレておしまいだ。ならこの前会った黒崎一護…? いやいや、そもそもアイツの家知らないよ! ……じゃあ、浦原…?

浦原もバレル可能性が高い、そう判断した碧は浦原に協力を求めることにした。

碧は急いで、全速力で、浦原商店に向かう。

「浦原!!」

「…碧サン。せめてもう少し静かに入ってきてくれませんかね」

お茶を飲みながら店番をしていた浦原は突然開けられた戸にビビり肩を少しだけ動かす。碧とわかった瞬間は少しだけホツとした表情だった。

「こんな店ですけど泥棒かって少し焦っちゃったんスから」

「違うでしょ？ボクか父ちゃんか瞬時に見極められなかったただけだよね？」

ボクは父ちゃんの遺伝子をかなり濃く受け継いでいる。霊圧もその濃く受け継いだ1つで、霊圧を消していきなり背後などにまわられるとボクか父ちゃんか一瞬わからなくなる、と母ちゃんが言っていた。

浦原は苦笑いを溢すと「で、今日はどんなご用件で？」と話の流れを変えてきた。

「ボク、尸魂界に行きたいんだ」



「ひーつーがーやーくんっ！」

「……なんだ平子」

背後から「わっ」と平子は日番谷に声をかけるが日番谷は大して驚いていない。逆に冷静な顔で後ろに振り返って来るので平子の顔は不満げな顔に変わる。

「なんや、のり悪いなあ」

「乱菊ちゃんなか肩びくつかせて驚いてくれる言うのに」と平子は言う。平子は少しニヤニヤしているのできつとその時の乱菊を思いだし笑っているのだろう。

「俺は松本じゃねえ」

「せやろな。逆に一緒言われたら俺寝込むで」

ケラケラと笑う平子を見て日番谷は眉にシワを寄せる。

「…何のようだ」

「いやあついこの前乱菊ちゃんが碧の誕生日い言うて自慢してきおったからなあ。どないなモン買ったか気になってん。乱菊ちゃん居るか？」

「…現世だ」

「え？」

「だから！仕事サボって現世に居るって言うてんだよ！！」

カツと眼を見開き言う日番谷は相当お怒りのご様子だ。その日番谷の圧に押されて平子は「そ、そうか……」と語尾が段々と小さくなっていく。

！！

平子と日番谷の近くにある気配がした。辺りを見渡すと「いててて…」と頭を押さええている子供の姿を発見する。

「…雑過ぎ。お陰で落っこちた……」

銀髪ふわふわとした髪に糸目な目。白い肌に身長とは似合わない痩せた体型。そして……市丸ギンと似たような霊圧。一瞬市丸ギンかと錯覚してしまう程霊圧は似ていた。

「…ギン、ではないなあ。まあちびっこい頃にそっくりやけど」

「誰や、アイツ」と平子は少し警戒した声で日番谷に聞く。日番谷は「はあ」とため息を出すと言った。

「松本の息子だよ。名は確か……碧」



「乱菊さんやめた方がいいって、碧くん絶対嫌がっちゃうよ……!」
「あら? これでも毎年恒例なのよ?」

現在松本乱菊は市丸ギンと言うストップパーを家に置いて、井上織姫と現世でショッピングをしていた。ちなみにこのショッピングの目的は碧の誕生日プレゼントを選ぶ!と言う目的である。

現在松本乱菊達は空座ショッピングモールと言うデパートの女性服コーナーを歩いていた。

「毎年恒例でも！碧くん男の子なんだから女装は可哀想だよ！」

「んー、けどねえ。これがあたしからの誕生日プレゼントだし……」

毎年、毎年。ギンが寝付いた後、乱菊は碧の身ぐるみをひつぺ剥がして、誕生日プレゼントと言う名の嫌がらせをしていた。

織姫はその嫌がらせを「やめてあげて」と言うのだが乱菊は「この服も似合いそうね」と全く打ち合う気がない。

ピリリリ

織姫の携帯がなる。

「誰から？」

「えーと……あ、市丸さんからだ！」

ギンから連絡が来た織姫は慌てて通話ボタンをおし、通話を開始する。

「はい、いますよ。え？いないですけど……ええー!？」

織姫は「わ、わかりました！こつちでも探してみます！」と言って勢いよく通話を切った。

「何かあったの？」

乱菊の質問に織姫は顔を青くして答えた。

「あ、碧くんが…居なくなっちゃったって!!」



「ボク、尸魂界に行きたいんだ」

浦原はその言葉を聞いて驚きの表情を見せる。

「…確かに尸魂界を追放されているのは市丸サンですから碧サンは行けると思いますが
ど……理由を聞いても？」

碧は神妙な顔で頷いて言った。

「…もうボクは女装したくないんだ!!」

「……………」

その後、詳しく話を聞いた浦原は頷く。

「…わかります、その気持ち。アタシも若い頃は夜一サンの無茶振りで女装をさせられた
ときがあったんですが…あの恥じと皆の冷たい目、大きく嗤われた口……全てが今で
も鮮明に思い出せます」

「わかりました、お手伝いしましょう」そう言う浦原に初めて碧は尊敬した。

「何処の隊舎に行きたいですか？アタシ、設定しておきますよ」
「…十番隊で」

浦原は微笑みながら「わかりました」と言った。



「で、松本の息子が一体何のようだ」

「まあまあ。そないシワ寄せたらあかんって。ビビるやろ？碧が」

「市丸と松本の餓鬼がこんなところでビビってたまるか」

「あ、別に大丈夫です。世の中には色んな人いますから」

「……日番谷よりも大人やんけ、碧」

ヨシヨシと平子は碧の頭を撫でる。碧は気持ち良さそうに眼を細めた。

「で、遠渡遙々尸魂界にどうして来たん？ってかどないして来たんや」
「……逃げて来ました、母ちゃんから。尸魂界に来た方法は浦原です」
「…アイツは一体何をしたんだ……」

遠い目をする日番谷を見て碧は「アハハハ」と乾いた笑いを出した。

「母ちゃんって沢山サボってるんでしょ？お手伝いができることならボク、やりますよ」

「(本当に松本の息子か……?)」

「(顔はギン似やけど……性格はどっちとも似とらんなあ。しつかりしとるわ)」

日番谷は目頭を押さえて言った。

「助かる」



「やっぱり碧くん嫌だったんですよ！乱菊さんがやめないから！」

「そんなに嫌がってたのね…」

「ボクが寝とる間にそないなことしとったん!?!どうりで碧が成長していくに連れて段々誕生日近づくと嫌な顔する訳や」

「ごめん、碧」と顔を俯かせる乱菊。勿論この場には碧はいない。

「悔やんでも仕方がないですよ！早く碧くん探さないと！」

「でもどこにも…」

「まだ探したらんとこあつたやろ」

ギン、乱菊、織姫は唯一探していない場所、浦原商店へと向かった。



「松本副隊長の息子さん!? す、すみません、こんな手持ちしか持っていないんですが…」

十番隊隊士達はとても優しく、碧が乱菊の子供だと知ると沢山のお菓子やジュースを持ってきてくれた。

「いい隊ですね」

「ああ。なんだかんだでできる奴らばかりだ」

「それにしても……」日番谷は視線を下に落とす。

「済まねえな。ソレやってもらって」

日番谷の言う「ソレ」は今日乱菊がやる分の仕事である。日番谷が1の書類のやり方を教えるとなんと碧は10の書類のやり方を覚えた。

そして碧は言ったのだ。

「どうせ母ちゃんサボってるんでしょ？ボクが尻拭いします。下さい」

と。母親よりもしつかりしている。日番谷はホツとする。松本のダメな部分を碧が

受け継がなくて良かった、と。

顔だけだったら正直言つて乱菊に似てもギンに似てもモテることは間違い無しだろう。日番谷は少しの間だが碧を観察して思った。「コイツは絶対苦勞人になる」と。

「てめえはしつかりしてるな」

「ありがとうございます」

碧は脅威的なスピードで書類を片付けた。



「碧サン？ここにはいませんよ」

「…どこ?!?碧っ!!」

パニックになる乱菊にギンが「まあまあ」と声をかける。

「すぐに帰って来るやろ、碧も」

「…そうかしら」

「せやせや。だから家に帰って碧待とう。な？」

ギンに説得された乱菊は「わかったわ…」と浦原商店を出ていく。出ていく乱菊を見て織姫は慌てて乱菊の後を追った。

「で、どこにおるん？碧は」

「お見通しでしたか」

「当たり前や」

浦原は「敵わないツスね」と笑うと「尸魂界に今、いますよ」と言った。

「…尸魂界、か」

「はい。きつと日番谷サン達と仲よくなって帰ってくるんじゃないツスカ？」

浦原がそう言うと同時にギンの携帯がピロリンとなった。メールである。メールの送り主は平子でそこには写真が。平子と碧は肩を組んでピースサインをしており、それ

にしても無理矢理巻き込まれている日番谷の写真だ。

そして平子からは「俺達が責任持つてギンとここに送り返すわ。だからちよつと待つてな」と書いてあつた。

ギンはソレを見て「仲良うしとるみたいやわ」と笑つた。

碧が返つてきたのはギンにメールが届いて約1日過ぎた日の事だつた。



「碧っ!!」

碧の顔を見たたん乱菊は抱きつく。

「ごめん、ごめんね!!」

「…もう、しない…:…?」

「しない!!」

「そうか。なら帰るぞ、松本」

碧の声とは違う若々しい声に乱菊はギギギと壊れた音をたてるロボットのようになつた。

「な、何でここに……隊長……」

「碧を送り届けるついでにな。てめえも回収しようと思った」

「……あたし、碧の誕生日を祝わなきゃ……!」

救いを求めるような表情で乱菊は言った。それを見た碧はにこりと笑い……

「行つてらっしゃい。今度はいつ逢えるかな?」

と言つた。乱菊は日番谷に引きずられる。

「う、裏切り者おおお!!」

碧の遅めの誕生日パーティーはギンと二人つきりであつた。

次回の i f 物語

皆、おはよう？それともこんばんわ？碧だよ。今回この『i f 物語 市丸ギンの息子』の主人公をやらせて貰っていた市丸碧だ。

だが今日でボクの物語も終了だ。次回はなんと…あの忌々しい『藍染』が主人公をやるらしいんだ。

「忌々しいとは酷いよいよだね、市丸ギン」

どこからか現れた藍染惣右介（？）碧は嫌そうな顔をする。

「げっ…藍染惣右介…!!」

「やあ、次回の主人公藍染惣右介だ」

手をヒラヒラと振る藍染に碧は小さな石を沢山投げる。

「…何をするのかな？碧」

「どっか行け！この物語はボクが主人公なの！まだお前の物語は始まってないの！！」
「別にいいじゃないか。ここで宣伝しとかないとだろ？」

藍染の物語はちやつかり次回作の宣伝。本当にちやつかりしている。碧は顔を赤くして藍染（？）に怒鳴った。

「五月蠅え！偽物藍染が！本物のヨン様じゃない癖にいきがつてんじゃねえよ！！」

「偽物藍染」「本物のヨン様じゃない」と言う自分を否定させる言葉が勝手に触ったのか
藍染（？）もキレる。

「う、五月蠅いな！！こちとら頑張ってるの！！頑張ってるの！！文句言うな！！」
「はーい、皆さん〜！化けの皮剥がれ落ちましたよー！」

パンパンと手を叩きながら言う碧に藍染は「化けの皮ってなんだ！！」と怒鳴る。しか

し碧は涼しい顔をしてどこ吹く風である。

「はい、黙ってね、どっか行ってね、ここボクの物語だから」

「……だーまーりーまーせーん!!ここまで来たらとことんやってやりますう!!」

「……キヤラ崩壊もはなだたしいんだよ、糞が」

「お前もな!!」

約数分、ギャーギャーと碧と藍染(?)は言い合う。疲れ果てた碧と藍染(?)は肩を上限させて「ハアハア」と肩で息をしていた。

「…やるな、藍染(仮)」

「褒められても嬉しくねえよ。ってか、(仮) って言うな」

「でも(仮)はあつてるでしょ? 転生的なあれなんだからさ」

「いやまあそうなんだけどね? うん、そうなんだけど…。逆に俺はこのヨン様に成り代わって良かったと思うんだよなあ。本当の世界でも俺はマトモな暮らしはしてなかったわけだし」

「人間色々あるよねえ」

「ねー」

どうやら碧と藍染（仮）は仲良くなったらしい。今となっては肩を組んで「猫踏んじやった」を歌っている。何故「猫踏んじやった」をセレクトしたのかはわからない。

「お前なら次回の主人公いけるよ、うん!!」

「過去の主人公にそう言われると嬉しいな、うん!!」

ガシツと腕と腕をぶつける碧と藍染（仮）。

「主人公には波乱万丈な人生しか送られねえって決まってるんだ。頑張れよ!!」

「おうともよ!!」

次回作『i f 物語 藍染に成り代わった男』を見て貰えるとありがたいです。本当に
ここまでのご愛読ありがとうございます!!!